

324-222



阿
彌
陀
佛
乃
研
究

44. 2. 16
陸榮廷

矢吹文學士の「阿彌陀佛の研究」につきて

佛教の歴史ほど、範圍宏大に、内容の紛糾たるは、他に類例少なかるべし。佛陀出世の前後につきては、外圍と内包と共に稍歴史の真相を知り得る端緒を得たるも、滅後の傳播分派につきては暗黒の點多く、進んで滅後數百年、西北印度より中央アジアに傳播し發展したる跡に至りては、殆ど全く暗黒に埋もれ居る歴史といふも不可なし。近頃東西の探險者は、西域干闥の方面にて幾多の有益なる發見をなすに至りしも、その史料多くは李唐以前に及ばず。阿育王以後笈多王朝に至るまで前後六七百年の佛教史は、五天竺より中央アジア並に支那に亘りて、複雑なる發達をなせしは確實なるも、その事情と内容とは、何れの方面より着手してその秘密を闡明すべきや、殆ど亡羊の嘆なき能はず。而してこの間こそ實に所謂大乘佛教が勃興して西北印度より東亞に傳はりし時代にして、爾後の佛教は皆この間の發達を繼續し完成したるものに外ならず。爾後支那にありては、六朝の諸宗勃興、李唐三百年の光彩、日本にありては、奈良朝の諸宗、平安朝の天台と眞言鎌倉時代の新

佛教等、皆その時代に應じて特色を有し、又意義を有したる事なれば、それ等の歴史的研究は、又それ自らにて獨立の價值ありとはいへ、而かもその依つて出てし源流が暗黒の中に葬らるる間は、多くの場合に甚しき遺憾あるを免れず。この六七百年暗黒の佛教史は、以後東亞佛教の源泉となりしものにして、その根本經典は多くこの間に出てしもの、如く、その信仰の大本、儀式の根底も大抵この間に養はれ、その間を縫ふて美術と傳道との複雑多様な歴史あり。此の間の佛教史研究は、又それ自らのために必要にして趣味多き問題たるのみならず、又後世の東亞佛教を闡明する上に於ても、交渉甚だ多し。

この研究は決して一方面の探求を以て盡し得べきものにあらず、あらゆる方面に互りて着々探求を遂げ、終にその結果を總合大成するの覺悟なくんばあらず。この研究方面を分類して見れば、大畧左の如くならん。

- 一、信仰の内容並にその對象
- 二、信仰に基き並に哲學思想によりて組織したる教理
- 三、支那に於ける譯經事業並にその中に見はれたる信仰の變遷

四、大乘經典の文學上の研究、即ち言語と本文との研究

五、美術、特に佛像並に建築裝飾

六、印度全般の思想界、並に文學言語

七、印度並に中央アジアの社會的狀態並にその間の傳道事業

此は事實發表の上の分科なるも、亦之を信仰の内容よりすれば、別種の分類を取り、その一科毎につきて上述の部分研究をも遂げ得ん。即ち

- 一、一般に小乗有部の哲學並に俱舍の教理
- 二、戒律と戒行
- 三、般若の空觀、中觀の哲學
- 四、瑜伽の觀行と彌勒の信仰
- 五、華嚴並に方等一部の神話的萬有神教
- 六、法華の實相觀、釋尊中心の佛教
- 七、淨土往生の信仰、阿彌陀佛の信仰
- 八、密教思想並に一般に咒法の信仰

此は固より大體の分類なれば、その間互に交渉あるはいふまでもなく、又この中の或るものには先づ分科の或るものを適用し得ざる事もあるべし。されど兎に角、此の間の佛教研究には錯雜の事多く、その材料亦今日にありては不備の點多きが故に、この何れの方面より着手するも、多くは始めて荆棘を排して未開の地を拓くの感なきを得ず。その究竟の結果を期し得ざるは何れの研究者も始めより之を覺悟するを要す。

今矢吹文學士の阿彌陀佛研究を見るに、實にこの困難なる事業の一方に突入して、荆棘を排せんとしたるもの。阿彌陀佛の信仰は、密教と相並んで、元來佛教中最も特異の發達をなしたるもの、釋尊を中心とせずして別箇の佛陀を信仰の中樞におき、理想を現在の諸法におかずして西方の淨土に移し、戒定慧三學の修行を棄て、他力易行の信仰に移りしものなり。その信仰は、支那にありて五世紀の後半、東晉の末に發芽せしも、そが一流の思想となりしは、陳隋以後にして、その真に一箇の信仰系統として、宗教の實力を有するに至りしは、日本にありては平安朝末期より後にあり。若し真に一箇の宗教的實力としてのみ見れば、阿彌陀佛は日本佛

教史の一題目たるべし。然れども、之を現存の佛典に見ても、その信仰が印度に發し、佛教の傳播時代には、佛教のあらゆる方面に隱見したるは、疑ひを容れざる事實にして、一系の宗教として分化獨立せざりしも、一部信仰の實力として存せしを見る。日本に於ける阿彌陀佛と彼の印度や中央アジアの阿彌陀佛と、直接に血脈相通はざりしとするも、此の方面の淵源は彼の方面に求めざるべからず。又此の佛教は假令一箇の組織を具へざりしも、而かも極めて有力なる感化を施せり、その大本たる本誓發願の信仰、願力救済の宗教は、佛教の中に出でても、尙特色ある一箇の新佛教として特に注目を要す。此に於てか、此信仰の起源は、夙に宗教史家の疑問を惹き起し、之を印度教に求むるもの之を西來の感化に求むるもの、紛々として歸着を知らず。種々の推測は世に提出せられしも、一としてその真相に究竟の解釋を與へたるものあらず。近頃日本の學界にても、この問題の研究現はれしもの數者あるも、材料を盡さずして、一部の見解に依りて全體の斷案を下したる觀あるもの少なからず。例へば、阿彌陀并に極樂の名義に關してすら、批評的研究を以て許すべきものの甚だ少きを憾とせざるを得ず。この問題の接觸する所は

多方面なるも、概括し來れば、その第一着手は、阿彌陀佛信仰の根本經典たる大小二本の阿彌陀經につき、嚴密なる批評研究を施すにあり。その經文の一本梵本にして現存するものは、幸にして殆ど世界最古の梵文寫本たる榮譽を有するも、而かも古來傳へ來りし多様な傳來本の一種たるに止まる。諸種の漢譯を比照し來れば、本文批評の問題は、單に一梵本の研究に止まるべからず。その研究は、及びて支那に於ける佛典翻譯の變遷に關聯せざるべからず。若し佛教の經典が全部その原本にて保存せられ、その本文の研究、言語上の探求によりて、成立の年代若しくは流行の跡を明白に告ぐるものあらんには、支那譯の經文は、單に別種の言語に譯したるものとしての價值を有するに止まるべし。然れども、現在我等が知り得る梵本等は、その分量に於ても甚だ少く、その寫本亦甚だ古きものなく、文書としての研究は、尙周到精確なる結果を得ず。さればこの方面に於ける研究は、決して一日を緩うすべからざると共に、支那譯經の事蹟とその遺産とは、佛教史研究の上に重大なる意義を有せり。余が先に四阿含の研究にて到着せし結果に鑒みても、矢吹君がこの研究に於て、特に序論の三、附録の三と四明かにせられし結果を見ても、近頃

推尼文學士が羅什を中心として譯經の跡より佛教教理の發達を研究せられしもの(未刊)に見、その他諸家の研究を集め見て、譯經史の研究の重要にして又收穫の多きを知るに足るものあり。即ち支那譯經の歴史は、又各々その時代と、その譯家の故郷、即ち西域若くは印度の各方面にて流行せし佛教の形態并に内容を窺知し得る屈強の材料なり。

矢吹君の本研究は、大小阿彌陀經の本文研究に於ては、寧ろ疎なるも、その上に又その内容の分析一項は、終に印刷せられざりき、譯經の上よりの研究は、特に周密なるものあり。即ち阿彌陀佛教本依の經典のみならず、傍依、參照に至るまで、弘く譯經の中にその痕跡を探り、且つ阿彌陀佛教以外、特に彌勒中心の佛教經典につきても、精細なる觀察を施したれば、内外相照らして、譯經史の中に現はれたる材料は、自在に之を支配するを得たり。されば本研究が直接に目的とする所の外、佛教の他の方面に關しても、所謂暗黒六百年の佛教史に光明を與へし事決して少しとせず。

次に阿彌陀佛教の史料として、美術上の遺物は、將來には尙多くの光明を齎らす

へきも、今日に於ては未だ多くを望むを得ず。矢吹君は彌勒佛像については多く語らざれども、觀音の方面にては稍此の方面の注意をなしたり。余の推測よりすれば、今日まで印度にて佛像と稱するものは多く釋迦となせども、その中にて、阿彌陀佛の像なきを保せず。此の點にては先に藤井宣正君が實地を探求し、島地大等君がその密教の知識に照らして之を整理しつつあるものあり、之に加へて將來尙中央アジアの發掘に依りて一層の材料を得ん時には、此の方面の光明は益々重要を加へん。然れども今日、此の方面にて多きを矢吹君なり、その他何人にも求むるは、難を人に強ゆるものといはざるべからず。

次に印度の思想界一般の風潮につきても、大叙事詩并にプラーナ文學の研究尙未だ十分ならざる今日、多くを望むべからざるは明かなり。而かも矢吹君は得らるる限に於てはこの方面をも怠らず、梵天并にギシムとの交渉につきても一往の研究をなせり。然れどもギシムに對する信仰の發達、即ち信仰道 Bhakti-marga との參照の如きは、今一層の研鑽を経來らば、佛教信仰の内容につきて尙發明する所あり得べし。又第一世紀に於けるキリスト教の印度傳道の如きも、今後の研究には

參照の必要を生ずる事あるべしと信ず。

事實の上より云はゞ根本にして、研究の上より云はゞ最後の結果となるべきは先に第一分科として掲げたる信仰内容の研究なり。矢吹君は大體に於て、阿彌陀佛に對する信仰を釋尊に對する信仰の發達若くは變形に求め、本願救濟、慈悲攝取、國土成就等信仰の内容、並にその幫助として神話傳説をも、多くは佛教本來の性質、内部の發達として解釋するの途を執れり。而してその發達變化の跡を探るにも、能くその信仰内容に鑑みつつ、又經說叙說の外縁にも注意を怠らずしてその研究を進めたり。固よりこの方面に於て佛教外の勢力、他教の影響といふ事も等閑に附する能はざるは勿論なりと雖も、今日までに提出せられし此の方向の學説には、輕浮なるもの多くして、未だ吾等を首肯せしむべきものなし。矢吹君の内部發達の研究は、その一切を盡したるものにあらざるも、その研究の方針に於ては余の特に贊同を表する所なり。歴史上の佛陀に關する一章は、比例上稍長きに失する感なきにあらざるも、滅後の佛陀と過去佛並に未來佛の信念より、進んで本生本願、菩薩の願行、法身並に報身の觀念を追跡し來りて、阿彌陀佛の性質を主として内部の

發達に依りて解釋せんとしたるは、方法と共に内容に於ても、極めて有益なる結果（假令へ全く究竟の決論に到らざるも）を得たりといふべし。それより進みて、阿彌陀佛に對する信行、往生淨土の理想、罪惡と救濟（此の最後の項につきて折角の五惡段分折を削除せしは甚だ遺憾なり）の諸項に至りては、佛教信仰の變遷と印度教思想の發達とに參照して、着々その依つて來る所を明かにせり。此等諸項の研究に於ても、阿彌陀佛教の助縁の方面がその本分の内容よりも多きは、功を一簣に缺くの憾なきにあらざるも、而かも此の信仰内容の深刻なる發達は、印度西域よりは寧ろ日本の淨土教に求むべきものなるを思へば、矢吹君の研究に對して甚だしく之を責むる能はざるべし。然しながら、此等諸項につきて、印度に於ける阿彌陀佛教の二師天親龍樹に觸るゝ事の甚だ少なかりしは、重大なる缺點にして、又甚だ遺憾とする所なり。キリスト教との對照は、大體に於て當を得たるも、是れ亦尙靴を隔てて痒さを搔くの感なきにあらず。此等の點は、矢吹君の研究が日本淨土教に入りて深く進みたる後には、その結果より根本に、末流より源泉に、研究看破の資料を與ふる事あるべし。偏に之を他日の進境に望むや切なり。

若し夫れ一々の細目に入らば、議すべき點も少なからざると共に、大に推稱すべき箇處見地亦甚多きも、今は一々之に入らず。之を要するに、この研究は、佛教史上中世の暗黒に對して、大膽に快刀を振ひ、細心に材料を蒐集して、未だ問題として世に意識せられざりしものを問題として提出し、又その間に解釋し得るものには有力なる解決を與へたる點少なからず。その結果は、解決を與へたる方面は、或は疑問として残れるものよりも少き感なきにあらざるも、是れは研究問題の性質上已むを得ざる事にして、學者の研究としては、場合によりては問題を提出し得たるを以て甘んぜざるを得ざる事あるべし。解決を急ぎ、一分の資料を以て全部の速斷をなすが如きは、却つて學者の名譽にあらず。

尙一事の附記すべきものあり。矢吹君は淨土宗門の人にして、法然上人の末弟なり、即信仰としては阿彌陀佛教の信者なり。信者にして此般の研究をなし、特に着々批評分析をなすが如きは、信仰に忠ならざるものなりとの感は、或は同門一部の人に起るなきを保せず。然れども歴史は歴史にして、信仰のために抗ぐべきにあらず。歴史の事實を恐るるが如き信仰は、斷じて眞の信仰にあらず。迷ひこそ

真理の光明を恐るれ、真理に随順したる信仰は、如何なる歴史批評をも恐るるの要あるなし。矢吹君が斷乎として歴史批評の利器を執りて、その宗教の根源を確めんとしたるは、云はゞ人が作り事の系圖に甘んぜずして、眞の祖先を探るに似たり。余を以て之を見れば、阿彌陀佛の信仰は、決して法藏比丘なる現實界の人物に發せしにあらざりて、佛教の信仰が本願他力の方面に發達したる理想の結晶なり。現實のみを重んじ、地上の經歷に執着するにあらざれば、阿彌陀佛の信仰を維持する能はざるが如きは、その根本に於て物質主義、現實主義の妄想を脱せざるに出づ。複雑なる發達を經、諸種の方面より資料を吸収して、多くの歳月に亘り、弘潤の方處に跨りて、而かもこの信仰の中心、理想の救護を結晶し得たるは、人類宗教史上の偉觀、阿彌陀佛教徒祖先の光榮にして、又佛陀慈光の隨處發表といふべし。此の如き理想の結成と、史上現實に現はれたる人物と、その感化の様態に於ては、或は一ならざるべし、従つてこの研究の結果が、多數淨土教徒の無邪氣なる現實的法藏因位觀に動搖を與ふる事はあらん。然れども、この振盪を經ても、信仰の根底、理想の中心にして動搖せずば、この振盪は又新鮮なる結果を作るの好機會となるべし。この

書は元來學術上の研究にして、多數の信徒に對して信仰に直接するため公にせらるるものにあらず。然れども淨土門の教學は、今後永く、無邪氣に阿彌陀佛の紹介者を歴史上釋尊の金口に求め、その因位を地上現實的法藏比丘に托し、又極樂世界を以て言葉のまゝに西方十萬億土の快樂郷として安んずべきにあらず。法然上人が、別の仔細候はずの宣言は至誠の發表にして、現實主義の盲信に安んぜよとの意にはあらざるべし。

さえられぬ光りもあるをよしなべて

へだてがほなる朝霞かな

歴史研究を以て此の雲霧と觀するが如きは、尙眞にさえられぬ光りに接するの眼光なきものならんのみ。

明治四十四年一月廿五日

姉崎 正治

自序

古往今來宗教の現象何ぞ限らん。されど要は神人の關係に歸す。時處位の相異は各處神觀の差別を生ぜし
も、理想は元と現實に出づ。畢竟各代思想の精華を以て、種々に寫象し把住せるに過ぎざるのみ。古來佛教
家が教法の遇不を以て衆生機縁の熟不に歸せるが如き、偶々以て思想の變轉を言明せるものに非ずして何
ぞ。法相宗には義類の三時と共に異時年月の三時あり。古來各宗開祖が心血を澁ぎし教判は、其苦心と其巧
妙と、及び是によりて活ける其の信仰の事實とは、到底没すべからざる功績なりと雖も、亦一面より見れば多
くは異時の發展を佛一代に縮寫せるの觀なきをえず。三論に僧詮あり、禪に北宗禪あり、天台に道邃あり、華
嚴に澄觀、宗密あり。思想の發展は到底掩ふべからざる事實なり。ケルケゴ一氏曰く、人眞ならざれば眞神
も僞なり。人僞ならざれば僞神も眞なりと。古來宗教は神の人を作りし信仰あると共に、人の神を作りし
史實あるを忘るべからず。

原始佛教は固より吠陀、婆羅門教の諸神を否認し去り、一に内觀と正道との努力によれる無神教なりしと
雖も、佛陀人格の偉大なると印度教學の風尚とは、然かも能く宗教たるを得たりしなり。佛陀の化他に於け
る懇切と慈悲とは、彼等は遂に現前の師主佛陀に歸托せざれば止まざらんとせり。依法不依人の教訓はそも

此傾向を反證するものに非ずして何ぞ。其歸托の中に他力信賴の萌芽は既に業に存せるものと謂ふべし。先づ阿含經を見、次いで佛傳を讀み、更に大乘經典を一讀するに、其間、觀念哲學と神秘主義と譬喩と敘説とは彼此交雜して、其始め自知、自覺、自作證を勸めし佛陀が、如何に慈悲救濟の面影を表はし來りしかを看取するをえん。更に頭を轉じて佛陀在世時の化益の態度を見る時、吾人は髣髴として源泉と末流との關係を認むるを得べし。然れども本末始終は常に一の字を畫するが如くしかく容易ならず。山あり谷あり、崖あり岡あり、彼に曲り此に折れ、迂餘迴繞、流れ流れて末流となる。山とは何ぞ、崖とは何ぞ、曰く各時代に於ける人文思想の發展是なり。各代の思想に順應し調和し、從つて發達し、法報應の三身となり、三世十方の諸佛となり、五却兆載の願行は、今や廣大なる果位に到達し、萬德具備、極樂今現在說法の阿彌陀佛を生ずるに至れり。一切經典中一經の主とする所、阿彌陀佛にあるは大、小、觀、の三經にして、就中阿彌陀佛に關する根本聖典は無量壽經となす。

無量壽經は原譯共に多少の相違あるも、其阿彌陀佛の因願果成の敘述に於ては諸本の等しく一致する所なり。若夫れ當經中より本願思想を控除せば、餘す所は序分と流通と他二三所の文に過ぎず。此經の根本思想は一に本願にあり。然るに古來此本願を解するに異說少なからず。且らく同一魏譯の無量壽經に就きても人師所見を異にす。況んや原譯各本の異文につきて、是が立名と分類となさんか、異論は遂に底止する所なからん。さはれ吾人は教義の解釋をなさんとするものに非ず。要は佛陀他力の本願が佛教史上に如何なる旨

趣を有するかを見んとするにあり。事の成る必ず因て來る所あり。顯中の密、密中の顯、急轉直下瀑布となり深潭となるは、元と細流瀑々、鐵中に埋もれ、岩底に隠れ、而も一脈續々として絶えざるものあるに出づ。無量壽經の本願數は最小數の漢吳譯すら尙二十四を數ふ。之に次ぎて宋譯卅六、梵本四十六、魏唐は更に増して四十八となす。諸種の思想を合糅せりと雖も、要するに勝妙の佛身と、嚴飾の淨土と、是に加ふるに他力の信行とを出でず。古來の註釋者多くは三類七重となして、大要、攝法身、攝淨土、攝衆生の三種となるもの亦此意に外ならず。是に由りて、本論篇目を佛陀と淨土と信行とに分ち、更に罪惡觀を加へて四面の考察を重ねたり。若夫れ此等思想發達の成果を一大パノラマに比せんか。佛陀論と淨土論と信行論とは正しく前面の光景にして、印度諸教學は其背景たり。更に罪惡觀は其反面の暗道に比するを得べし。又若し思想の本源を三藏に求むれば、定戒を除する經律は、佛陀と信行との起原にして、慧を除する論は是等各般の思想を説明し調和すべき註釋と見るを得べし。

エーヘル氏が會て未開墾地に比せし、印度の歴史は今尙磨滅の碑文なり。紀元前の佛教歴史は前後たゞ二回の燈明を點せられたるあるのみ。即ち阿育迦賦色迦二王の時代のみ。是によりて無量壽經の成立年代は遂に逸として捉ふべきなし。たゞ僅に起信論、大論及び十住毘婆娑論は比較的著者と年代とを明かにし得べく、當經成立時代の思想に最も近きものとなす。各篇多くは起信論の思想に籍を止めたる所以亦茲に存す。若し夫れ密教の三摩耶(本誓)を辿り、諸神の能力を誓願の原形となし、吠陀より優婆尼沙土に移り、遙かに後代の

印度教易行派に通ずる思想を精査して、阿彌陀佛信仰の表裏を觀察するは頗る有益たるを知れども、惜むらくは現在の吾人にとりては企圖可能の限界を超越せり。たゞ吾人は自力主義の佛教が如何にして他力的宗教となり、人心靈性の奥に潜める或る要求は、佛性自爾の開発と其靈妙の勝徳とを如何に註解し、如何に形容せるかを見、特殊事象の中に本來普通の意義あるを研むれば足れり。阿彌陀佛及極樂は一見すれば譬喩と叙説と構想とを出でざるも、かゝる事相經典が何故に論師佛教の間に發生し、延いて後來北方佛教中に一大發展を遂ぐるに至りしか。之を外にしては彼の猶太教、パルサイの徒、并に波斯教は自律主義の結果遂に形式主義に終り、之を内にしては佛教論宗が其瀕落の末路を見、又去て同じく經宗中にも理論宗より多くの淨土教家を出せるに見れば、其信仰は決して輕々看過すべきものに非ず。各代の高僧が此の信仰によりて悟徹し修養し、活きたる標本を残すに至りし其源泉は、靈性の要求に對し少なからざる豫言を含めるものあり。蓋し哲人觀想の禪榻には、本來の面目を求めて、日面佛、月面佛を見るも可ならん。父母所生の身を以て、即證大覺位を見るもよし。初發心地に便成正覺を悟り、自然の彌勒、天然の釋迦を顯出するも亦甚だ不可ならず。然れども理佛性の視線は如何に高きも、行佛性の歩行は必ずしも之に伴はず。由來宗教は平等普遍を主義とせざるべからず。釋尊は此主義によりて起てり。辟支佛は遂に佛教最終の理想に非ず。同一乗の教法は雖て萬人を救済すべき共通の道とならざるべからず。慈悲本願の教主、他力回向の眞行はかくの如くにして、深奥なる旨趣を有するものといふべく、華嚴經が普賢の語を假りて、此事佛を最終の歸趣としたるは大

に味ふべく、獨り華嚴經のみならず。起信論は專念彌陀の思想を鼓吹し、龍樹の大論亦此意味ありと云ふ。廣く事例を諸經に求むれば實に阿彌陀佛は諸經所讚の佛陀なり。抑も般若佛教が不言の空を表はさんとして、數百の經卷をなし、名によりて名を遣らんとして反つて多くの名を生ぜり。拍手もと騒擾を靜むるにありも、或は反つて喧鬧を増すの嫌なきに非ず。蓋し論理の思索は遂に其底止する所を見ざればなり。古來佛教の學匠が其最終歸趣を淨土門に於て求めたるは、恰かも砂塵亂電の暴天に會ひたる人が、難を崖下に避けたるの觀あり。之を要するに無量壽經は傳道書にして、學書に非ず、史書に非ず。但し此經に於ける混雜せる事相、幾多の矛盾は固より當代思想の産物なるも、そも人性根本の矛盾に對する慰安の一顯現ならずや。本書研究の方法は無量壽經を中心となし、助くるに正傍明の淨土諸經典を以てし、縦と横とに通じて廣く佛教他力思想の稽查をなすにあり。序論及び附録は主として阿彌陀佛信仰の外面の事情を探り、併せて本論の不足を補ひ、本論は正しく其内容の由來する所を尋ねるにあり。

惟ふに大乘佛教の研究は材料の蒐集、及び其整頓、尙未完からず。考證往々にして正鵠を失するものあり。況んや批評をや。急驟大膽なる推論は吾人の斷じて避くべき所なりとす。吾人豈靦然として阿彌陀佛信仰の來由を究明すと云はんや。吾人は唯だ其端緒を開くに過ぎざるのみ。

本書は元と予が大學卒業論文に基き、其短縮と修正とに半歳餘を費し、本年四月漸く稿を脱し、爾來久しく篋底に藏せしが。頃者故ありて本文中二三所を除き、急速様に上すに至りぬ。即ち序論中、阿彌陀佛并に極

樂思想の起原の項下に、「東西學者の諸考説及び其批評」、「印度神話と阿彌陀佛」、「優婆尼沙土と阿彌陀佛」、「阿含經中の阿彌陀佛」を。附録中、「無量壽經譯者考」及び「原譯諸本比較」の數項を省けり。就中本論の結末に際して、「無量壽經の罪惡觀」、「本願と罪惡」を別章となし、更に反面を藉りて、本願思想の根本旨趣を明確にすべかりしを、第四篇各章中に略叙して之を別置せざりしは、聊か龍頭蛇尾の感なきをえず。加ふるに本書稿成りて自ら之を通讀するに、論述頗る意に満たざるものあり。或は更に修正を要するものあり。是れ固より我が淺學不才にして力能く所期に副はざるの致す所なりと雖も、亦行文務めて省畧に従へる結果なりとす。近く大學在學中及び其前後に於いて我が師事せし諸先生の感化影響は勿論、印度教學并に佛教史料に對する知見を増すに於いて、姉崎教授高楠教授の懇切なる指導を辱ふせるは深く感謝に堪へざる所なりとす。其他村上博士は珍書の借覽を許され、前田博士は有益なる注意を辱うせられ。松本博士、南條博士、萩原博士等著述に講話に多かれ少かれ其教へを受けしは一々數ふるに遑あらず。此他俱に學海に掉す諸學友の奨勵補助に負ふ所頗る大なり。本書にして些の取る所ありとせば一に此等諸恩人の賜なりとす。特に本書の出版に關し姉崎博士高楠博士が熱心なる同情を寄せられたるは著者の肝に銘じて忘るゝ能はざる所なりとす。本書の公刊は元と兩先生の德恵に出づ。謹んで諸先生諸先輩に深謝の至情を表す。

明治四十參年初冬

著 者 識

凡 例

一、本書は閑文字を省き、引用文を節し、當初豫定の約三分の一以上の頁數を減じ得たり。然るに専ら刪減を企てし結果、行文に於て用語に於て、全篇の體裁頗る統一を缺くものあるに至れり。加ふるに割註夥多の爲め校正に比較的多大の注意を拂へしにも拘らず、尙未だ意に滿ざるもの鮮かならず。

一、本書が果して何程の價値あるべきか。本書は到底自己の満足と自負とを以て公刊せるものに非ず。本書の如きは著書といはんよりは稿本と稱するを適當とす。此故に繁を厭はず、努めて證典の丁數を附せり。此中和本の丁數には、 μ を以て表裏を表せり。

一、本書中の引用書目は一々茲に列舉し難し。但し此中阿彌陀佛傍明經論集貳百數十部は縮刷藏經の丁數にて、本書の卷末及び淨土宗全書第一卷に之を表示せり。今左に略稱を使用せる書名のみを擧げん。

【對 照】

佛說無量壽經梵文和譯支那五譯對照
佛說阿彌陀經梵文和譯支那二譯對照

(南條博士著)

【現 法】

現身佛と法身佛(姉崎博士著)

【讀 本】

巴黎語佛教文學讀本(高楠博士著)

【釋迦傳】

釋迦牟尼傳(井上博士著)

- 『淨土論』 極樂淨土論(松本博士著)
- 『梵 阿』 梵文阿彌陀經(南條博士著)
- 『史 考』 印度宗教史考(姉崎博士著)
- 『上 印』 上世印度宗教史(姉崎博士著)
- 『小 史』 佛教小史(藤井學士著)
- 『全 集』 法然上人全集(黒田、望月、兩氏共纂)
- 『全 書』 淨土宗全書(淨土宗宗典刊行會)
- 『目錄』或
はCatalog. 大明三藏目錄(南條博士著)
- 『大 史』 大乘佛教史論(前田博士著)
- 『原理論』 佛教統一論第二編原理論(村上博士著)
- 『佛陀論』 佛教統一論第三編佛陀論(村上博士著)
- 『結 集』 佛教史論第一編佛典結集(松本博士著)
- 『梵 本』 F. Müller and B. Nanjō — Sūtravahī Vyūha.
Macdonell. Macdonell — Sanskrit English Dictionary.
- Childers. Childers — Pali Dictionary.

- Dutt J. C. Dutt — The Ancient Civilization of India.
- Grünwedel A. Grünwedel — Buddhistische Kunst in Indien.
- 『佛 美』 佛教美術(前田博士編)
- 『干 闥』 M. A. Stein. — Sand Buried of Khotan.

此他四阿含、東方聖書等、總べて通用の略稱あるものは之に従へり。無量壽經阿彌陀經は時に『大經』『小經』と稱せるあり。梵本譯本は、梵『漢』『魏』等と稱せり。

一、本書中、無量壽經の引文は主として南條博士の『對照』和譯に據れり。

序論

目次

一 阿彌陀佛并に極樂の名義に就て……………一

(其の一)

- 宗乘と名義論 一 寶成の研究 二 各地に於ける阿彌陀佛の名稱 二 五原本中の名稱 二 漢譯諸經の音義兩譯 三
- 無量光佛 三 無量壽佛 三 無量壽淨佛 三 無量佛 四 諸佛の通號 四 無量佛 四 阿彌陀佛音譯の始め
- 四 古譯經中の名稱 四 小阿彌陀經の三無量 五 觀衆諸法行經の五無量 五 無量壽經と無量 六 十九光佛授の佛名 六 智印經及月燈三昧經の無量 六 藥師如來の本願 六 阿彌陀の音譯に關する疑問 七 因襲か 八 音便か 八 誤寫か 八 略譯か 九 無量の譯語 九 方言か 一〇 阿彌陀と阿密多 一一 抽象的神格 一三
- 註疏家の解釋 一四 阿彌陀類と他名 一五 時空無限の實在 一六

(其の二)

- 極樂 一六 五原本の名稱 一六 漢譯諸經の音義兩譯 一七 諸名稱に就て 一七 樂有莊嚴 一七 蘇河轉帝、須摩提 一七 譯解 一八 諸譯語の始原 一九 蘇河の意義 一九

二 阿彌陀佛及び極樂思想の起原に就て……………三

(一)阿彌陀佛の思想は外來なりとなすもの 二二 (二)阿彌陀佛は印度内部の思想に起原となすもの 二二 (三)極樂は外來思想に發せりとするもの 二三 (四)印度内部思想に起因となすもの 二三

(其の一)

無量壽經及び其の大要 二四 所論梗概 二五 阿彌陀佛本生譚及び其内容表 二六 阿彌陀佛本生譚 二九 (一)其本生譚と形式 二九 (二)佛智廣等 二九 (三)彌陀本生の受身 二九 (四)其因行 三〇 (五)本生國土 三〇 (六)其の本願 三三 明相經一類思想と阿彌陀佛 三三 大法輪陀羅尼經陀羅尼の明相菩薩の三三 其の要點 三四 奇光如來 三四 巴黎明相經 三五 長阿大本經の尸迦佛 三五 其關係材料 三六 骨阿六重品の一節 三六 幽曇摩羅他那迦梨の一節 三七 立世阿尼倫論の一節 三七 毘舍品との關係 三八 奇光と放光 三八 明相 三八 神通 三八 明相と阿尼倫 三八 佛塔供養 三八 佛の遺迹 三九 佛と舍利 三九 山上如來と須彌山頂 三九 梵天と帝釋 三九 婆羅門佛 三九 尸迦佛の子 四〇 阿彌多と阿兜羅 四〇 事佛 四〇 毘舍品成立年代 四一 聖印三昧經、觀衆諸法行經の本生譚 四一 佛頌の布衍 四二 古譯經 四二 奇光如來經に對する疑難 四三 大論、俱舍論の現在他方佛説の證文 四三 慧印經は年代正確 四四 提要 四四 再び諸本生譚に就て 四五 佛頌の撰述 四五 人物と神通 四六 諸經典類例の脱話 四六 彌陀本生の受身に就て 四七 輪 四七 梵と東方 四七 輪と東方 四八 初生の梵と東方來の輪王 四八 諸本生譚中の梵天神話 四八 カウシタマヤ、ウパニシャッドの梵 四九 アミトトデヤスと諸本生譚 四九 阿彌陀佛と梵 五〇 阿闍と阿彌陀 五一 東と西 五二 神話の復活 五二 觀音と阿彌陀佛 五三 明相經類例の思想 五三 法華經光瑞品 五三 往古品 五四 七寶塔品 五四 法華經とカウシタマヤ、ウパニシャッド 五五 釋迦佛とアミトトデヤス 五五 未曾有正法經 五五 大集經不闍維品

(其の二)

五五 同海靈壽經品 五六 此類諸經に多し 五六 菩薩念佛三昧經密王品等 五六 持心梵天所問經光品 五七 佛徒の構想力 五八 佛教内發説 五八 佛陀論 五九 釋迦佛と佛 五九 釋迦佛壽の四類 六〇 釋迦佛と無量光、淨 六〇 釋迦と阿彌陀 六一 成案批評と史實 六一 成立起原とその旨趣 六一

三 阿彌陀佛并に無量壽經の成立地及び其年代に就て……

(其の二)

異説 六二 印度諸論師と彌陀思想 六二 大乘經典と阿彌陀佛、經典と地點 六三 慈愍三藏傳 六四 佛教と西北印度 六四 西域と梵語 六五 無量壽經の佛頌 六五 印度に於ける彌陀佛像 六六 釋迦三藏の生國及び遊歴地 六六 西域と大乘教 六八 大乘發源地 六九 西北印度と彌陀思想 七〇 譯者四十九人 七〇 中印度と彌陀思想 七一 大小二乘と地理的區分 七二 歸結 七二

(其の二)

異説 七三 支那初釋經に於ける阿彌陀佛 七四 翻譯年代と原作年代 七四 總釋と支那佛教の大勢 七五 支那譯の龍音 七五 無量壽經の佛頌 七六 現存原譯諸本以上の原本 七六 印度に於ける方音 七七 小經の成立年代 七七 六方段の無量壽佛 七八 三經と諸經 七八 起信論と無量壽經 七八 十住毘婆沙論並に大論の彌陀思想 七八 大論所引の傍明淨土經名 八一 法住記中の諸經 八三 諸經所載多在彌陀 八三 必しも後代の挿入にあらず 八四 大乘經典の成立年代 八五 彌陀と阿闍 八六 歸結 八六

本論

第一篇 佛陀

第一章 歴史上の佛陀

- (壹) 人間としての釋尊……………八九
- 釋尊の眞價と信仰の説明 八九 家庭の釋尊 九〇 佛陀の足跡 九一 優婆塞、僧徒、五從者の態度 九一 波斯匿王の月光王 九一 波羅村の乞食 九二 有部の佛身論 九二 佛前生の九罪報 九二 阿難の過失 九二 出家得道と四時期 九二 前半生と佛傳 九三 入滅の光景 九三
- (貳) 教化の事實……………九三
- 自覺の宣言 九四 波羅那の教化 九四 弟子派遣 九四 優曇爲羅村に入る 九四 王舍城の布教 九五 祇園精舍 九五 迦比羅夷の歸郷 九五 入滅 九六 佛傳に就いて 九七 降誕の意義 九八 自覺と覺他 九八 宣教の跡踏と其削除 九九
- (參) 教化の特色……………一〇〇
- 宗教と教祖 一〇〇 師弟の親情 一〇〇 溫和なる師主 一〇〇 平等主義 一〇一 精神主義 一〇二 實行主義 一〇二 漸修 一〇三 譬喩 一〇三 譬喩の具體化 一〇四 教化の形式 一〇五 三示尊 一〇五 四無所畏 一〇五 十力 一〇五 三明六通 一〇五 十八不共法 一〇五 神通 一〇五

第二章 滅後の佛陀

- (壹) 滅後の佛陀……………一〇六
- 佛入滅と遺弟 一〇六 弊宿波羅門の滅後の如來 一〇七 遺身 一〇七 遺物 一〇八 遺蹟 一〇八 輪塔 一〇八 印度佛教は塔寺佛教 一〇九 佛像 一〇九 遺法 一一〇 教戒、歸依法 一一〇 自燈と他燈 一一一 聖教量と比量 一一一 結戒本義 一一一 含んで言ひえず 一一一 遺物崇拜の不足 一一二 大小經典共許の佛陀 一一二
- (貳) 過去佛……………一一三
- 過去佛は佛の直説 一一三 過去佛と釋迦佛の反影 一一四 過去佛の名稱及び起原に就て 一一五 過去佛の數量 一一六 過去佛の旨趣 一一七
- (參) 未來佛……………一一八
- 彌勒と佛教 一一八 彌勒の名稱及び起原に就て 一一八 彌勒とメシヤ 一一九 未來佛出現の意義 一二〇 出現の時期 一二〇 彌勒と釋迦 一二一 遺法續編 一二二 教法の保證 一二二 彌勒が佛在世の人とせられし徑路 一二三 開會か拈拈か 一二三 三世諸佛一貫 一二四 未來佛の數 一二四 過去佛と自覺覺他 一二四 彌勒と慈悲 一二四

第三章 菩薩本願

- (壹) 本生譚……………一二五
- 本生譚と佛陀論 一二五 印度は眞國なり 一二六 佛の説法と本生譚 一二六 南北本生經 一二六 本生譚と佛教經典 一二七 譬喩本起因縁と本生 一二八 佛陀と本生 一二九 本生譚と大乘教 一三〇 成立年代 一三〇 本生譚の意義 一三三 受身 一三三

(貳) 本願

誓願の語彙 一三三 原始佛教の誓願 一三四 誓願の差別 一三四 誓願と本願 一三五 諸種の誓願思想 一三五
佛の本願と衆生の本願 一三六 本生の行因 一三六 本生行と化他主義 一三七 肉と靈との救済 一三七 授記の
意義 一三七 諸本願と阿彌陀佛の本願 一三八

(參) 過未佛と誓願

過去佛は誓願佛に非ず 一三八 彌勒と誓願 一三九 彌勒本願經 一四〇 大乘方等要意經 一四〇 彌勒大成佛經
一四〇 彌勒と阿彌陀 一四一

(肆) 菩薩

菩薩の豐富 一四二 種類 一四二 (一)四雙、八眾 一四二 (二)如來、輪王、支佛、羅漢 一四三 (三)羅漢、支佛、如
來 一四三 (四)聲聞、獨覺、菩薩 一四三 現實と理想との教團 一四四 輪王 一四四 沙門婆羅門 一四四 羅漢
と佛 一四五 僻支佛 一四五 阿含經中の菩薩 一四六 大乘と佛乘と菩薩乘 一四六 菩薩の語義 一四七 菩薩
と化他 一四八 菩薩と在家 一四八

第四章 法身佛

(壹) 大乘と小乘

經典の成立 一四九 小乘經の大乗思想 一四九 密教思想、般若の思想、法と佛、悉有佛性、第一般若法、法界常住 一四
九 佛智の甚遠 一五〇 眞如、法性、一乘 一五〇 阿含經の佛陀觀 一五〇 大小經典共通思想 一五〇 生經中
の華嚴經 一五一 知旭曰く 一五一 大小未分派 一五一 四攝、四無量、三三昧 一五二 原始經典と大乗教の根本
義 一五二 用語多含 一五二 中道、一乘 一五二 大小錯雜 一五三 僧傳より 一五三 大乗教は古し 一五四
ワッレリフ曰く 一五四 大乘とは何ぞ 一五四 宗の分類と教の分類 一五四 大乘菩提、禪、戒、智 一五五 諸

大乗經の對小關係 一五五 排小主義と嚴小主義 一五五 菩薩佛教と聲聞佛教 一五六 圓錐狀螺線 一五七 判教家
と西儒 一五七 大乘經典の特色 一五七

(貳) 「論」に於ける佛陀と教理の變遷

論部の起因 一五七 經と論 一五八 有部の教理と佛陀 一五八 大眾部と大乘 一五九 九無爲、無爲有作用 一五
九 佛陀、衆生心 一六〇 大眾部末派(一説、説出世、説假、鷄胤の諸部) 一六〇 四阿含に就て 一六一 上座部末
派(犢子、化地、法藏、經量の諸部) 一六二 尊重對法と理性主義 一六二 大乘の興起 一六三 眞如緣起 一六三
眞如と生滅、覺と不覺 一六三 佛陀 一六四 緣起論と實相論 一六五 經の佛陀と論の佛陀 一六六 論宗 一六六

(參) 法身佛及其化用

大小涅槃經の比較 一六七 佛陀の當相と實相 一六七 アーティ佛 一六八 梵天勸請、本生記、法輪、舍利、禪定佛、
神通と三昧 一六八 如來 一六八 ロゴス、キリスト、惠遠の法性論 一七〇 三寶 一七〇 法と佛 一七一 五
分法身 一七一 三身觀の原形 一七二 涅槃 一七二 達磨佛教 一七二 諸大乘經の佛陀 一七三 般若經の法身
一七三 金光明經、法華經、涅槃經、華嚴經の壽量品 一七三 汎神論 一七四 光明智相 一七四 三十餘業、四十二
光、八光 一七五 四徳と涅槃 一七五 客觀の主觀化と主觀の客觀化 一七五 佛陀の業用 一七六 五種の十八不共
法 一七六 一百八十不共法、四十不共法 一七六 覺他 一七六 大小經典の慈悲 一七六 悲智の二門 一七八
法佛業用の説明 一七八 本願は眞如の用 一七八 報身の彌陀 一七九

第五章 阿彌陀佛

無量壽經の本生原 一七九 譬喩的神話的痕迹 一八〇 彌陀如來よりの類推 一八〇 神話の脱却 一八一 説話の中
心核實 一八一 智慧の顯現 一八一 阿彌陀佛と法 一八二 法身佛と阿彌陀佛 一八二 再び起原に就て 一八三
淨土と彌陀 一八三 法談 一八三 彌陀本佛説 一八四 諸經に於ける阿彌陀佛 一八四 (一)現在佛としての阿彌陀

八

陀佛 一八五 (二)阿彌陀佛は事佛たること多し 一八五 理佛としての彌陀 一八五 (三)理論中の阿彌陀佛 一八七
般若部 一八七 涅槃部 一八七 法華部 一八七 華嚴部 一八八 方等部 一八九 其の時結 一八九 諸大乘
經と無量壽經との佛 一九〇 經典と宗派 一九〇 (四)說法佛としての阿彌陀佛 一九〇 人格中心 一九一 (五)彌
定佛としての阿彌陀佛 一九一 (六)阿彌陀佛は現世利益の佛にあらず 一九二 (七)阿彌陀佛は本願の救主なり 一九三
諸本願經と阿彌陀佛の本願 一九三 阿彌陀佛の特色 一九四 智的佛陀と情意的佛陀 一九四 阿彌陀佛本願の根底
一九四 法の佛と佛の佛 一九五

篇外 佛と梵 佛教と印度諸教學……………一九五

神人同格 一九五 優婆塞尼沙土の梵我 一九六 唵 一九六 梵の六相 一九七 邊際 一九七 彌陀梵我と佛教 一
九七 三位一體 一九八 咒法作業 一九八 優婆塞尼沙土に就ての疑問 一九九 梵の思想と佛教 二〇〇 佛教經典
中の外道 二〇〇 大莊嚴論問卷 二〇一

第二篇 信行

第一章 自力念佛

(壹) 信佛、歸佛……………二〇三

自歸依 二〇二 歸佛と歸依法 二〇三 周那 二〇三 自力的個人主義 二〇三 外の顯線 二〇四 三寶と佛 二
〇四 念佛の原形 二〇四 六念十念 二〇四 歸佛五功德 二〇四 廣義の念佛 二〇五 佛と法 二〇五 信と
知 二〇五 行々相違 二〇五 念法と念佛 二〇六 遺跡崇拜 二〇六 佛像崇拜、感見 二〇六 信根と信力 二
〇八 優婆塞尼沙土の祭祀と觀念 二〇八 禪、三昧、瑜伽、神通 二〇八 禪と佛教 二〇九 禪定佛 二〇九

(貳) 禪觀念佛

漢譯經 二一〇 觀法と觀佛 二一〇 思惟要略法、座禪三昧經、般舟三昧經 二一〇 佛神力 二一〇 觀佛の
原形 二一〇 一佛中心の觀法、觀無量壽經 二一一 觀佛の目的 二一一 觀佛と往生 二一一

第二章 他力念佛

(壹) 他力念佛

觀佛と稱佛 二二二 往生論の五念門 二二二 念誦と口誦 二二二 觀佛の二意義 二二三 自力觀行中の他力 二二
三 懺悔滅罪 二二三 定心念佛と散心念佛 二二四 印度に於ける他力思想 二二四 稱名、誦論、唵 二二四 神祕
主義 二二五 密教經典の由來 二二五 密教と淨土教 二二六 煩瑣哲學と神祕家 二二六

(貳) 阿彌陀佛に附隨せる信行

法藏比丘の修行 二二八 自力行によりて他力攝化 二二八 非行との相違 二二八 衆生の信行 二二九 正雜二行、
本願念佛 二二九 三寶行因、諸行と念佛 二二〇 一向專念 二三〇 信心回向 二三〇 疑念 二三一 宿因 二
二二 念佛、開名、稱名 二二三 易行往生と淨土易行 二二三

篇外 在家得道と佛性

釋子、在家出家の菩薩 二二四 維摩、勝鬘 二二四 限婆娑、月上女、五種説人、龍女、樂見童子 二二四 寶女等大乘
經典中の諸在家 二五五 六度に就て 二五六 俗化 二五六 法藏蓮華、正像末 二五六 佛性論 二二七 修得と
性得 二二七 心佛衆生是三無差別 二二八 馬鳴、龍樹、法相家の佛性觀 二二八 寶珠の譬 二二八 凡夫往生 二
二八 平等主義 二二九

第三篇 往生 浄土

第一章 天部

- (壹) 印度に於ける輪廻觀念……………三三〇
- 往生の意義 二三〇 諸人種の輪廻觀念 二三一 梨俱、阿陀婆吠陀、婆羅門書 二三一 優婆尼沙土、數論 二三二
- 摩奴法典 二三三 佛教 二三三
- (貳) 佛教の天部……………三三三
- 轉法輪經の二十六天 二三四 俱舍の二十七天 二三四 長阿含經の天品、提提經等の名數相違 二三四 佛敎三十三天の名
- 稱 二三五 三天、二十八天、七體住、二處、九衆生居、四食天等の諸天階神 二三五
- (參) 婆羅門諸神と天部……………三三六
- 四王天 二三六 三十三天 二三六 帝釋 二三七 正法念經の三十三天 二三七 梵天 二三七 耶摩、阿修羅、冥
- 摩羅首羅 二三八 無所有處、非想非々想處 二三九 天部の混亂 二三九 富羅那文學 二三九 岩那の世界論と佛
- 敎 二四〇 天部の配列 二四〇 新神と古神との關係 二四一 兜率天に就いて 二四二 其他の諸天 二四二
- (肆) 諸神の佛教化……………三四三
- 神中心と人中心 二四三 佛教と婆羅門敎 二四三 印度敎學の風潮 二四四 姑息的救済 二四四 戒法 二四五
- 生天の業因 二四五 世尊と生天 二四六 天部の欠陥 二四六 非想非々想處と流轉 二四六 中阿含品想經 二四六
- 生天思想の三意義 二四七 天部の使命 二四八 正法念經の諸天 二四八 金剛手と地獄 二四九 如來許容の念
- 天 二四九

第二章 念佛生天

- (壹) 念佛生天……………三四九
- 六念と生天 二四九 施戒論生天之論 二五〇 施戒天の説法と俗衆 二五〇 佛教修系と念三賢 二五〇 念佛生天
- 二五一 他力念佛生天 二五一
- (貳) 兜率上生……………三五二
- 生天、上生、往生 二五一 上生思想の由來 二五二 小乘諸經と上生思想 二五二 刺文中に彌勒なし 二五二 婆須
- 密 二五二 彌勒と諸佛 二五三 法顯傳、西域記、伽耶の遺文等 二五三 兜率上生と極樂往生 二五三 彌勒と阿彌
- 陀 二五四

第三章 涅槃と天

- 古來佛教家の浄土觀 二五五 涅槃の階級 二五五 涅槃は眞實か 二五六 斷常二見 二五六 積極的内容 二五七
- 涅槃と天 二五八 佛徒の解釋 二五九 入滅、涅槃圖 二五九 佛と天 二六〇 六通、四塵、八法 二六〇 佛
- は諸天以上 二六一 第二義天、淨天 二六一 天部と佛土 二六二 世界の佛と佛の世界 二六三

第四章 佛土

- (壹) 小乘經典に表はれたる佛土……………三六三
- 過去佛出現土 二六三 彌勒出現土 二六四 梁塵緣起 二六四 佛敎世界論 二六五 奇光如來土 二六五 神通と
- 浄土 二六六
- (貳) 浄土……………三六六
- 佛土の種類 二六六 三身三土 二六七 佛土思想變遷の概略 二六七 浄土と諸天 二六八 ヴィクンタ、北州 二六
- 八 天部と浄土との差異 二六九 浄土と輪廻 二七〇 輪王と佛陀 二七〇 因果論 二七一 遊園土と淨園土 二

七二 佛入滅と國土 二七二 觀念論 二七二 維摩經佛國 二七二 淨土の證明 二七三

第五章 極樂淨土

極樂と天部 二七三 佛土は衆生の爲め 二七四 淨土の快樂 二七四 法樂 二七五 靜慮と樂受 二七五 諸長庚の理想郷と極樂 二七五 北方人は感性的か 二七五 極樂と涅槃 二七六 佛土は有爲 二七六 往生と成佛 二七七 極樂も釋迦出現土を離れず 二七七 諸佛淨土と極樂 二七八 諸經所讚多在彌陀 二七九 彌陀所讚多在諸經 二八〇 極樂は模範的淨土 二八一

篇外 佛教の俗化

沙彌十戒文と淨土の樂具 二八三 佛敎と外道 二八四 育王迦王時代 二八四 諸論師と外道 二八四 美術上 二八五 諸王の外禮 二八五 諸地方の俗化 二八五 外道の入佛者多し 二八六 思想上の類似 二八六 大衆と外道との親縁 二八六 民間信仰の勃興 二八七

第四篇 罪惡

第一章 苦界(苦集二諦)

印度敎學の特色 二八八 佛敎と四諦 二八九 厭穢欣淨 二八九 諸行無常 二九〇 四苦 二九〇 世苦と諸難 二九一 惡趣 二九一 八難 二九二 集諦 二九二 宗敎と罪惡、佛敎罪惡觀の深刻 二九三 論に於ける罪惡 二九三 七十五法 二九四 罪惡の實態 二九五 無量壽經の罪惡觀 二九五 中阿含經 二九五 淨土敎と罪惡觀 二九六

第二章 無明

罪惡と理想 二九七 基督敎に於ける二個の罪惡觀 二九七 佛基兩敎罪惡觀の差異 二九八 五欲と無明 二九八 阿含經中の無明 二九九 小乘論部の無明 二九九 發露尼沙土の無明 三〇〇 無明論の發展 三〇〇 十二因縁と無明 三〇一 起俗の無明 三〇一 佛敎形而上的罪惡觀の二面 三〇二 薩婆 三〇三 回向と他力 三〇三 基督敎と佛敎 三〇四

附 錄

一 阿彌陀佛と一類にせらるる諸佛

諸經配合の相違 三〇七 五佛 三〇八 成立年代 三〇八 密敎時代 三〇九 密敎諸佛、無量光佛と無量壽佛 三〇九 阿闍 三一〇 諸佛と阿闍 三一一

二 阿彌陀佛に附隨する菩薩

彌陀觀音勢至の配合 三一二 觀音の起原 三一二 彌陀觀音同體 三一三 世自在王佛 三一三 二十五菩薩 三一四 八菩薩 三一五

三 支那初期の佛敎と阿彌陀佛

信仰者 三一五 支那佛敎の特色 三一六 支那淨土敎の三派 三一七 惠遠以前の信者 三一八 彌勒觀音の信仰と彌陀 三二〇 流支と曇鸞 三二二

目次

四 阿彌陀佛并に淨土記載經論集表

- 表に就いて 三三三 婁迦羅 三三三 文讀、康僧會譯 三三四 法護譯 三三五 羅道真、帛尸梨密多羅、覺賢譯
三三六 法顯、羅提、佛念、羅什譯 三三七 曇無讖、法救譯 三三八 慧嚴、智嚴、求那跋摩、求那跋陀羅譯 三三九
曇無讖、功德直、僧伽婆羅、真諦、毘目智仙譯 三三〇 吉迦夜、勒那摩提、善提流支、佛陀扇多譯 三三一 月波首那、那連
提耶舍、闍那耶舍、耶舍闍多、毗尼多流支、闍那扇多譯 三三二 達摩笈多、玄奘、智通譯 三三四 波羅頗密多羅、阿地伽多、
伽梵達摩、那提、地婆訶羅 三三五 杜行頌、佛陀波利、提婆般若、實叉難陀譯 三三六 李無諷、彌陀山、實思惟、曠淨譯 三三
七 善提流支譯 三三八 般刺密帝、輸波迦羅、金剛智譯 三三九 不空譯 三四〇 般若、法天譯 三四四 天息
災譯 三四五 施護譯 三四六 法護、吉神、慈賢譯 三四七 釋智、安護、臨摩實智譯 三四八

序論

一、阿彌陀佛並に極樂の名義に就て

(其の一)

阿彌陀佛は梵語にして、翻して無量壽無量光となせるは古來殆んど定説の如に、曾て誰人も疑を挿むものなかりき。特に淨土の教義次第に發達し、念佛往生の宗旨漸く確立するに至るや。南無阿彌陀佛の六字名號に恒劫の萬德を具し、名の外に體なく、體の外に名なく、萬善の妙體は名號の六字に即し(大原問答「全」)四智三身十方因緣長等一切の内證の功德、相好光明說法利生等一切の外用の功德、皆悉く名號中に攝在すとなし。(「選擇集」大經釋「全」)如來初發心より佛果に至る、所有萬行萬德を具有せるものなれば、(永觀「性」)利

劍即是彌陀號、一聲稱念罪皆除(善導「般舟」)といひ、六字名號一聲訛稱すれば無邊の大利を失ふといふ。

(通)善導大師が經文を改めて稱我名號下至十聲となしたるも、六字名號稱念の義を標榜せんが爲めにし

て。法然上人が惡心先德の語を受けて、(要集「中」)「選擇集」の開卷第一に往生業念佛爲先と標したるも、亦此名號に關せり。廣くは親鸞聖人「教行信證」行の卷見るべし。淨土教家の阿號は俊重房に起り、元と名號の初字をとりしに出づ。此の如く名號に偉大の功力を認めたるを以て、古來淨土門の宗乘學者、名體不離の

教義解釋に頗る巧妙を極むるものありと雖ども未だ宗義以上に史的討究をなせしものあるを聞かず。密成律師會て『六字名號呼法辨』『六字名號呼法辨惑問』『訛略念佛辨』『六字名號呼法辨釋難』の諸著を以て六字名號の發音並に意義を確立せんとせしが、所論錙銖に拘泥し、肯綮を得ざるもの多し。但し梵學殆んど顧みられざる當時にあたり、考證該博、所論中正、當らずと雖とも、努めたりと謂ふ可し。

今暫く各地に行はるゝ阿彌陀佛の名稱を見るに支那及蒙古にてはアミタ Amita、アビダ Abida、アミダ Amita オムト Omto、ミト Mito、ナモオミト Namo-o-mitoh、とシ、西藏にてはオンメ Hod-dpag-med (無量光) ツェンメ Tse-dpag-med (無量壽) といひ (以上アイテル『梵文字彙』、ケッセン『佛敎』第二卷二八、ワッデル『西藏佛敎』第一卷一〇六に據る) 同じく我國に在りてもナムアマミダブツ。ナモアマミダブ、ナムオミトフといふあり。然るに現存の梵本に徴するに一所も阿彌陀佛なる原名なし、阿彌多阿彌婆 Amitābha 阿彌多阿彌斯 Amitāyus ならんがなし (『梵本大無量壽經』第十一章以下、第十五章及第二十六章以下、第卅一章其他第三十九章、第四十五章には Amitābha といひ、第三十章には Amitāyus とシ、第十二章には Amitārabha, Amitāpabhasa とシ、梵本小阿彌陀經第二章、第八章、第十三章には Amīyus、第九章には Amitāpabha とシ、梵本法華經第八章、第十二章には Amitāyus とシ、第二十四章には Amitābha とシ、又『梵本普門品偈頌』中第二十九頌、第三十頌、第三十二頌其他『梵本普賢行願經』第五十七、第五十九、第六十一にも Amitābha とあり) 阿彌陀は Abhi 若しくは Ayus を略せるものとすれば勿論疑なきも、しかも譯語亦必ずしも無量光無量壽のみにあらず。阿彌陀佛は原語の音譯其儘なるが、畧したるものとすれば何を省けるか。阿彌陀佛以外の音譯なきか。譯語は果して音譯と一致するか。若し一致せざるものありとせば阿彌陀佛の名は他にも存するか。凡そ是等は阿彌陀佛の如何なる佛陀なるかを定むるに就て、先づ見通すべからざる關門なり。縮刷藏經

中二百五十餘經に就きて其音義譯を見るに音譯には阿彌陀・阿彌多(陀)・阿彌多婆・阿彌多(駄)・阿彌多鉢羅婆・阿波哩彌多・阿密哩帝 (阿彌梨多、阿密) あり。義翻には無量・無量壽(命)・無量光・無邊光(明)・無量明・清淨光・無量清淨、あり。(但し賢却經佛(名經等を除く) 卷末附錄別表を参照すべし。而して以上雜然たる諸經論上に出づる異名を要約するに、次の四種を出てす

- (一) 光明に關して名を立てたるもの。 光明に關する譯語中、其種類を最も多く列舉せるは、魏譯の十二光佛段、(『首楞嚴經』には十二光佛) (成二) 即ち梵本の第十二章十九光佛段なり。阿彌多婆耶は是れ阿彌多婆の與格にして、耶字を除くを可とし、義は無量光なり。無量明佛も亦光明に關せり。而して光明は智慧を表はすものとす。
- (二) 壽命に關するもの。 無量壽は普通に稱する名にして、阿彌多由倪は Amitāyus の s か或は Amitāyur の r か不明なるも、他にも阿彌多由の語あるが故に、是れ無量壽の原語の音譯と見るべし、阿波離彌陀由倪も同じ。

(三) 清淨に關するもの。 平等覺經には、殆んど無量清淨佛を以て稱せり。清淨光佛は清淨と光明とを合はせたるもの。彼の月燈三昧經に「彼離垢穢如來尊、其佛號曰阿彌陀」(成十) といふは離垢清淨を以て阿彌陀佛を見たり。荻原氏は曰く無量清淨の譯語は恐らく原音の轉化したる俗音に清淨の義あるものならんと。

(新佛敎九卷九號「後」
「阿彌陀」と「阿彌陀」)

抑も以上光明と壽命と清淨とは大乘經典中苟くも佛陀を説明するには、必ず其徳を讃嘆するに用ゐらるゝ語にして、光明の無量は不動、藥師等到的所に其形容の語辭とせらる。壽命の無量も亦『法華』『涅槃』等の壽量品は勿論其他所々に出て、清淨離垢とは表裏にして佛陀の説明には亦必ず缺くことなき文字なり。然らば是等の名は阿彌陀佛の別號なれども、同時に諸佛通有思想を以て其名義を得たるものとす。

(四)無量を以て名とするもの。阿彌陀佛は光 *Abhi* 或は壽 *Ayus* を略せるものか否かは不明たるも譯語に無量佛あり。加之原語譯語其光明を以て名くるもの、壽命或は清淨を以て稱するもの、殆んど悉く無量の義を以て形容せざるもの稀なり。以下少しく是に就て辨ずべし。

阿彌陀佛は略名なるか、完全なる音譯なるか、將た又訛音なるか。先づ阿彌陀佛なる音譯の起原如何。先づ後漢吳魏の時代に於ける譯語を見るに、支婁迦讖譯『平等覺經』 *Amita-Suddha-Samyaksambuddha-Sutra* (*Chihlo*)¹⁰ には、一所も阿彌陀佛の音譯なく、其經題の表するが如く、無量清淨平等覺、或は無量清淨佛といひ、又一二ヶ所には無量壽佛といふ、原來此支婁迦讖譯は法護譯なるが如き疑あり。是に由て支婁迦讖譯の他經に就きて見るを可とす。『般舟三昧經』三卷本一卷本共に阿彌陀佛といふ。(玄九) 而して一所に十餘回も此語を繰返してしかも他名なし。後漢代の失譯とせらるゝ、『後出阿彌陀佛偈經』には「世界名清淨、得佛號無量」といふ。(地十二) 此に無量の譯語あり。又同じく後漢失譯なる、『佛說作佛形像經』には阿彌陀佛といひ、『拔陂菩薩經』亦然り。次に吳の支謙譯『阿彌陀經』 *Amita-Sutra* (*Chihlo*)¹⁰ は殆んど例外なく、阿彌陀佛と

いふ。十二光佛段は佛名とせず。阿彌陀佛の光明の勝れたるを説明せる語句として存し。『無量門微密持經』に無量壽といひ、『菩薩道樹經』に壽無極法王といふの外。『老女人經』『慧印三昧經』には阿彌陀佛の音譯を用ゐ、康僧會亦『舊雜譬喻經』に阿彌陀佛の音譯を用ゐたり。阿彌陀佛なる音譯は、最古の譯經に遡るに支婁迦讖支謙より始まりしものとす。次に阿彌陀佛なる佛名は畧號なるや、否やを見るに、無量壽經の如きは經題に於て既に明かなるが如く、多く無量壽佛を用ゐたり。諸名必ずしも一定ならず。同一經典中に既に異名を存するも、羅什前後に於ける古經典にて最も多く用ゐられたるは阿彌陀佛と無量壽なることは別表により明かならん。若し無量壽經の異譯を除きて諸經典上の名稱を見るに、殆んど阿彌陀佛といふ。無量壽とせるは其數甚だ少し。抑も阿彌陀なれば無量の意義ならざる可らず。(Mactonell)¹⁰⁵ 阿彌陀佛關係經典にては其名義を如何に解せるか。

『小阿彌陀經』には光壽徒衆の三無量の外第二章に極樂と名くる所以を説くに無量の樂あるのみなるが故に樂有世界と名くといふ。要するに小經によるに光明、壽命、聲聞、菩薩、及び樂因皆無量なりといふ。又第十三章即六方段には他佛の名として無量壽 *Amitayus*、無量壽 *Amita-skandha*、無量幢 *Amita-dhvaja* としひ特に羅什譯『小阿彌陀經』には六方段の西方には第一に無量壽佛と標したるに拘らず。光壽徒衆の三無量を擧ぐる際には阿彌陀を以て光壽の無量に解せり。又闍那崛多譯『觀察諸法行經』にも壽量、聲聞、菩薩、光明、の無量の外、願功德莊嚴の無量を擧げたり。(字八)

次に『無量壽經』による第十二聲聞無數の願第十二光明無量の願、第十四卷屬長壽の願、第十五壽命無量の願、第十七、第廿六(諸佛稱揚願)等皆無量の義あり。(第十二願には Gamaṇa (計算)第十三願第十四願第十五願)加之各願に無量、無數、不可思議不可量の語甚だ多し。又法藏菩薩の修行段には諸種の修行の無量を擧げ、第二十四章には小阿彌陀經に何じく、樂無限にして樂の諸因の限量を知る能はずといひ、第三十二章第四十三章には音樂の名が無量の世界に達し生ずる有情亦無限なりといふ。且つ彼佛の光明の無量なる所以を述ぶるや。(1)無量光 Amitābha。(2)無量光明 Amita-prabha。(3)無量光曜 Amita-prabhāsa。(4)無盡光 Asamāpṭa-prabha。(5)無對光 Asaṅgata-prabha。(14)不斷光 Anubandhanīya-prabha。(16)無比光 Akūya-prabha。(15)極威光 Ativīrya-prabha 等の諸名を以てせり。(番號は梵本の順序)最後の光明によりて名けたる佛名は無量光の意義を譬喩的に述べたるに過ぎざるも、光明を除けば無限 Amita の義たり。加之以上に云へるが如く光明以外に數多の屬性に於て皆限量なき事を説けり。尙二三の經典を引證せん「如來智印經」には(劉宋失譯)「汝等於被常俱生以護法緣捨女身、當生無量極樂國」(48b)といひ、又『月燈三昧經』には「即生於無量、安樂佛世界」(50b)といふ。固より方廣なる讚嘆を以て、其特色とせる大乘經典にありては、以上の諸種の無量の義は、獨り阿彌陀佛に限らず。例せば阿彌陀佛に特有なる光明無量は藥師の十二願中、第一は藥師如來と共に衆生と皆光明無量の本願にして第二琉璃光身を得んとの本願、第三は智慧無量の願にして『本業理路經』には阿彌陀佛と別佛に無量光佛あり、(37c)佛名經の如きは例外とするも此類諸經に少からず。必ずしも智慧

と光明は阿彌陀佛のみには限らざるを知るべし。されば經文に無量の義あること前述の如く且つや阿彌陀佛の諸名光壽淨共に無量の字を冠せるは奇とすべく阿彌陀を以て畧音譯とのみ斷じ得べからざるが如し。

原本は皆無量壽無量光の佛名あるが故に、西傳にては單獨なる阿彌陀佛なる名は固よりなしと雖も漢譯佛典の上より之を見るに、稍疑なきを得ざるものあり。諸經典中に於ける阿彌陀佛の音譯が若し不備なるものとすれば西晉法護の如きは唯二三の經典に無量壽といふの外、平等覺阿彌陀或は阿彌陀佛といひ。姚秦羅什は無量明佛無量壽佛國の譯語を用ゐたることなきにあらざるも多くは阿彌陀佛といひ。曇無讖亦多くは無量壽佛の譯語を用ゐたるも、『大集經』には阿彌陀佛といふ。義淨は主として無量壽佛なる譯語を使用し、又阿彌陀佛なる音譯あるにも拘らず阿彌陀の音譯を用ゐたり。不空の如きは諸種の譯語を使用したりしが、又阿彌陀佛なる音譯を逸失せざりき。特に宋功德直の『無量門破魔陀羅尼經』には「今見無量光阿彌陀佛是」(成九)の文の如きは一層注意すべし。支婁迦讖、支謙に始まりし此の阿彌陀佛なる音譯が、若し適譯ならずとせば無量光無量壽無量清淨等の譯語あり。其の原語も阿彌陀婆及び阿彌陀由として傳へられたるに關せず、何故に之を改めざりしか。此場合に改訂せざりし事情として考へ得べきは、(一)阿彌陀佛は通用語となりて是れが變改は信仰上不都合なりしこと、(二)音便上の都合に由る事、(三)單純なる因襲に基ける事(四)始め經典は筆寫せられたるが故に譯者各自の音譯は其後寫し直されし事、(五)阿彌陀なる原語の存在せし事は是れ。今此等の事情を以て支那佛教の當時を見るに(一)の事情は成立せじ。何となれば支那に於ける阿彌陀佛の信

仰は惠遠以前は殆んど法曠等一二人に過ぎず。(附錄一「支那初期佛教」と「阿彌陀佛」參照)正しく支那の淨土教史は惠遠より始まる、然らば法護羅什時代に音譯の變更が信仰上妨害あるべしとは思はれず。特に羅什の如きは兜率土生派なるが故に、必しも舊株を墨守して阿彌陀の三字以上に不備の音を其儘にすべき理由なく必ずや適當なる音譯を附すべかりしなり。又(二)の事情を考ふるに是又阿彌陀婆阿彌多由としたりとて左程不便を感ずる理なし。(三)羅什以前に最も多く阿彌陀佛なる名稱を使用したるは支謙にして(無量壽經)支謙は二五三年に歿し而して康僧鑿は二五二年に帛延は二五七年に康僧會は二五一年に法護は二六六年に翻譯を始め羅什は稍後れて四〇二年より翻譯に従事し此間にしかく久しき因襲をなすべき理なし。(四)に在りては往々にして書寫の錯綜誤謬のあるは宋元明麗藏殆んど各經に亘りて多少の相違あるにても知らるべく出三藏記前後出經異記(卷一)には古譯と梁代新譯との音義譯の相違を擧げたるも、現存古譯經は必ずしも其定準に従はず。往々新譯語を使用せり。更に當代文具を見るに。筆は古くありしも、紙は生紙熟紙未だ起らず。書籍の印行は隋代に始まる。書は篆隸轉して秦漢以來の楷行草三體あり。當時の經典は蔡侯紙に三體合併の寫本なりしを想像すれば、多くの脱略訛語のあるべきは蓋推定に難からず。『平等覺經』が無量清淨阿彌陀平等覺といふ中に一二無量壽佛の語を以てするが如き、或は此種の筆寫の際の變更ならん歟。されどかくの如く筆寫の誤謬を傳へたるものと見るには餘りに阿彌陀佛なる名稱の出所が多きに過ぐるものあり。阿彌陀佛の音譯の起因たる支謙譯は往々にして音譯の不備あれば(下「成立年代」の項參照)或は阿彌陀佛は不備の音譯と見做されざるにあらずと雖も、支謙以前の

支婁迦維亦此阿彌陀佛なる音譯を使用したるが故に單に之を畧名とすべからざるが如し。又支謙『阿彌陀經』の内題たる佛說阿彌陀三耶三佛過度人道經は阿彌陀三藐三佛陀にして明かに其音譯中に光壽の二義なし。若し又支婁迦維支謙共に月支の人なるが故に訛音を傳へたるものとすれば、康居の産たる僧會並に燉煌の出身にして月支と印度とに遊べる法護、支那出身の羅道真、印度僧の覺賢、何地とも不明なる西域の帛延、帛尸利密多が同じく阿彌陀佛といふは必ずしも月支のみの方言と稱するを得ざるものあり。然らば阿彌陀佛は原語を完全に音譯せしものか。唐の彌陀山は *Mihāsāna* なるに畧音を用ゐたり。阿彌陀亦此類なる可きか。是に就きては以下の諸點を稽査せざる可らず。(イ)阿彌陀を無量と見たる譯語の有無。(ロ)サンスクリットの原語が方言化して阿彌陀となり其意味は無量の意義の外に尙他の意義を表はすものありや。(ハ)經典註釋者の意見。今此三點を逐次論述すべし。

(イ)先づ無量の譯語の存否を見るに支謙譯『維摩詰經』には「此室釋迦文、阿闍、寶首、樂忻、寶月、寶淨、無量、固受師子響慧作斯彼諸如來等、是正士念時說時彼佛即爲來。」といふ。(說七)此に所謂無量は同經異本たる羅什玄奘兩譯によるに阿彌陀たること疑なし。(說七)又『菩薩生地經』には「五百比丘壽終、悉當生於西方、無量清淨國」といふ。(說林三)宋元明三本皆壽終字なし。(但し羅藏には壽終あり。由七)又唐菩提流支譯『大寶積經』中第七『無邊莊嚴會清淨陀羅尼品』には「無量佛威光、阿闍大名稱、若欲見彼者、當學此法門。」といふ。(說林一)特に『無量壽經』漢魏兩譯又佛念譯『菩薩瓔珞本業經』には二箇所に阿彌陀佛を無量佛等といふ。(說林一)特に『無量壽經』漢魏兩譯

の偈頌には無量覺無量尊の語多し(漢)稽首禮無量覺(魏)往觀無量覺(漢)往供養無量覺(魏)供養無量覺(漢)稽首禮無量覺(魏)歎國尊無量覺(漢)心清淨無量覺(漢)但(梵)はアミターヌス或はアミターブハ) 以上によるに「漢」譯「魏」譯は譯者に就きては多少の疑なきにあらざるも、唐宋以前の舊譯經たるは明かなり。而して其中特に偈頌に於て無量尊無量覺の語あり。元來「漢」「魏」兩譯は全經五惡段を除く外文相不一致の點多く「漢」「吳」兩譯が語々殆んど相類似するが如きにあらず。此の如く同一原本の譯經なるべしとは思はれざる兩經に無量なる譯語を使用せるは注意すべく、又長行には無量清淨といひ無量壽といひて、偈頌に無量の譯語を用ゐたるは特に奇とすべく、「漢」「魏」の兩譯を原本に比するに或は漢譯の際譯者が文字配列の便宜上壽字を除けるが如きも、餘字を廢して光壽何れかの字を挿入するが如きは別に不都合を見ず。然るに此の如く多く無量の譯語を以てし「漢」「魏」兩譯の此語を以て更に支謙の阿彌陀佛の音譯を考ふるべき。阿彌陀は缺畧なき音譯なりしが如し。

ロ、以上の所論はサンスクリットを標準として述べしのみ。西域地方各所方言を異にし、且つ支那字音も時處に依りて變化あり。暫く出三藏記胡漢譯音義異同記(卷一) 出三藏記の傳記(卷一七九) 及梁僧傳を見るに、西方寫經同祖の梵字なりと雖も、國々往々にして異ありといひ、三藏法師中數十國を遊歴し、能く其方言に通じえたりといへるは強ち傳記作者が誇張の言のみにはあらず。彼の阿羅漢、沙門、耆闍崛山等は巴梨語に近く其他娑叱室、波斯匿、優竭の如きも明かに巴梨音に合す。而して漢譯は概してサンスクリットより轉譯せしものとす。しかも中には巴梨語に近きものあり、蓋し翻經三藏は其音譯に際し、華梵の柄鑿相容

れざるものあれば、梵語を捨て、故らに巴梨語か然らざれば類似の俗語より、是に該當する語を撰びて、音譯せる形迹少からず。此の如く經典中特に古譯經典に於て巴梨若くは其他の俗語より譯せるもの少からず。又現に觀經下々品等に稱南無阿彌陀佛といひて。漢字寫音の不便より、アブラハを表はす術なきを以て、譯者其意をえて、阿字を挿入せるあり。寧ろ『觀音秘密藏神咒經』に南無彌陀婆耶(成十) の如く阿字なき方原音に近し。古來曼殊室利の舊譯は中間二字を取りて、濡首となし僧伽藍摩の伽藍亦然り、畧譯の類例亦頗多し。

阿彌陀佛は畧譯なるか將た又阿彌陀は阿彌陀婆阿彌陀由の何れか、其方言化せる畧形なるか。現に阿彌陀婆耶 Amitābhaya(阿彌陀) 阿波理 Apari. 彌多由倪 Mitiyun(阿彌陀) 曇謨阿彌多迦囉 Amita yun(南謨阿彌多餘餘寫坦他攝) Namo Amiti yusasthigatasya. の音譯あり。又阿密哩多 Amita(阿彌陀) 密明多(阿彌陀) あり。是れ抑も略音の原形なりや。但し斯かる音譯は唐以後に最も多く、密教に於ける阿彌陀佛を稱するものにして、その以前に於ては彼の劉宋求那跋陀羅譯『拔一切業障根本得生淨土神咒』(地十二) に阿彌陀婆耶、阿彌利都婆昆、阿彌利哆悉耽婆昆、阿彌利多尼迦蘭諦、阿彌利哆尼迦蘭哆とあるのみなるが如し。

是れ以前の古經音譯にては殆んど阿彌陀佛に限るといふも可なり。而して Abla 若くは Ayns 等の後語あるものは多くは阿彌多(或は) としへて阿彌陀とせず。阿彌陀の三字の音譯にては又多字を用ゐず。

或は陀字は或る時代或る地方にて原音の或音を含める發音なりしやも知るべからず。荻原氏は阿彌陀は Amida 若くは Amida なるべし。梵語の Amida は印度の或俗語にては轉化して Amida なることを得。例へば Karodi なら maitimadi なるが如し。而して又梵語の Amida 甘露は巴黎にては Amata となり。或他の或る俗語にては Amuta Amida となることさう。漢譯藏中に其譯例數多あるべし。『佛本行集經』第五(辰七)に阿彌都檀那は隋言甘露飯の注によりて原語は Amita dāna 即梵 Amrito dāna なりしと示す(新佛敎「密藏經」下には詳細なる研究あり。見るべし。)

抑も Amida は吠陀以來印度宗教史上に系統一貫の信仰にして、毘溼拏、蘇摩、等諸神に關係あり。此語が轉換して Amida となり阿彌陀佛を生ぜるものと見るは固よりあり得べき事にして、特に阿彌陀佛は無量壽佛といひて不死の義あり。且つ阿彌陀佛の陀羅尼に此語あり。現に、西藏に於ける無量壽佛の咒文にも Amida の語類あり Om amaran jivantiyo svaha. (ワッデル氏「西藏佛敎」)又法然上人淨土宗初學鈔にも(全卷)密敎の念佛、顯宗所談と相異なるを述べ、次に「彌陀大小神咒、句々有阿彌陀多之詞、是即句々唱彌陀之意也。若無阿彌陀多之句、縱誦甘露之句、無其驗者歟。」といひ、古來阿彌陀如來根本陀羅尼中には十聲の念佛を具すと傳ふるあり。又『東方最燈王如來經』閻那堀多譯(成七)及其異譯の「持句神咒經」支謙譯(三三)には無量光菩薩とせるを他異譯(成七)には甘露光菩薩とせるあり。是れ阿彌陀佛にはあらざるも Amida 及 Amila との轉訛の例たり。此兩語間には密接不離の關係あるが如しと雖も。甘露不死の Amida と無量無限の

Amida とは兩者各語原を異にせるものとも見らるべし。必しも阿彌陀を以て Amida の變化と見做すべきや疑なき能はず。密敎にては時に阿彌陀佛を甘露如來と稱することあるも古來阿彌陀佛を不死如來或は甘露如來と譯せしものなし。譯者が一齊に阿彌陀佛といふは阿彌陀多 Amida の意を含める阿彌陀 Amida 或は Amida ならざりしが如く。唐宋七八世紀時代の經典に Amida となるは或は阿彌陀佛が壽命の無量なるより、咒術的意義を有する Amida を附加せしものにはあらざるか。但し荻原氏の所論は主として阿彌陀佛成立以前の思想に關し、茲には主として譯經史上に辿らんとするにあり。

東西宗教史上の常例によれば先づ具象的なる特殊の神格を作り、次に之に抽象的の意義を附するを常とす。然るに翻つて思ふに Aditi は元と光りの神なれども、吠陀時代に已に抽象的に無限の義を有せり。縱令信仰盛ならざりしにせよ抽象的なる神格は夙に既に存せり。且つ又 Brahman (中性)より Brahman (男性)を生ぜるは抽象的神格より、具體的神格を生ぜし實例なり。是によりて無限を意味する神格を假定せりとして決して怪しむべきにあらず。法身佛の信仰見るべし。松本博士はアマターユスを以て無限在の義となし(經樂淨土論)又アイテル氏の如きも、無量光を以て非人格的佛陀となせり(梵漢)蓋し佛菩薩の名義中には佛敎教義の人格化せし例少からず。大集經の虚空蔵(玄一〇)護法(玄二)の如き見るべし。法集經の無所發の如きも亦然り。果して然らば抽象的名義に起因すと見るも一説たるべきか。現に尼波羅の始元佛 Adhi-Buddha は其名の示す如く抽象的佛陀たり。若し又 Amida より變したりとすれば無量光の名義を如何にかす

へ。萩原氏は曰く Amīta と Soma との関係より黄色或は金色の觀念を生じ、無量光となりしものにて、淨光兩種思想生起の前後に就きては無量光は後なりと。但し譯經上よりの史實としては此種の問題は遂に未決に附せざるをえず。抑も何故に正確に阿耨唎哆の語を存せず、Amityus とせるか。果して萩原氏の所説の如く佛名なるが故に特更に同義異語を用ひしもの歟。未だ其證左を缺けるもの、如し、吾人は鶴首して更に氏の深遠なる造詣の餘韻を切望す。

(ハ)次に經典の註釋者は如何に見たるかを調査するに此方に於ける材料は直接の證典たるものなし、蓋し惠遠時代に至る間に三經(大、觀、小)の翻譯既になりしを以て支那教義の研究者に其語の解釋を求むるは、經典の譯語以外に出づる所なきは固より明かなりと雖も参考として其解釋を一瞥すべし。

唐の善導が南無阿彌陀佛の六字を歸命無量壽覺の一々に擬せるは配字にして翻譯にはあらず。但し別に無量壽の譯語を以てせり。(觀經玄疏分第一)嘉祥寺の吉藏(三六二)が佛說觀無量壽經の梵音として傳ふる所は佛陀般遮阿梨耶阿彌陀佛陀修多羅なりといふ。(觀經疏證第一册第三十二、三二七上欄)果してかゝる經題の存せしや否やは不明。恐らく是は誤りならん。(Catalog, P. 58 Rudhuhāsāmi, Āyubuddha dhāna (?) Sūtra)阿利耶を觀字に配せる如きは不當なり。但し梵語を解せざるにしても、阿彌陀を以て無量壽に配せしは明かなり。(全書五卷下及卷下)然れども更に阿彌陀を以て無量の義に解釋し、法佛成佛應佛、共に無量の義ありとなし。佛の壽命を無量壽といふは其勝境を表はし、衆生をして欣求せしむる爲めのみといへり。又王日休も梵語阿此言無、梵語彌陀此言量、省文稱之寧稱阿彌、不可稱

彌陀、若稱彌陀則是量、與無量之意相反、(淨土文卷二)といふ良忠の玄義分記第三〇(全書二卷)には古來の義を列舉せり。其中天台龍興王日休の義可なるが如く、阿彌陀は無量ならざるべからず。諸師が光壽を加ふるは義譯なるべく。阿彌陀を以て無量光無量壽の梵名とせるは小經に基き因襲によりて解せしもの、如し、『翻譯名義集』(兩二)に阿彌陀の名義を解するに漢譯並に魏譯の『大經』及『稱讚淨土經』を引きて、無量清淨、無量壽、無量光の譯語を列ねたり。但し智論を引き無量の二義を述べ、天台大師の語を引きて四句の無量を特に此阿彌陀の題下に辨したるは是又無量の義に解せるもの、如し、『慧苑音義』に阿彌陀正云阿彌陀婆耶此云無量壽又『慧琳音義』に阿彌陀唐云無量光也(爲八)の如きは前に所謂義翻に過ぎず。特に怪しむ可きは光明若くは壽命の義を含めるものとしては不完全なる阿彌陀佛に關し、『名義集』『易土集』等に他の梵音には正訛を正したるに、何故に阿彌陀佛に就いては、之を訛音若くは異音とせずして正音と見做せるか。是れ原來無量を義とせる佛陀なりし故には非らざるか。又阿彌陀佛は所出經典の極めて多數なるに拘らず。其音譯は比較的異轍ならず。阿那律の如きは十餘種の異音譯を列するに、(易土集)阿彌陀は阿婆若くは阿瘦を附加せるもの、外は悉く阿彌陀なり。されど纏て思ふに古來の翻譯者か同一人にして異經若くは同一經中、阿彌陀佛、無量清淨佛、(法華)阿彌陀佛、無量佛、無量壽(支)阿彌陀佛、無量壽佛(法華)を始めとして。魯賢は同一『華嚴經』中阿彌陀、無量壽、無量光の三種を用ひ、失譯『老母經』亦之に同じ。羅什曇無讖不空等多くは阿彌陀の音譯以外に光、壽、淨、の譯語を以てせり。去る光緒三十年支那撰述の『阿彌陀經衷論』には、「古今修淨業者、

唯念阿彌陀佛、未曾無量壽佛、(續藏三) の文あり。西藏にては光壽を二佛と見たり。(附録「阿彌陀」と類とせらるる諸佛」参照) 因て思ふに何れが原名か、又其轉訛の順序の如きはえて知るを得ざれども、光壽を離れての阿彌陀佛も全くなりしとは斷じ得ざるが如し。以上の所論を要約するに阿彌陀佛の名義に關しては其原形は果して何なりしやは明確ならざるも、現存の原語及其譯語上よりは光明、壽命、清淨及無量の諸名稱あるも就中光明と壽命との無限を以て稱せらるること最も多く、而して光壽の無量と離垢清淨とは大乘佛教の佛陀を説明する通有性と稱するも可なるが如く、特に阿彌陀佛に限る特性に非ず。而して阿彌陀なる音譯は抑も不明にして、無量なる抽象的意義によりて把住せられし佛陀と見ることも唯單に註釋者の私見と見做し難きものがあるが如し。但し其多くは光壽の無量を以て稱せらる。蓋光壽の無限は時空の無限を求むるに出づ、阿彌陀佛は神話に起因とするも教理の内發とするも、兎に角根本に於て人生の要求に應じたる名稱を附せるものと謂ふべし。論じて茲に至らば阿彌陀佛は法身佛を具象的に表はせるもの如し(下「法身」佛「参照」) 諸佛等しく光壽無限なるべしに特に此佛に限りて光壽の無限を以て名とするに至りしは、諸經所讚多在彌陀たる所以の一と見るを得べし

(其の二)

次に極樂の名義に關しても諸經典を採りて其原譯の異同を驗するに未だ必ずしも一定せざるものあり。現存の原本上よりは殆んど Sukhāvahī Vidyūha (Ksetra Lokandhiu) 樂有莊嚴(刹土世界) の名あるのみ。(大經梵本「第十一、第十八、第三十九、第四

十章等。小經梵本「第二、第四章及兩經經題法華經梵本「第二十二、第二十四等。密門品梵本」第三十、三十一。普賢行願經梵本」第五十七、七、 極樂若くは樂有は殆んど同一觀念を詮はしたるものには相違なきも、しかも譯語の異なるは往々にして原語の相違するものあり。左に漢譯諸經中の音譯譯を列ねれば須摩提・須何提・須訶(阿) 摩提・蘇訶縛帝・阿彌多由・跋陀羅(以上音譯) 安樂・清淨・極樂・無量壽・安養・安穩・一切樂莊嚴・清淨・善解・妙樂・安樂(義翻) あり。此中安養國は原語の意義よりは寧ろ義譯なるが如く、西方淨土亦其方所に就て立名せるものに過ぎず。直接淨土特有の名にあらず。阿彌陀由國無量壽國といふは漢譯に無量清淨佛の無量清淨土たるが如く、土名佛名或は衆生壽命の無量より其名を得たりとも見らるべし。極樂莊嚴若くは一切樂莊嚴は原語に直せば異りあるも何れか一方を義譯とせば原形同一なるが如く。極樂國も是と同類の語なるが如く。又清淨國は全く其原語を異にせるものなるが如し。安樂といふは極樂に類似せり。意譯は精密に云へば區々なるが如きも Sukhāvahī の樂有は一切樂とも又は極樂とも義譯するを得べく、安樂は極樂と同義異語と見なせば蘇訶縛帝即ち樂有は原語なりしが如し。(梵本大經「第十一」章 譯語に相當する「漢譯」を見むに「漢」「吳」には須摩提(須)、「魏」には安樂、「唐」「宋」には極樂とあり。(「對照」His-120「第十八」章には「須摩提」の譯語上に同じく、「第三十九」章の「魏」「唐」「宋」の譯語亦然り。對照His-203)「梵本普賢行願經」第五十七、Sukhāvahī-Setoの對譯不空譯には極樂界とし、般若譯には安樂利といふ「無量壽」十四の六三) 然れども是れ唯だ臆說にして其真相は今日より推知するを得ず。

音譯に就きては須摩提(須)と、須何提と、須訶縛帝とあり。「無量壽經」「漢譯」は無量清淨土と云ふが譯例にして。「吳譯」は阿彌陀佛國と云ふが其用例なるも、兩經とも原語を存して須摩提といふ。

(漢譯にては往勳佛「對照」203には須何提といふ、同じく往勳佛「第二十一」章「對照」203には須摩提といひ、「吳譯」にては須摩提といふ。) 尙支婁迦讖支謙の本經以外の譯經中に此須摩提の原語
阿彌陀佛並に極樂の名義に就て

を存する者多し『般舟三昧經』(支譯)『慧印三昧經』(支譯)等の如し。但し支謙の『慧印三昧經』には須阿摩提といふ。此他西晋代の法護並に聶道真に至るまでは往々須摩提の原語を用ふるもの多く、他の意譯としては安樂佛土と譯するもの最も多く。極樂なる譯語は東晋時代覺賢羅什以來使用せられし如く。是れ以後は久しく音譯表はれずして、唐宋の頃に至りて蘇訶縛帝の音譯あり。蘇訶縛帝は現存原本 *Sukhavati* の音譯を寫せるものなること更に疑ふべからず。而して須摩提は須阿摩提の略譯なるべし。現に西晋聶道真の『三昧經』中縮刷藏經本文には須摩提とありて、冠註に元明兩本の異文を擧げて須阿提といふ。須阿摩提といふは、蘇訶縛帝とは多少異なる音なるが如きも恐らくは *Sukhānanti* ならん。(『サフ』と『アム』とは混用にして「イ」なり。彌勒 *maikra* を梅垣黎耶とも音譯するが如く、梵本小經の *Asma garbha* の *Asma* は石なるに、法護は誤りて馬とせり。(『梵本阿彌陀經』中上の *Asma* (馬) と混ざるなり))

但し増一阿含部の經典中に、須摩提女經 (四) 須摩提長者經 (七) あり。兩譯共に須摩提を以て阿彌陀佛の淨土の音譯とせる支謙の翻譯なり。(此他にも須摩提菩薩經、法護羅什の兩譯及須摩提經) 但し此の須摩提は南條博士は *Sumati* とせられしが、*Sumasiddha* なりといふ。故に此等經名の須摩提と極樂の須摩提とは別異なり。但し若し須摩提は *Sumati* なりとすれば仁、賢、快 (稀れ) 等の義意あり。(Macdonell) 是によりて或は快樂の義にとりて極樂の名とせしか。但し須摩提、須阿提は須阿摩提の略と見るを以て至當とす。下に至りて辨すべし。然るに又『十住毘婆娑論』には西方善解世界の語あり。(『十住』本文「善」といひ冠註「解」を加ふ) 是は *Sumati* を *Su-mati* として善解と見たる譯語なる如きも、善解の譯語は極めて稀にして必しも依憑とするに足らず。更に聶道

真『菩薩受齋經』には須阿摩提持拘樓檀の語あり。兎に角極樂、安樂、安養、樂莊嚴等は *Sukhavati* より來りしもの、如し。荻原氏の『微瑟紐と阿彌陀』中には須摩提、須阿提、等の原語の類推。安樂、樂有、極樂、等の梵語の差異に就きての研究あり見るべし。但し支婁迦讖譯『平等覺經』には須阿提なるも、同師譯『般舟三昧經』には別に須摩提の語あり。支謙譯も『阿彌陀經』には須摩提といふも『慧印三昧經』には須阿摩提とあり。聶道真は、須阿摩提といふ。一人にして此の二の譯語を用ゆるは須阿摩提須阿摩提を正とし他は畧とも見らるべし。

之を要するに譯語中最も諸經典に通じて多く使用せられたるは極樂と安樂とにして、安樂は最も古く、四五世紀間の流行譯語と見るべく、極樂は羅什覺賢の頃より始まり、七八世紀以後盛に使用せられたることは別表によりて明かなり。而して、原語は須摩提、須阿摩提、蘇訶縛帝等あるも要するに *sukhavati* と同意の方言か或は *Sukhavati* なるが如し。

抑も音譯若くは義譯にして、原語に復飯するを難しとするもの少からず。孟蘭盆の如き特に然り。(南條博士) 彼の *Atman upanisad* 等に就きても、ヘトリング、エーメル、ドイ、セン諸氏各異説あり。阿彌陀佛並に極樂の名義の如きも吾人は唯だ概然的斷定を與へ得るに過ぎず。終りに *Sukhavati Vyuha* 中の *Sukha* につきて其意義を明かにすれば、元來 *Sukha* (*Pali, id. Chiders 487*) と *Asvada* (*Pali, assava Child*) と自ら異りあり。 *Sukha* は *Asvada* の如き肉慾的快樂の義にあらず。是によりて知る淨土を以て肉慾五官の快樂の

土とは若へざりしことを。餓なく渴なく不寒不熱所謂七寶の鉢器ありて、百味の飲食自然に盈滿するも然も食はざるに飽くといひ、愛樂無染といひ〔梵本〕第七 加之聞く所の音は法聲にして自ら五根五力七菩提分の響きを發すと云べ。唯だ樂のみありて苦なきが故に極樂といふ〔小阿彌陀經〕 も其快樂は決して感性的慾望の土にあらざるを知るべし。

二、阿彌陀佛及び極樂思想の起原に就て

(其の一)

佛教の諸佛中には其の起原の不明なるもの少からず。過去七佛然り、未來佛然り、其他五佛二十四佛等皆其起原につきて或は明かなるか如くして而かも今尙未定のもの多し。阿彌陀佛も亦其一なり。或者は印度以外の思想に起原すといひ、或者は印度内部の思想に發したりとなす。又同じく印度思想に發したりとするも、或者は佛教以外の思想に負ふ所ありといひ、或は佛教内部思想の自然發達の結果なりといふ。以下阿彌陀佛並に極樂の起原につきて順次諸考説を抜抄すべし。

(一) 阿彌陀佛の思想は外來なりとなすもの

アイテル氏は阿彌陀佛の教義が法顯玄奘の記事に闕け、現時南方諸邦に其信仰なきを以て印度所産にあらざと斷し。支那佛教は迦濕彌羅尼波羅より傳來せるものなれば、阿彌陀佛は當時此地方に影響を與へたる波斯若くはグノス派又若くは摩尼教の思想に起原するとなし〔梵漢字彙〕 ワツデル氏は太陽神話の具體化となし、スキシアン及印度、波斯人に密關ありと説き、波斯教の影響に歸せり。〔西藏佛教〕 原始佛教よりラマ教に移〔リシ〕 及ラマ教の形而上學の章〔下〕 エドキンス氏は波斯の金光經を辿り無限光明神オルムヅに追躡し、〔支那佛教〕 ビール氏は Amitia の觀音に

類せるより推して、阿彌陀佛はミトラなりとし、起原地を波斯とし、無量壽の名稱は Zervan akarana より來れりといひ（『支那佛教』以下）。ベッタニー氏は波斯、亞刺比亞、猶太の思想に負ふ所ありとなし（『世界宗教』）。グリ
 ユンエデル氏はリスデビッツ氏によりて無量無碍の光明は古代波斯人の光明禮拜と關係ありといひ（『佛學』）。
 又ワツシリフ氏は南印に於いて外人より傳來せりとの意見なりといふ（『サミュエル・ジョンソン』）。此他アラン、
 メンデイス氏は波斯の水神アナヒタに基けりとなし（加藤博士『世界宗教史』88頁、但し改版原著には觀音に配せり）。ロイド博士は佛教他力教と
 基督教との間に諸種の平行思想の存するより阿彌陀佛の信仰は基督教のグノス派に基因すと説けり（『英
 佛道語話』東亞の光五の二）。西人の阿彌陀佛に關する考説は尙ほ二三あれども畧す。

(二) 阿彌陀佛は印度内部の思想より起れりとするもの

ケールン氏松本博士等は耶摩が死者の王なると、樂土の主なると光明神たると、又古代印度人が理想境の
 神格たりし事等は頗る阿彌陀佛に類するものあるより、其起原を耶摩に求め（ケールン氏『法』（松本博士『宗
 教と哲學』301頁）。松本博士は又別に阿彌陀經を以て大善見王經よりの脱化なりとし大善見王は日輪にして、長壽無量壽の
 神力を有せしより、阿彌陀佛の光壽の無量を説明し得べしと説き（『淨土論』）。萩原氏は梵歌第八章と十住毘
 婆娑論易行品との共通思想に基き來歴判明の梵歌の主人公たる微瑟紐を辿り言語學的考證を重ね詳細なる研
 究を積みて無量壽は Amita に無量光は蘇摩と密關ある太陽崇拜に出て、阿彌陀は畢竟微瑟紐に起原すと
 せり（『新佛敎』九の九）。此他にジョンソン氏は Ailika の轉化なりといひ（『東洋宗教』）。ピール氏は佛教天部の
 變化に出て無邊光天に起因すとす（『佛敎經典』）。

(一) 極樂は外來の思想に發せりとするもの。

ピール氏は極樂思想は兜率上生の思想に異り、恐らく外來ならんといひ（『英譯西域記』）。亞刺比亞沿岸のソ
 コトラ島 Sirkadhana は蘇訶禪帝と同義にして古來より人の快樂世界となせし所。恐らく極樂は同島の傳説
 が亞刺比亞人によりて錫崙に入り次いで北印に到りし者ならんと（『支那佛教』101頁、亞細亞協會雜誌二十五
 頁、松本博士『淨土論』103に其の譯文あり）。

(二) 印度内部思想に起因すとすもの。

松本博士は前に阿彌陀佛の起因を焰摩若くは大善見王に求めたると同じく極樂思想の起原も焰摩界に求め
（『宗教と哲學』）。或は大善見王經を辿りて俱盧の思想に追躡し（『淨土』）。大村西崖氏亦耶摩界の思想は極樂の粉
 本にあらざるかを暗示し（『界』）。又萩原氏は毘瑟紐の不死世界若くは耶摩の説話に基くものならんといふ。
 此他シユミット氏の如きは色究竟天と同一視せり（『東亞古史』）。

以上阿彌陀佛並に極樂思想の起源に關する諸考説を摘記せしか、右の中松本博士の『淨土論』の如きは頗る
 長篇に屬し、萩原氏の『微瑟紐と阿彌陀』の如きは積年研鑽の餘瀝に成れるものとす。是等とジョンソン、シユ
 ミット、諸氏の諸考説が單に暗示を與ふるに過ぎざる断片とは其精粗繁簡固より同日に論すべしにあらず。但

し今は唯た異見を列ぬるに止めん。概して西人は一部の類似を捕へて時に極めて大膽なる臆説を敢てすることあり。吾人は前きに上述の諸考説に對して一々批評を試み更に波斯若くは基督教よりの外來説に對し、果して阿彌陀佛の思想成立に關しかする諸考説が如何なる史的可能を有するやを見、外來説は就中正鶴を失するものとなし、次に廣く印度神話と阿彌陀佛との關係を見、去つて優婆尼沙土中に或は阿含經中に阿彌陀佛の痕迹を追跡せしが。本書紙幅の増大を恐れ其の全部を擧げて之を畧することとなせり。若し夫れ斷片的文獻を求めんか印度思想の豊富なる所々に阿彌陀佛若くは極樂の類似思想を發見するを得べし。然れども何れも肯綮をえたるものなきを自白せざるを得ず。唯だ夫れ阿彌陀佛に關する文獻は實に汗牛充棟も當ならざるものあり。經典のみにも二百數十部あり。吾人は先づ主材を經典に求めて聊か次に研究の一方面を據べん。

(其の二)

阿彌陀佛の信仰は上下二千歳の史實と東洋幾萬人の思想に關せり。此間に起れる諸種の信仰を以て阿彌陀佛の始原を探らんとす。揣摩にあらずんば憶測たるを免れざるものあり。抑も阿彌陀佛の信仰の始めて表はれたるは馬鳴龍樹の記述を標準とせざるべからず。而して此等は無量壽經の思想を言明せるものなることは「成立年代」中に辨ずるが如し。果して然らば諸種の起原を考察するもの先づ指を無量壽經に染めざるべからず。

無量壽經諸本具略相異あるも、而も根本主意は大差なし。梵本四十七章中第一、二章通別二序と第四十三章以下終末に至る得益流通分の五章とを除きて、中間四十四章は其正宗分なり。今其大要を概説すれば、過去燃燈佛以來多數の佛あり最後に世自在王佛あり。時に法藏比丘世自在王佛の威力によりて、八十一百千俱胝尼由他(一魏漢英二百一十位)諸佛土を見、五劫に思惟して就中殊勝善妙の國土を撰擇し、四十六願(一魏漢英二十四六三)を發起し、次いで難作の修行を完成し、今現に極樂界に成佛せり。(以上第三章)といふが、前半の主意にして、次に一々願成就を列擧し、阿難の見佛、彌勒の見土によりて其實有を證し、次に信疑の得失を辨じ他土の如來十五名を擧げ當生の相を示せり。(以上第十二章)無量壽經は元と本願を以て眼目となす。然るに其内容につきては本論に入りて之を辨すべく、此には其發起本願の形式所謂本生につきて、阿彌陀佛の起原を探らんとす。以下繁雜なる考證に入るに先たち、豫め所論の梗概を畧述すれば此の無量壽經に於ける法藏比丘本生譚の形式は、他の阿彌陀佛の本生を説ける十餘部の經典と大略其轍を一にし、之を原始經典に求むるに尸棄佛の説話に關係あり。遠くは梵の思想と脈絡貫通せるものありといふにあり。即ち巴黎明相經並に長阿大本經とを始原材料となし。是に關せる薩曇摩羅他那迦梨中の南傳と漢譯立世阿毘曇論中の北傳及奇光如來經其他を關係材料となし。是等と阿彌陀佛の本生譚との關係を見るにあり。

敘述の簡明を期せんか爲めに阿彌陀佛の本生譚を記せる經典を列記し、次に諸本生譚か如何なる點に於いて一致せるかを表示すべし。

(一)	『無量壽經』梵本の外、婆迦説、支謙、僧鑑、菩提流支、法天の五譯あり	支謙譯	成九	5.b.
(二)	『無量門微密持經』	覺賢譯	成九	7.b.
(イ)	『出生無量門微密持經』	智嚴譯	成九	22.a.
(ウ)	『出生無邊門陀羅尼經』	求那跋陀羅譯	成九	12.b.
(エ)	『阿彌陀目佉尼訶離陀羅尼經』	功德直譯	成九	13.b.
(オ)	『無量門破冤陀羅尼經』	僧伽波羅譯	成九	18.b.
(カ)	『舍利弗陀羅尼經』	佛陀扇多譯	成九	10.a.
(キ)	『阿彌陀目佉尼訶離陀羅尼經』	闍那崛多譯	成九	3.b.
(ク)	『一向出生菩薩經』	不空譯	開八	26.a.
(ケ)	『出生無量門陀羅尼』	支謙譯	開八	26.a.
(コ)	『慧印三昧經』	劉宋失譯	開一	42-43
(サ)	『如來智印經』	智吉祥譯	開一	47.b.
(シ)	『大乘智印經』	(西晉)法護譯	開一	33.b.
(ス)	『決定起持經』	(元魏)菩提流支譯	開八	50
(セ)	『訪佛經』	(西晉)法護譯	開八	48.b.
(五)	『濟諸方等經』	(西晉)法護譯	開九	17.
(六)	『賢劫經』	闍那	開四	8.b.
(タ)	『同經』	闍那	開二	23.
(チ)	『正法華經(往昔品)』	闍那	開二	23.
(ツ)	『妙法蓮華經(化城喻品)』	闍那	開一	23.

- (テ) 『添品法華經』 闍那翻多、笈多共譯 卷二 78.
 - (ト) 『悲華經』 晏無識譯 卷三 8-16.
 - (ナ) 『悲芬陀利經』 失譯
 - (九) 『觀察諸法行經』 闍那翻多譯 卷八 9-17.
 - (十) 『大法炬陀羅尼經』 同譯 卷八 9-10.
 - (十一) 『寶積經(護國菩薩會)』 同譯 卷五 1-6.
 - (十二) 『生經』 (西晉)法護譯 卷五 55.a.
- 以上は悉く大乘經典にして小乘經典中には

能説及對告者	所 值 佛	父 王	本 生 名	本 生 受 身	對 者	所 得 三 昧
釋迦、阿難	世自在王	王	法無念德	藏輪王比丘	者	無量門微密持無量門
釋迦、舍利弗	寶首曜王	光	柔無念德	輪王太子	月行(鏡光佛)	出生持以下總て經名
同上	寶首熾王	持	明無念德	同上	同上	に同じ
同上	寶勝威宿劫王	星	持不思議功德最勝	同上	同上	
同上	寶具足有德行王	陀	持無念	同上	同上	
同上	寶勝火聚光明星	屈	持不思議功德最勝	輪王太子比丘	月	
同上	寶吉光王	持	明不思議功德最勝	輪王太子	月	
(エ)に同じ	同上	持	明不思議功德最勝	輪王太子	月	
(カ)	寶功德威宿劫王	持	火不思議勝功德	輪王太子比丘	月相	
(ク)	同上	持	不思議功德最勝	輪王太子	月相	
(ケ)	釋迦、舍利弗	寶吉祥威光王	持	不思議功德最勝	輪王太子	月相
(コ)	釋迦、彌勒	光明	持	不思議功德最勝	輪王太子	月相

阿彌陀佛及び極樂思想の起原に就て

十二、「生經」	釋迦、喜王	成利慧	維光	法師	首途	入禪定
十一、「護國菩薩會」	放光、橋尸迦	山上	燃慧	王	王子福攝惠(釋迦)	宮殿三昧
十、「大法炬陀羅尼經」	釋迦、阿難	雲鳴出吼顯音	明和	菩薩	善哉	總持自在三摩持
九、「觀察諸法行經」	釋迦、喜王	辯才瓔珞莊嚴	福報清淨	王太子	遊戲鳴音	行
八、「悲華經」	(ナ)(ト)(テ)(ツ)(チ)(タ)(ツ)	同上	離淨王	輪王	寶海梵志等千子	味
七、「正法華經」	釋迦、諸比丘	大通業慧	無淨念王	同上	海濟等千子	同上
六、「賢劫經」	釋迦、喜王	辯嚴淨當音吼	離淨王	同上	寶海梵志等千子	陀羅尼三昧莊嚴三
五、「濟諸方等經」	釋迦、彌勒	離垢煥成就功釋	淨命	國王	長者子辨發法師(阿闍)	智印三昧
四、「決定總持經」	釋迦、無法行	光世音	月得	法師菩薩	長者子辨發法師(阿闍)	同上
三、「法華經」	釋迦、不長行	觀世自在	淨命	國王	長者子辨發法師(阿闍)	總持總持
二、「法華經」	釋迦、彌勒	離垢煥成就功釋	淨命	比丘	法比丘(釋迦)	成五通四禪
一、「法華經」	釋迦、喜王	辯嚴淨當音吼	無限量法音	王太子	法師(大月如來)	無量門總持

他に亦「濟諸方等經」と同様の本生譚あり。又「賴吒和羅所問德光太子經」並に「護國尊者所問大乘經」中の本生譚は「護國菩薩會」に同じ、此

他に「大乘寶嚴論」中に二個の本生譚を載す。(出所丁敷卷末「表」参照)

(壹)阿彌陀佛本生譚形式の一致。

本生譚は諸佛其の形式を一にするも而かも其間多少の相違なきにあらず。然るに阿彌陀佛の本生譚にありては生經を除くの外は大略「無量壽經」の摸型と共通の説話のみ。縦合表面上「無量壽經」と何等の交渉する所なきが如きも仔細に前後を精讀するに同經の思想を髣髴せしむるものあり。今一々茲に引文するの餘白なければ讀者は上に列記せし丁敷によりて自ら探讀せられんことを望む、以下少しく其細目に入りて辨すべし。

(貳)阿彌陀佛本生譚中に表はれたる佛菩薩其他の人物。

先づ阿彌陀佛か其本生所値の佛名は光明と音聲とに由りて名を得たるもの極めて多し。別表中父王の名を明記せるは、『無量門微密持經(アイウエオカクケ)のみなりと雖とも、全く光明に關係なき名なく(羅尼經)は本生譚にあらざと雖とも父は月上、子を月明、弟子は月光なりとせり(地十二三)』又阿彌陀佛本生の名も光明と音聲とに關係あるもの少からず。對者亦然り。『無量壽經』(一)『法華經』(ツ)『悲華經』(ト)『生經』(十二)を除くの外、殆んど光明と音聲とに關係ある名稱のみなる事は炯眼なる讀者の直ちに注意せられらるる所なるべし。

(參)阿彌陀佛本生の受身。

『濟諸方等經』(五)『大法炬陀羅尼經』(十)『賢劫經』(コ)『生經』(十二)に法師若くは菩薩といふの外、『無

『最勝經』を始め到る處輪王若くは王太子なりといふ。之を釋迦佛が五百五十回(或は八千)の本生に種々の受身をえたるものとは聊か其趣を異にするものと謂ふべし。固より諸佛同道なるか故に、三祇百劫難作の修行は釋迦佛の因行に異ならずとは直に附加せらるべき信仰なれども(例せば法華經「大經釋」全卷「三〇」)經典上に明記せられたる阿彌陀佛本生の受身は殆んど輪王たるに於いて一致す。

(肆)阿彌陀佛の因行(神通、三昧、禪定)

『無量壽經』に於ける世自在王佛が法藏のために二百一十億の諸佛土を示し、釋迦佛、阿難、彌勒の爲めに阿彌陀佛並に極樂を見せしめたるは神通に由る。加之願文並に法藏修行段に三昧と定と總持の語あり。諸經亦皆三昧と定と總持との精進を以て本生修行の眼目とせざるはなし。元來菩薩本生の行目は六度を出てす。阿彌陀佛の本生亦此形式を蹈み、禪定智慧の諸波羅密以外に、精進波羅密は各經全く同一に、其勇猛精進常途に超越せるを説かざるなし。而して其行法中には佛滅後に造塔與福或は讀誦講説を以て衆生を化益せるもの最も多し。

(五)阿彌陀佛本生の國土。

阿彌陀佛か其本生輪王たる以上は其所治の國土の勝妙は言ふまでもなく、單に此土の理想國土たる輪王所治の城たるに満足せず。三昧神通と結合して既に極樂淨土と相照る遠からざる莊嚴を構想せり。先づ『無量門微密持經』(二)一類の經典(ア)(イ)(ウ)(エ)(カ)(キ)(ク)(ケ)にては、其土輪王所治たるの外、四清淨中には人法慧の三淨の

外國土の嚴淨を加へて四淨となせり。『慧印三昧經』(三)諸異譯(コ)(ク)にありては「極樂無厭、譬如天上」といひて其國土の勝妙を述ぶるや、衆生、器兩世間莊嚴は略極樂と其輪廓を同うせり。『決定總持經』(セ)(ス)亦同じく「八十億天子在於虛空淨除衆穢、莊嚴校飾、化作講堂、諸幢幡」の國土を顯はし、妙服伎樂、寶華妙香缺くる所なしといふ。『濟諸方等經』(五)の仁賢城は八萬城邑の大國を示し。『賢劫經』(六)亦積地の諸寶珍琦と七萬姪女六十六孩の諸天を數へ、『法華經』(七)異譯(チ)(ツ)テ往古品が諸梵天華を雨らし自然天樂を奏する勝土を表はし、『悲華經』(ト)ナノ刪提嵐世界の安周羅城が樓閣、行樹、衣服、妙蓋、妙車皆七寶所成にして、百億諸天相俱に合會せる清淨光明微妙の莊嚴は言はずもがな。(ホ)(ニ)『觀察諸法行經』(九)は雲鳴出吼顯音如來出現の土を無垢世界無邊寶功德莊嚴佛土と稱し、壽量無量、及無邊功德莊嚴佛刹なりといひ、『大法炬陀羅尼經』(十)の明相菩薩神通所現の國土は下に辨するが如し。其他『護國菩薩會』(十一)か寶光明城、勝喜樂城の名稱中に既に其勝相を暗示せるものと謂ふべし。以上に由りて阿彌陀佛か本生出現の國土は現世に於いて常に勝妙の好土たるを示し、そが極樂なる佛土として西方に固定し、佛教教義が如何にして其往生を勸むるに至るやの思想内容上の變遷は別として、其形式材料は到る所に發見するをうべし。是等諸經典成立前後につきては下に至りて辨すべく。唯だ此所にいはんとするは『無量壽經』世自在王佛か善惡塵妙の國土を合觀せしめ、法藏比丘が其中善妙の國土を撰擇せるものは本願所成の淨土なりとしての該經後半の叙説、及觀經の神道現土中に極樂を示したるの思想は其形式其材料共に同一類の構想に成れるものなること是れなり。又『無量壽

經「觀經」は未來往生の佛土となせども『鼓音聲經』は現世に於ける應身佛土を説きて、父、母、子、弟子、魔を列ね此土極樂の思想なり。此經は本生譚ならずと雖とも上舉の諸經と同一類の思想になれるは亦辯を待たず。

(録)阿彌陀佛の本願。

『無量壽經』は梵本四十六願あり。是等の本願思想が如何にして此の如く固定せしやは本論に至りて辨すべく、此處には如上の阿彌陀佛本生譚中に此本願思想か如何に隱見しつつかあるかを摘發すべし。『無量門微密經』(二)アには人法智惠佛土の四願。淨身、言、意、滅の四願。悦如文行入持門等の四持門。其他四法行、四德八字義を説けるの外に「於一切法行、無受者名爲念佛、爲一切法之正歸也」といひ、「常修念佛者、道力降衆魔」といひ、其異譯(イウ)(エオ)(カキクケ)は後期の翻經に至るに従ひ次第に其數量と叙説とを擴大にし、支謙アと覺賢譯イとか單に八字義とせるものは、八十九ウ)或は四十八エキ)の無量門陀羅尼となれり。此經の異譯か四持、四淨、四悅、四法、八字、八菩薩、八護神等、四と八との數を以て分類せるもの多し。而して『無量壽經』「漢」「吳」の二十四願「魏」の四十八願、「宋」の三十六願皆な四と八との數に關係あり。就中四十八願は四十八名の陀羅尼に關係あるものの如し。(悲華經には無量念王)又『決定總持經』(四)に念佛の事あり。『慧印三昧經』(三)には本願思想を表はし。(前二)『賢劫經』(六)亦同じく、「從諸佛逮是三昧、如心所願、受取佛國」(黃四)といひ、『悲華經』(下)には「魏」譯『無量壽經』中最も著しき第十七第十八第十九の諸願を始め因願果成を明か

すこと詳密なり。『大法鼓陀羅尼經』(十)には衆生如意快樂を志願せるの外「又願又願」の語を重ねたり。『護國菩薩會』(十一)亦悉願の原形を缺かず。今繁を厭ひて一々の引文を略す。

若し更に精細なる觀察を下さんか、『無量壽經』と諸本生譚との共通思想は尙他に種々あるべきも、以上六項は就中重要なる類似點なるべし。阿彌陀佛思想の起原は縱令神話中にありとするも更に一層直接なる經典中に何等かの材料なきやを探りて、之を以上に列擧せる諸本生譚にえたり。就中大法鼓陀羅尼經最も明了なるものあり。所謂明相菩薩の本生譚是なり、左に其抄文を擧ぐ

阿離、爾時放光如來欲具宣此諸菩薩等往昔因緣故、復告天帝釋言、橋尸迦、我憶過去無量世時有一大劫名善行路、彼劫有佛號曰山上(中略)其佛壽命於彼劫數四分之一佛滅度已、有一菩薩出生其刹、名曰明相、成就諸根身漸長大、聞山上如來入涅槃、後於此三千世界一切住處、皆悉興起舍利寶塔而我今者惟以神通移此洲中憍懈衆生安置餘洲、觀諸寶塔有何供、所在迴奉無令有乏、又此三千大千世界所有如來舍利寶塔(中略)而我今者惟以神通、移此洲中憍懈衆生安置餘洲、觀諸寶塔有何供過奉無令有乏、又此三千大千世界所有如來舍利寶塔、以我三昧神通力故、皆成琉璃衆寶莊嚴、令此世界皆悉平正、無諸瓦石荆棘毒刺、乃至無有如芥子許沙礫瓦石、亦無毛髮薄埃坑塹、若諸衆生居此土者、一切所有功德果報莊嚴樂事、皆悉如彼忉利天宮、又復願令諸寶塔中、咸有五種天妙音聲、娛樂供養無有斷絕如是(中略)是諸衆生見此事已皆生歡喜、踊躍無量各作是念、今此境界誰所作也、橋尸迦、爾時閻浮提中有一比丘(中略)時彼比丘嘗衆人言諸人當知、此閻浮提有一菩薩名曰明相、能發如是大精進力云何當令一切衆生得受安樂、如是念已即於洲間入於三昧住大神通、神通因緣現如是事(中略)彼時衆生因菩薩故具足皆受如意快樂(中略)皆悉趣求無上菩提、乃至盡壽修菩薩行、橋尸迦、彼菩薩摩訶薩有如是等大願威力、橋尸迦、明相菩薩摩訶薩去此佛土過千億世界、有佛世尊號婆羅王、處衆說法、如是菩薩今現在彼、於是菩薩亦於將來過四十阿僧祇劫得成正覺、名無量壽如來應供正遍覺、時彼菩薩得菩提已、諸有衆生得聞名者皆悉隨意得般涅槃、皆各於彼所住世界成就本願證阿耨多羅三藐三菩提、(卅九、六十七)。

是れ大法鼓陀羅尼經諸菩薩證相品第四十四中の記事にして、以上の經文中の内容を要約すれば。

- (一) 過去放光如來の滅後明相菩薩、三千大千世界一切處に舍利寶塔を起さんとせしこと。
- (二) 火住三昧に入り、神通力によりて心願の一切を成就し、衆寶所成の世界となせし事。
- (三) 奇妙の國土を現じ、一切衆生をして、安樂を受けしめ、神通因縁によりて如來の寶塔を遍觀供養せしめしこと。
- (四) 明相菩薩は今現に娑羅王佛の所にあり、將來四十阿僧祇劫に正覺を成し、彼の佛名を聞くもの意に隨つて般涅槃後彼土に生ずるをうること。

大法炬陀羅尼經は、善威光天子が陀羅尼門を請問せるにより、釋迦佛大力莊嚴三昧に入り、過去の境界をして、一切現前せしめ、次に阿難に説くに過去放光如來曾て此經を説ける事を以てせり。文中阿難は釋迦佛の對告衆にして、憍尸迦は放光如來の對告衆なり。阿彌陀佛の本生を説けるもの其數少からず雖も就中此『法炬陀羅尼經』の本生譚は阿彌陀佛成立の起原に關して頗る興味ある敘述なりとす。そは巴黎『明相經』と『増阿』六重品奇光如來經との關係是なり。抑も奇光如來は由來他方佛土を説かざる阿含經中唯一他方佛説にして潮音は富永仲基の『出定後語』に對して之を標示し、近く前田博士は其著『大乘佛教史論』に於いて、常盤學士は『馬鳴菩薩論』に於いて阿含中の大乘思想として紹介せられ、次いで推尼學士は詳細なる考證をなして過去尸棄佛よりの轉訛に出てしを論斷せり。

先づ尸棄佛説話の原材と六重品との抄文を掲げん。

○明相經 (S. N. VI. ii. 4 Arum. avāhi Sutta) の抄譯

爾の時比丘に告げて曰く、往昔王あり明相といふ。其所治の城亦明相と名く bhūtapubbāni bhikkhāve tājā ahoṣi aruṇarā nāma rāṭṭho hū pama bhikkhāve aruṇarāto aruṇarāti nāma rājadhāni ahoṣi 爾の時明相城邊に尸棄佛住す。其第一多聞賢聖の弟子を阿毘浮三婆縛と名く。尸棄佛阿毘浮比丘に告く、我等梵世に經行し、然る後ち食を取らんと。(中略)阿毘浮比丘尸棄佛の命によりて、梵天梵輔梵衆に顯示説法す。然るに大梵、梵輔、梵衆懷疑結憤不安の念をなし、是の如きの言をなす。奇有なる戲怪なる哉、此の聲聞弟子大師の前にありて敢て説法すと。尸棄佛比丘をして更に異相を示し、大梵梵輔梵衆を震動せしむ。阿毘浮比丘即時に或は身を現し、或は身を隠し、或は下半身を現し、或は上半身を現して説法す、爾の時梵天梵輔梵衆其神力説法を見聞し、讚嘆して曰く、奇有戲怪なる哉、沙門の神力大光神變不可思議なりと。

爾の時阿毘浮尸棄佛に白して言はく、比丘の俯仰中 bhikkhū sāṅghassa majjhe 我此の如きの語を聞けり。我梵世に立ちて聲能く千世界に通し遍く領解を得せしめん。 Pāṇoni khvāhanā avuso brahmaloke jūto saṁsūtika dhātum saraṇa vīṇāpe-tanti …… 尸棄佛答て曰く婆羅門今正しく是時なりと。阿毘浮比丘即ち梵世に立ちて此頌を説いて曰く brahmaloke jūto imā gāthayo abhāsi-

汝等起勸行	能受持佛教	震動死覺軍	如象破葉令
若此法律中	能住不放逸	捨生死流轉	乃至盡苦際

次に尸棄佛及阿毘浮比丘便ち梵世より没して明相城に現し、諸比丘をして前に阿毘浮尸棄佛に於いて説く所の偈を頌せしむ。

○長阿大本經の尸棄佛

- 長阿大本經 (於九一三) 巴黎
- 過去三十一劫有佛名尸棄 同 Sikkhī
- 尸棄佛人壽七萬歲 同
- 尸棄佛種姓刹利瞿陳如 同 Kattiyō Koraṇḍhio
- 阿彌陀佛並に極樂思想の起原に就て

- 尸棄佛坐芬陀利樹下成最正覺
- 尸棄如來三會說法初會十萬人
- 二會八萬三會七萬
- 尸棄佛有二弟子一名阿毘浮二名三婆婆
- 尸棄佛執事弟子名曰忍行
- 尸棄佛有子曰無量
- 尸棄佛父曰明相母名光曜
- 王所治城名曰光相

同

同 Arunavati

同 Khaman karo

同 Abhibhu Sambhavo

『七佛經』(及十一)父名阿勝摩王、母同名阿勝摩、城名阿勝摩(以上長行)阿勝摩王父、阿勝摩王母是佛母之名、所居城同號、阿勝摩(以上略)又忍行は音譯して剎摩迦摩、阿毘浮三婆婆は部三婆婆として一人とせり。又尸棄佛の子を記せず。他は『大本經』に同じ。又『增阿』不善品(及三三三)には瞿曇拘那若二姓を擧げ、三會を分たす、侍者を善提となし、又『大愛道般涅槃經』(及三三)には出現土を野馬世界となせり。

南傳中本生經序ニターナカタラ中には *malhita paduma* の二女弟子を加之、佛陀史傳 (XXI) には尸棄佛出家前の妃を *Sabhamā* (一切欲) となし、子 *Amisā* (無量、無比、無等、アノト『梵語字典』512) ありし由を附加せり。其他數量等少異あり。七佛父母姓字經(寶髻失譯及四三)式佛子字阿兜羅とあり。

○奇光如來經

是時世尊便作是念、此諸比丘生輕慢之想、向日連受罪難計、告目連曰、現汝神力使此衆見、(中略)是時目連禮世尊足、即於如來前沒不現、往詣東方七恒河沙佛土、有佛名奇光如來至眞等正覺、出現彼土、是時目連以凡常之服、往詣彼土在鉢盂緣上行、又彼土人民形體極大、是時比丘見目連已、自相謂言、汝等觀此眞正似沙門、(中略)爾時彼佛告目連曰、此諸比丘起輕慢意、現汝神足使大衆見之、目連對曰、如

是世尊是時目連開佛教已、以鉢盂緣被五百比丘至梵天上、是時目連以左脚登須彌山、以右脚踏梵天上、爾時便說此偈、當當念勤加、修行於佛法、降伏魔衆怨、如鈎調於象、若能於此法、能行不放逸、當盡苦原際、無復有衆惱。是時目連以此音聲、遍滿祇洹精舍、諸比丘聞已往自世尊、目連爲住何處而說此偈(中略)爾時諸比丘歎未曾有甚奇其特目連比丘有大神足(及二三)

以上明相經と六重品との連鎖につきて、推昆學士は立世阿毘曇論地動品の文及薩婆摩羅他那迦梨中の所傳とを以てせり。左に其の抄文を掲ぐ

○薩婆摩羅他那迦梨

聖覺佛陀アルナヅチ一經を説きし時、尸棄佛の時に一倍アビソ其の説法の時、其身體より出づる光明によりて千世界の黑暗を驅りしを語る。阿難問ふ、法を説く時最勝佛の光明は幾何の世界を照すか。阿難汝は此の如き問をなすか、弟子の光は佛光に及はざると大地と爪上の一塊との如し。(中略)佛の壯麗は天空に現はれ、一切世界の暗黒を驅りて、世界は無量なるも同時に無量の光を受け、聖體より出づる一の光線は能く一切を照らす。人若し世界の如く大なる燈を造り、四大海の如き油を注ぎ、須達盧の如く大なる心を點するも此の如き光も近き世界のみを照らすのみ。然るに佛身より出づる一光明は一切世界を照らす。(S. Hardy, Manual of Ind. B. 5. 7. 印考 330) 一英譯或は轉譯あり)

○立出阿毘曇論地動品

爾時淨命阿難、在大衆中、(中略)而自佛言、我從世尊聞是法句、口受持此正義。過去有佛名曰尸棄時有弟子、大神通第一名曰阿毘浮、是比丘座在第四禪梵處、以一指光照一千世界、一音說法達一千世界、俱解正義、世尊諸佛弟子、威神尙爾、諸佛如來其於云何。阿難問已時、佛答言阿難、此阿毘浮比丘是弟子位、諸佛世尊如此之處、不可思議(中略)如來在阿迦尼吒天上說此音聲宣此名句

汝等受佛教 起恭敬正勤 觀修於中住 出離三有難

除滅死王平 如象破葦舍 若佛法律中 住於不放逸

是人捨生死 乃至盡苦際 (秋一三)

阿彌陀佛並に極樂思想の起原に就て

以上明相經以下諸文の關係に就きては推尾學士の「奇光如來考」(宗教界(第一卷)見るべし。是等諸材料によりて前きに引用せる大法矩陀羅尼經を見るに、先づ其緣起品に於いて佛善威光天子の爲めに過去の境界を現せしめ、又過去放光如來亦此經を説くといふは彼の維陀那伽梨及『立世論』等の佛力の勝徳を叙述せるものより脱化し來りて一層之を具象的にせるものなること疑なく。次に放光如來は奇光如來の變身にして、奇子を放字に變せしのみ。蓋し尸棄(大論音秦音火或燧火首名義集雨十一)孔雀は阿嚧那即ち曙光と親縁ある文字なり。此際奇字は重きをなさず。是れによりて推すに放光の光によりて奇光如來の轉化と見るをうべし。次に明相菩薩は尸棄の父若くは其城名より轉じて菩薩名となりしこと疑なく、阿嚧那の類語優婆尼沙土には古學者の名に多し(東方聖書十五卷初丁參照。『慧苑音義』上「阿嚧那此云日、日出時有紅赤相」Maconell之に同じ。)此點にては六重品より寧ろ原經たる明相經に近し。蓋し言語の轉訛と思想の變化とは、一時舊態を脱し來るも、亦直ちに元形の着色を復活し來るを見るべし。又『六重品』『明相經』『立世論』等は其根本一致と認むべきは神通示現と偈頌の一致にあり、而して今亦明相菩薩三昧に入りて世界の穢惡を除かしめ、神通により勝妙の土となし、他界の衆生に驚異の思をなさしたりといふは『六重品』の舍利弗並に『明相經』の阿毘浮の轉化にして火住三昧に入るといふは尸棄の名に因める命名なり。但し密教的經典なるか故に神通示現も一層擴張せられ且又『立世論』及『羅多那伽梨』の文は共に阿毘浮が梵世にありて神通放光千世界を照せりとの『明相經』の文に基き弟子の放光によりて佛陀の勝徳を問ふにありしが説話は變形して佛塔供養の叙述となせり。又明相菩薩が

神通によりて衆寶所成の世界となすといふは目連神通によりて奇光佛土に至り形體極大の佛弟子を見、阿毘浮が梵世に入りしと僅かに一步の差のみ。但し偈頌は失はれ僅かに「懈惰衆生安置餘洲乃至如彼切利天宮」の語に依て「常當念勤加、修行於佛法、當盡苦原際、無復有衆惱」の痕迹を留めたり。其神通因縁によりて衆生を將ひて洲より洲に至り如來の寶塔を遍觀せしむるものは彼の舍利弗が奇光如來の弟子五百人を拉して鉢盂の中に盛れて西方釋迦佛の會座に來りしと其根本觀念を同一にせり。唯だ『六重品』は釋迦佛となし、『法矩陀羅尼經』にありては佛舍利たるを異とするのみ。其他山上如來といふは六重品に舍利弗か一脚を須彌にかけて他脚を梵天にかけたりといふ須迷盧の轉化に出でしものなるが如し。須迷盧を以て佛名とするは諸經に其例少からず。又帝釋憍尸迦か對告衆に表はるるは梵天の名はなきも明相菩薩の名稱中に已に含まれるが故に、今や特更に帝釋を配置せるにあらざるか。唯解し難きは明相が今現に就いて修行しつつある娑羅王佛の名稱なり。『慧苑音義』上、娑羅此云堅固、亦曰最勝也、と云ふ、然らば Sāra (Strength, Power) ならんか。但しかくは王字解すべからず、恐らく『梵文阿彌陀經』六方段中、上方世界の娑羅帝王佛 (Salandra-魏譯に娑羅樹王) と稱するものならん。『梵文觀音經』第三十二頌に彼の無量光世尊は蓮華藏中師子座に座して、娑羅王の如く輝くといひ『觀察諸法行經』には諸天梵天娑羅王の來會を説けり。又『八佛名號經』には東方八佛中娑羅王如來あり。又過去佛の道樹中に娑羅樹あり。又密教金剛界の寶生如來は娑羅樹王開敷華といふ。又『妙法蓮華經莊嚴王本事品』には娑羅樹王、國名大光、劫名大高王、有無量菩薩衆及無量聲聞云云といふ(三十一)樹の

名より轉じて佛名となり、多少阿彌陀佛に關係あり。

要之此法炬陀羅尼經の一節は『明相經』『羅多那伽梨』『立世論』『六重品』と親縁あること秋毫疑ふべからず。従つて阿彌陀佛は明相と關係あるもの如し。特に長阿大本經によれば「尸棄佛有子名無量」といふ、是れ一層此間の關係を明示す。此原語今知り難きも先きに擧示せる佛陀史傳の Anilo 即ち父母姓字經の阿兜羅ならん。本生序說中には Padumuttara 佛の女弟子中に Amitā, Asanā の二人を數ふ。此佛名は本生序說中尸棄佛の女弟子パドゥマと相通じ其女弟子に Amitā あり。若し又阿兜羅とするも阿彌陀と同義なり。『賢劫經』には不退沒如來の弟子に無量あり、明珠毘如來の侍者に無量寂あり、吉祥如來の弟子に無量手あり、善目如來の弟子に無量意あり。(註四) 或は阿彌陀は阿兜羅同義異號の轉化にあらざるか。現に『梵本大經』十九光佛段第十六番に無比光 Atulyaprabhā あり。他佛中の弟子はとにかく尸棄佛の子に無量あるは以上の諸文との聯絡上頗る興味あるものとす。若し夫れ『無量門微密持經』の無量は求那跋陀羅譯により阿難陀 Ananda なるを知る。然らば無量無邊の意義と共に歡喜 Ananda と誤り易き字なり。阿彌陀佛が樂土の主たるは何等か關係あるにあらざるか。又此の證相品にては神通によりて此土に淨土を現せり。茲に極樂思想の起原を見るをうべし。諸經典に於ける阿彌陀佛を見るに、多く事佛にして禪定佛なり。元來禪と神通とは密着離るべからざるを以て、神通所現の國土は多く事土なり。是によりて、禪定佛にして、同時に事佛たる所以も亦此證相品によりて解するをうべし。即ち明相は過去尸棄佛に關せる名稱なるが故に、是より脱化せる

證相品には三昧神通を以て又阿彌陀佛の過去の因行となせり。加之此法炬陀羅尼經の放光如來本事品(註九)を始め、此經全體中に於て、明相經若く奇光如來經と密關あり。之を要するに證相品は諸方面の事實を説明して阿彌陀佛成立の起原を髣髴せしむるものあり。以上は主として證相品の内容と其先驅たりし思想及阿彌陀佛に關する傳説との説明をなせり。以下此證相品成立年代を考察すべし。法炬陀羅尼經は隋闍那崛多(五六一年より五七八年)の譯にして敢て古譯經と稱するをえざるも、此證相品と必然的關係を有する經文が比較的舊經にあるを發見せり。即ち『慧印三昧經』『賢護經』『觀察諸法行經』是れなり。今左に慧印經の抄文を擧げん。

提燈闍(然燈佛 Dīpankī) 佛を去ること八十億劫、佛あり光明と號す。時に慧上王あり、是れ遮迦越(輪王易土集二〇七)なり。閻浮利を領し、王に千子あり、國土を極樂無厭と名く、莊嚴天上の如し。王光明佛に従ひ微妙三昧をえ、國を棄て、剎梨し、深山に入りて正戒を行し、三千歲此三昧の爲め未だ曾て睡眠休息せず。光明佛救泥日(般泥洹)の後、六十四億の塔を起す、八十萬歲人の爲めに此三昧を説く、世々佛に逢ひて亦此の如し、時の慧上王は阿彌陀佛是れ爾時の千子は是の劫に得佛。時に瓶沙王夫人按陀斯利(阿闍世の母) 偈を説く、曰く昔し福明佛のとき遮迦越慧剛王あり兩夫人及び諸天人と阿闍佛土に生じ悉く男子となりて須阿摩提に生じ阿彌陀佛を見る云々。

此抄文中根本の意義は阿彌陀の前身なる慧上王が光明如來の滅後六十四億の寶塔を起せりといふにあり。根本の主意が先きの證相品と同意なるのみならず、先きに云へるが如く出現の國土を以て極樂となし、加之此に光明如來といふは直ちに彼の放光如來乃至奇光如來を聯想せしむるものあり。加之梵天と關係あるべしと思はるゝ輪王の叙述あり。是によりて知る證相品の記事は必しも後期のものに非ることを。又『賢護經』

には、太子淨福報衆音となりて三昧定を學び衆生をして此三昧定を得させんとの發願の叙事あり。此經は西晋法護譯にして比較的古譯經に屬し、且つ證相品と關係あるも繁を厭ひ又『慧印經』以上の古材料にあらざれば此には丁數のみを記せん。(六才)^(六才) 同じく閻那崛多譯にして『觀察諸法行經』には實に右の叙述あり。

過去世の時廣淨厚金普無疑光威王如來ありき。其佛滅後正法沒せん^(註に外道といふ)と欲する時、無邊寶振聲淨行衆と名くる説法者ありき。五通と總持とをえて衆生の爲めに此決定觀衆諸法行三昧を説く、時に多比丘下入道に出て(註に外道といふ)富伽羅(我)に著し、此法を用ひず。反つて妬恨にして彼の説法者を村より驅逐す。説法者怯心劣心頓濁雜汗心なく唯正法に順護す。時に大林王あり二生(註にいふ鳥と)振聲嚴師といふ諸菩薩四大王天乃至色究竟天皆林中に至りて法を聞く。時に轉輪王あり、多人無憂普欲喜喜といふ、王に千子あり。彼の説法者無邊功德寶振聲淨行衆彼の玉の心を知り發心せしめんと欲して靜夜林中より自身を變化して、摩那婆像(象)をなし月輪中に入る。次に月輪より出て、紫色像をなし、此王前虛空中に住して偈を説き、林中に至りて法を聞かんことを勸む。乃ち王及千子等林中にて説法を聞く、時の王は今の不動如來にして、説法者は無量壽佛、千子は賢劫中の千佛是れなり云々。

此の無邊寶振聲淨行衆が三昧に入りて國王の前に諸神變をなすといふ。是れ奇光如來の説話の元形たる明相經の阿毘浮梵世に神通を示現せる記事と關聯せり。但し其偈頌は頗る布衍せるも、尙勤加精進の原意を失はず繁を避けて引文を略す、(字八三三)^(參照)

經によりて、其異差の箇所は必ずしも同一ならざるも、各部分の材料は悉く原形に追跡しうべし。此の如くにして支謙譯に始まり法護譯を經、閻那崛多に至りて最も能く明相との關係を明示し來れり。抑々無量壽諸諸譯中正確に最古の位置を興ふべきは、支謙譯を推さざるべからず。(但し本書には附錄「譯者論」を參照せり)果して然らば『慧印

經』は同じく支謙譯なるが故に明相經より阿彌陀佛の本生譚に變形せし時代は極めて古く、少くとも『無量壽經』中の法藏菩薩の説話及『六重品』の奇光如來經と其成立前後を争ひうべき位置にあり。

前きに六重品の文は比較的古形に近く、布演少きを以て假りに奇光如來は放光以前の成立と見たり。然るに茲に疑ふべきは増阿の此文は東晋僧伽提婆の譯にして譯經已に遅く、加之龍樹世親か阿含中の現在他方佛説として引ける證文中に、此六重品を以てせずして極めて薄弱なる根據に立ちし事は是れなり。即ち『大論』(一往三五)には「長阿含中毗婆門王以偈白佛稽首去來現在諸佛亦復歸命釋迦文佛汝經說過去未來現在諸佛言稽首釋迦文佛歸命以此故知現在有餘佛。」の文を以てせり。此文の次にある理證は兎に角文證としては唯だ長阿の此文のみ又『俱舍論』(三〇)には有部が一切世界に唯一佛なるのみ若し二佛の出現あらば多少佛陀圓滿の徳を闕くとの立義に對し、世親か經量部師(文に此語なし、四疎)に依り文證を擧ぐるに不適當なる梵王經を以てせり。龍樹世親は何故に奇光如來の記事を擧げざるか。阿含中唯一現在他方佛説とせば經文ありて之を引用せざりしは奇怪なり。龍樹世親の見たる阿含以外に別に他方に於てかゝる説話を混せる別部の經典存在せしか。或は龍樹世親の以後に於いて此説話を混せしものか。何れにしても原始佛教の他方佛説にあらざるは勿論、原始的他方佛説とすることすら疑問なり。唯だ龍樹世親の會て與り知らざる或地方に存在せし經典とするに於いて、始めて其地に於ける原始的他方佛説たらんのみ。又俱舍論に表れたる當代有部の思想に徴すれば、彼等は現在奇光如來の説話を混せるが如き聖典を奉持すべき謂れなし。是に由りて之を觀れば

原始的他方佛説に近きか如きも是れ唯。原始的他方佛説に非ず。然るに『如來慧印經』は『如來智印經』(此經の異譯名参照)として既に『大論』并に『十住毘婆娑論』に此名を列せり。(下成立年代参照但し龍樹所見の『慧印經』果たして然らば支謙譯『慧印三昧經』の放光如來滅後寶塔起立の記事は、其傳來古きを知るべし。少くとも無量壽經と其成立年代を同す。但し其形式内容共に奇光如來の説話以上に加増せし痕跡明かにして思想轉化の過程を説明せんには、六重品は確かに『慧印經』の前驅なるも、惜むらくは其年代を定むべき材料に乏し。之に反して『明相經』より『慧印經』となり、次いで證相品となるは年代に於いて明確なるものあり。

譯經史上にて阿彌陀佛の創めて表はれしは婁迦識の『般舟三昧經』なり。而して其内容は神通所現と往生淨土の思想なり。今是等を併せ考ふるに阿彌陀佛は明相經中の阿毘淨神通變現の思想より出達して尸棄は放光(證相品)若くは光明(支謙譯)如來となり。明相は阿彌陀佛の前身となり。輪王の説話と交雜して元來は神通所現中の一佛陀しかも過去尸棄佛に關係ある梵天神話の痕迹を混じ、一層發達して無量壽經觀經の思想を生ぜるもの如し。而して明相經並に奇光如來何れも神話的着色の極めて薄きを見て、其阿彌陀佛を記せる始原材料に於いて既に佛教教理中に編み込まれ、之を直ちに神話に追躡するの不可なる所以を了すべし。何れにしても阿彌陀佛は過去尸棄佛に關係ある明相の轉化たる事明かなり。但し其此に至る迄には佛教内面の思想變化に基くこと勿論なり。こは本論に至りて辨ずべし。

若し如上の所説を以て誤りなしとすれば、阿彌陀佛の名稱たる無量壽、無量光、無量清淨、無量の諸名中大本經に尸棄佛の子無量といふに、阿彌陀佛は最初無量の語に基き次いで光壽清淨の諸屬性を附せしものならんか。(上「阿彌陀佛」の名義参照)

前きに阿彌陀佛に関する諸本生談中の一致點を六項に撮要せしが、今此明相經と證相品との關係を見、編つて前節を稽ふるに、阿彌陀佛本生譚形式の一致は名稱と時限と各經特有の思想を控除せば其形式頗る『明相經』『立世阿毘曇論』『奇光如來經』と類似せるものあり。今各經典の形式内容を詳敘し難ければ此には唯た偈頌の暗合のみを列擧すべし。『明相經』『立世阿毘曇論』『奇光如來經』の偈頌は勸加精進と降魔との思想に成れり。然るに『無量門微密持經』(アイウエオカキクケ)には「常修念佛者道力降衆魔」等の類文少からず(成九)の頌文見るべし。特に(イ)覺賢譯の頌文は明相經と無量壽經(正覺大菩薩流十方戒開精選三昧智慧光明成相度動大千云云)との連鎖と見るべき文あり。(成九)就中(カ)僧迦婆羅譯(キ)佛陀扇多譯に適文あり。(成九)抑も此『無量門微密持經』は佛維耶離にありて、却後三月當に般涅槃すべきを以て目連をして盡く三千大千國土の諸弟子を呼ばしめ、目連即ち須彌頂を踏み我正に如何なる三昧に入りて、能く此佛勅の使命を果たさんかといふに始まり、明相經奇光如來經と關係あると勿論にして、(特に成九)全經の構想亦類似する所少なからず。況んや「尸棄光無動能滅諸結使」(大本經)てふ尸棄佛の形容たる無動の語は所々に隱見せり(成九 2a4b8j) (Sambhara 10)『決定總持經』(四)には「則不爲放逸、惟爲説其行、降伏魔官屬、燒盡衆塵穢」(前八)といひ『慧印經』(三)『賢劫經』(六)『悲華經』(八)等には長行若くは頌文中此意義あり。『法華經』(七)は下に示すが如く、『觀察諸法行經』(九)「應

當受持讀誦思惟爲他廣演當破魔羅軍」(字八三其他字)の語あり。『大法炬陀羅尼經』は上に已に辨せしが如く、『護國菩薩會』(十一)には更に適文あり、(地五)見るべし。又(武)佛菩薩其他人物の名稱中に光明と音聲とを以て其名とせるもの多きは先に表示する所の如し。而して『無量壽經』の頌文に名聲超十方の類語少からず。並に本願文中聞名の語極めて多く、特に第十七願に明かなり。是れ等は痕迹に過ぎざるも、『無量門微密持經』(二)『慧印三昧經』(三)を始め、『護國菩薩會』(十一)に至るまで、悉く此義意を言明せるものならざるなし。之を『明相經』、『羅他那伽梨』、『地動品』、『六重品』が同じく名聲と光明とを以て諸天諸梵を驚かせるに併せ考ふるべき、其暗合の偶然ならざることを察すべし。又(三)(コサ)(二)カクに法藏の語の散見せるあり。阿彌陀目佉即ち無量門を以て陀羅尼の名となし同時に陀羅尼門名說無量(成九)といふは阿彌陀と法藏比丘とに因みあり。又『地動品』に淨命阿彌は(五)には阿彌陀佛本生の名たり。又各經悉く三昧と神通とを述べざるなき(肆)就中目連の神通は『正法華經』授聲聞決品(五二)に目連の受記中「以衆七寶興立塔廟」の語あるは阿彌陀佛の因行に類す。阿毘浮目連共に神通に勝れり。而して目連の當來成佛の因行に此語あるは阿彌陀佛の因行中に多く此の類語あると何等かの關係なかるべからず。此等悉く明相經一類の思想と相離れざるものあり。以上の暗合は一概に之を偶然なりと抹殺しうべからざるものあり。

翻つて惟ふに前に奇光如來經が唯一原始他方佛説に非るを述べしが、今又明相經一類の思想は必ずしも明相經のみが唯一根本の起原ならざるが如し。『增阿』梵天請佛經(成二)には佛が梵天中にありて形を隠

して聲のみ聞かしむ、威徳と福祐との大を以て梵天を服せしむといひ、『長阿』堅固經(成九)には神足の解釋中に「立至梵天」の語あり。同典尊經には梵天が舍利弗入る所の三昧を賞讃せり。又『奇光如來經』には目連の神通舍利弗に劣るなきを證せんとするにあるも『立世阿毘曇論』漏闇耆利象王品(成二)には梵天若くは奇光如來を假らずして、是と同趣意なる、目連が神變によりて金山の邊に住せし象王を服し、藕をえて舍利弗の風病を治せしの記事あり。『大會經』の偈(成九)は『明相經』の偈頌の布衍にして、又神通によりて他界を見たるの記事は『增阿』憍愧品佛難陀をして天界地獄を見せしむ(成二)といひ又舍利弗は歡喜園に遊び提婆は目前に地獄を示現せられぬ。此他阿含經中神通現土の思想少からず。果して然らば明相經は最古の原材にあらず。現に明相經中立至梵天は僧伽中の慣用語なりといへり。抑も亦阿毘浮 Abhihu は勝利(ナルダ)にして三婆々 Sambhavo は生(同上)なり尸棄明相と併せて此等名稱に何等か關係あるものゝ如し。更に其根本思想に入らんか、神通示現の研究に入らざるべからず。阿彌陀佛本生の國土(伍)と本願録とは後日に譲り。茲には本生受身(參)に就いて述べん。

阿彌陀佛本生の受身は二三經を除く外は悉く輪王若くは其太子なりといふ。轉輪王は阿育王に(佛美)基くカヅシユ神話に起原するか(現法)は異説あるも、輪は元來印度特有の詩的譬喩にして、常に勢力の代表として吠陀以來用ゐられ佛敎も亦車輪を以て其教義の顯著なる代表物となせり。古神話にありては輪は因陀羅等諸神に關係あるも特に梵と關係あり。又阿嚧那曙光は東方に關係あり。シヤタバタブラーマナに

は梵は初め東方に生るといへて、旭日を以て梵の最高を讃美し、吠陀には婆樓那と須樓耶と地界を測量し東神ありて西に終る、宇宙城門は東方にありて旭日横はりて入るといひ、東方は梵と車輪と太陽神話とに關係あり。又輪寶東方より來るとは、諸經論の通説にして、『中阿』大天捺林經(一六五) 同轉輪王品(一六五) 『增阿』等法品(一六二) 同禮三寶品(一六三) 其他『俱舍論』(一六四) 等皆然り。特に『俱舍論』には其説話を以て「我從古入聞之」の語あり。抑も輪王は政治的勢力の代表にして佛は宗教的勢力の中心たり。此故に『本行集經』には太子の二相として、輪王相、成佛相、を擧げたり。從つて轉法輪は轉輪王に關係あり。法輪は又梵輪と稱せり。梵は諸神中の優勝の地位を與へられ、佛は出世間の梵王にして、又輪王たり、更に印度神話は由來交替性を帯べるに併せ考ふるに、日光初生の梵と、東方來の輪王とは何等か關係あるものの如し。尙佛と輪王に就きては「菩薩」の項下。佛と梵に關しては第一篇末「佛と梵」の章下を參照すべし。

阿彌陀佛の名義に類似ある梵の形容たる不死常住、無量光明、無量の語句は屢々優婆尼沙土に出づ。唯た優婆尼沙土は神秘的なからに哲學的に、佛教經典は教理的ながらに神話的なるを異とするのみ。かくの如く哲學的梵并に神話的梵か佛教經典中に平行混入せる以上は阿彌陀佛の説話中に其思想の混入を認容しうるものとす。加之上の本生譚中明かに梵天神話を混したるもの少からず。本生に於ける阿彌陀佛か未だ會て眠らず(一)アイウエオカキクケ等といへるは富羅那の梵天に似たり。梵宮梵天(三)コサシは常に阿彌陀佛本生譚の前後に出たり(二)コサシ(十一)(地五) (八) (一六三) 等見るべし。特に(八)『悲華經』にありては梵天は

明かに形相を現じて佛所に至れるあり。『增阿』(一六二) 『立世阿毘曇論』(一六四) に梵は千眼なりといひ、

千世界を照らすといふ。阿彌陀佛の千子は亦多少の關係あり。『大方等大集經』には阿彌陀佛前に菩提自在と稱する梵天の來りて帝釋と問答せるあり。(玄二)此經異譯「寶星陀羅尼」(波)「不空羼索神變真言」には諸菩薩、阿彌陀佛前に三摩地の力を讚するに大梵天の壽命長遠を以て譬へたり。(四十一) 特に『梵本無量壽經』第廿五願

(魏)唐第廿二 には往生者得那羅延身の願あり。然るに其願成就の文には一切善根の法主上首の性あるをば大梵に等しといひ、「魏」には「如梵天王」、「唐」には如大梵天、「宋」には「如梵王身、生梵衆故」といふ。(對照)

固より此願成就には此他金翅鳥靈瑞華の譬喩あるも、那羅延は毘瑟祭にも梵にも通じ、今は那羅延を梵にて表はせるなり。『阿含經』中の梵天と優婆尼沙土の梵とは必しも一致せざるも、印度教學中偉大なる觀念哲學は梵に於いて組成せられたり。吾人は上來『大法炬陀羅尼經』證和品によりて、阿彌陀佛は明相の轉化なりとし、是と諸本生譚との致一を探り、尸棄佛説話と關係あるを見、一層始原に遡りて日神并に梵天神話とに關係せり。其中太陽神話を假るの思想は餘りに年代の遙遠なるが上に日神の何れも光明と壽命とに關係あり。特に一神と確定し難きものあれば、茲にはカウシタキ、ウパニシヤドに於ける梵の思想を一考すべし。梵の寢座 Amiotias は無量光、無量力何れの義とするも、『無量門微密持經』(二)に「有勞光大照」の語あり。(成九)

『賢劫經』(一六)に「其善大神足於是現大勢……值光明無量」(一六四) といひ、「最勝光明藏明無限、我住勞力願宣斯」(一六四) といひ、此類文は『無量壽經』等の諸經に發見すべし。特に大勢至菩薩が無量光の侍士たるが如

き得那羅延身の如き這般の意義と相通するものあり。又彼のカウシータキ、ウバニヤドに無量光の寢座は月界より到るといふは、闍那崛多譯(二)クに阿彌陀佛の前身、不思議勝功德比丘に從つて開法せし、長者月相の子は無邊光なりといひ、(成九) 覺賢譯には「日生無量光」(成九) といひ、『梵文無量壽經』第四章第一頌にも、「無邊無比の覺慧ある無量光は如何なる光も此處に照すことなし。日珠と淫婆の月光も此の一切世間に明かなることなし」といひ、五漢譯亦皆此義意を傳ふ。(但し淫婆の語なし) 『悲華經』(八)トナには無淨念轉輪王の説話中に王に千子あり。不胸、日念、因陀羅等四十八名を擧げ、其臣寶海梵志の夢見中に日輪像あり。又大身に於て月盤其身を圍繞するといへるあり。此輪王は皆無量淨行を修して、無量光明の無量壽佛たる可きを授記せられたるは、或は梵の思想の換骨脱體と見らるべく、『觀察諸法經』(九)には阿彌陀佛の前身、説法者が不動如来の前身、輪王を發心せしめんとして、神通によりて月輪中に入り、次いで月輪を出てて梵色像をなし、普遍光明をなすといひ、先きに證相品の娑羅王佛の如きは梵界の市名 *Salaya* と關係ある名なり。Pima, Ulagina (on) は聲に關係あり、明相の Aruna は或は彼のカウシータキの Aruni の轉化にあらずるか。若しそれ梵歌の梵と心的結合を示すに阿耨唎哆を以てせるは(ジ、デヒス) 佛によりて壽命無量の不退の往生をうるに擬しうべく、商羯羅の所謂、最高梵に清淨 *Vishuddha* 圓滿 *Nirahitya* なる屬性を附加すれば劣等梵となり。此の如き梵を崇拜して死後の幸福をうるも亦是れ輪廻中の一波瀾にして、只此より進んで順次解脱 *Brahman-* 三によりて眞正知識をうべしとなせるは、無量清淨佛と順次往生との思想に類せり。『如幻三摩地無量印法

門經』(地十二) には彌陀の前身、威德王が定中二蓮華を生し、二童子化生すといへるは、梵が毘瑟摩睡眠の蛇床中に座せるものと關係あり。此の如くにして阿彌陀佛は一面梵と關係あるものの如し。

以上阿彌陀佛の本生譚を辿り明相經を通じて梵天神話に追跡せり。然るに過去尸棄佛と最も關係あるは阿闍佛なり。下に辨ずるが如く阿闍は諸佛中最古の佛にして、阿彌陀佛とは四方四佛の配合の成らざる以前より關係し、現に阿彌陀佛の本生譚中に其關係者として現はるるあり。(四)ス(セ)七(ツ) 阿彌陀佛亦諸佛中最古の一佛なり。而して尸棄佛説話を中心として、此兩佛を見るに其關係の偶然ならざるものあり。『長阿』大本に「尸棄光無動」といへるは無動は阿闍の名なり。而して巴梨語の *Pudbo* 梵語の *pudbo* は同時に「前」「東」の義あり。然らば過去佛尸棄は東方阿闍に轉化しうべし。之を以て先きに列擧せる諸經文を見るに賢劫經(六)コ(ク)には阿闍佛の前身は阿彌陀佛に關係あり。頌文に「值光明無量、復見無怒覺」(黃四) の語あり。又「無量門

微密持經』には長行若くは陀羅尼中に不動無動の語あり。(成九 *Abhaya*) 『法華經』往古品中十六王子の筆頭に阿闍と阿彌陀とあり。『小經』六方段に東西方の首位として阿闍と阿彌陀あり。『寶積經』には「無量佛威光、阿闍六名稱、見彼者當學此法門」(地一) といひて二佛を特標し、『菩薩念佛三昧經』には樂土の例として、東方不動國土、西方安樂世界の如しといひ、(玄八) 『一切法功德莊嚴王經』には不動が極樂往生を勸むるあり。(其他「觀察諸法」) 阿闍と彌陀とは特に關係ある佛陀なり。若し夫れ阿彌陀佛の起原を明相經に辿るを以て至當とすれば阿闍が此の如くにして阿彌陀と關説せらるゝ、所以をも説明するをうべし。此の如くにして尸棄は奇

光となり、無動は不動となり、俱に東方佛とせらる。是に對して阿彌陀佛は西方に配せらる、阿嚧那は元來東方神なり。何に由りて西方に配せられしか、(Pascina^註) 上表の阿彌陀佛諸本生經の所值佛名及對者の名稱中に諸經佛菩薩の光明を形容するに日月星辰を假れるものあり。阿彌陀佛は明相たるの外又月施月得たることあり(四)スセ。又阿闍も日行と稱せらる、あり(二)。日月を以て阿彌陀と阿闍とを表はせるは是又古神話の面影を復活し來れるを見るべし。

想ふに此阿彌陀佛を西方に配せるは阿彌陀佛は現在佛なれども、衆生よりすれば未來往生の佛國主なるが故に茲に配するに至りしか。(註)は西方を表はし同時) 或は輪廻の終極を意味し最後生の意味にて西方に配せしか。(梵文菩薩經佛成道の頌文 Iram no pascinā) 或は神通所現の世界が勝妙たるより未來天國夜摩世界が夙に西方に配せられしより、それ等と聯想せしものか。或は又阿彌陀佛が最初明相經一類の思想より轉化するに當りて、先づ本生譚の形式に於いて表はれたるが故に、當來成佛を説明する爲めに茲に未來を表はす西方に配せられしか。又小經六方段を見るに東方佛は山に關して立名せられ、西方佛名は光明に關せり。阿闍の類語阿折羅 Acala, Acala は山に關係し。印度は東邊に山あり。阿折羅漢東邊に寺を建つるの記事あり。東西は斯る思想に基けるか。抑も亦阿嚧那の曙光神より出て觀念交換の結果日没に配せしものか。又或は阿闍先づ尸棄より出て、次いで明相より阿彌陀佛を生じ、阿闍を以て東方に配せるより、次に阿彌陀を西方に配せしか。とにかく兩者共に中間の媒介思想を通じて日輪神話に基くとせば、其の東方たり西方たる何れにして

聯結し易き思想にして、東方が比較的親縁あるを示すのみ。

又阿彌陀佛は常に觀音と結合せらる。然るに『決定總持經』(スセ)に光世音或は觀世自在は阿彌陀佛本生所值佛たり。『悲華經』には觀音は彌陀入滅の後、遍出一切光明功德山王如來と成るといふ。或は證相品の山上如來と關聯あるにはあらざるか。『決定總持經』によりて觀音が彌陀の本生所值佛なりとの所説に基き、又觀音は時として阿彌陀佛を代表するの親縁を有し、且つ現に世間自在王如來を以て觀音を稱せるあり。(菩提流支^{音四十}) 是に由りて之を觀れば『大經』の世自在王佛は或は觀音にはあらざるか。蓋し觀音の信仰や廣汎難多なるものあり。阿彌陀佛との關係は下に至りて辨ずべし。(附錄^{參照})

但し如上の所説は阿彌陀佛本生譚の一面より觀察せしものに過ぎず。浩瀚なる文献中、僅に二三の關係文證を捕へて阿彌陀佛の起原を揣摩し最後の斷定を與ふるが如きは吾人の取らざる所なり。唯だ是によりて研究の端緒となるをえば則ち我が願足る。蓋し前に既に述べたるが如く、明相經一類の思想は諸所に散見し、加之阿彌陀佛以外の諸佛に於ても亦其形式内容を之に追跡しうるもの少からず。獨り奇光如來經と阿彌陀佛本生譚とのみならず。先づ『法華經』の如きも其構想の根底頗る彼經と類するものあり。『法華經』最古の譯本たる法護の『正法華經』光瑞品(序品)は日月燈佛、釋迦牟尼佛、彌勒につきて三世諸佛一貫の由來并に法華説法の來意を明かさんとして、先づ眉光東方萬八千土を照せるあり。日月燈佛は尸棄、奇光と相通ぜり。又其土の「尊者弟子皆爲幼童」といひ「三昧正受名無量頌、於時即雨大雲音華、又現電燄大雷音聲」といひ、此等

奇光如來經を思はしむる文なり。又釋迦佛の本生超光菩薩は阿彌陀佛の本生譚と同一構想なり。同往古品(及二品)以下括弧内は什譯なりには大智衆慧(大通)佛の時、十六王子結縁の始末を説けり。佛名中に阿毘淨あり、其佛の説經の無量(若くは梵度已)を示さんとして東方千國土の譬喩を出せり。且つ「其佛本座道場、破廢軍已、結伽跌座、身心不動靜然安不動」といひ、諸梵天王諸天子歸依供養す。彼の佛の大光、世界に遍ねく諸天光に勝り、十方各五百萬億の梵宮殿爲めに光照常に倍し。東方五百萬億の諸大梵王中の一大梵王、護群生(切二)同じく東南方の最慈愛(大)南方の善法(妙)諸方亦復た此の如く上下方の明識(上方)大梵天來りて十六王子と共に轉法輪を請す。無怒(阿)は東方極樂世界(欲國是れ梵界の形容)の作佛。無量壽(阿彌)は西方作佛(往古品を明相經の轉化とすれば此中)なりとし。其他佛名并に敘事中に須彌山を假れり。此等悉く「明相經」奇光如來經を聯想せしむるものならざるなし。十六王子中に阿彌陀佛あるは或は尸棄佛は梵天の名となり、阿毘淨か大通智勝佛 *Mahāvijayaśambhu* (正法華經光瑞品の日月燈佛は頌文に「最勝智衆慧に通ず」となり。其子に阿彌陀あるは「長阿」大本の尸棄の子、無量とあるに併せ考ふるに何等かの關係あるべきを思はしめ。是と同時に明相經が阿彌陀佛の本生譚にのみ轉訛したりとは斷ずべからず。特に七寶塔嚴世界を照すや、其土の衆生此土に來りて多寶塔を供養す。釋尊之を三變して淨土をなし、分身諸佛を集め、自ら寶塔を開きて、多寶佛座の半ばに座する所、禪定と神通と大音と大光とを以て法華經の説話を宣言し讚

嘆せざるなく、佛神通の形式は概ね此の如く(如來神足行品及二品)光明と音聲と梵天驚異とを逸せるなし。就中前きの救一切、大悲、妙法、尸棄の諸大梵天の外に、「法華經」が一切賢聖の父たるは大梵天王が一切衆生の父なるが如しといひ、(及一)「稱慶大歡喜、安穩無滯道」又は「減損諸天衆」の思想は前きのカウシトタキ、ウバニシャ、ドの父母としての梵、アーナンダ及梵界の守衛たる波闍波提、因陀羅の退散と平行の思想なり。法師功德品の六根清淨を以て精氣と根との對比とし、化城喩品の十方の梵天來會と、梵座の方所によりて配當を定めたとを見、更に三百由旬の化城は有象梵の方便と見るをうべく、娑羅樹王佛は彼の市名と通ず。信解品長者窮子の譬喩は彼のカウシトタキ、ウバニシャ、ドの注釋と全く同意なり。從地涌出品以下、本門の佛陀は報身(支那)とするも、法身(日本)とするも、「慧光照無量壽命無數劫」(壽量)「父少而子老、舉世所不信」(品)等の語を推窮し、本有無作の三身佛を考ふるに、吾人は髣髴として梵の試問に連想せざるをえず、又彼のアミトリヂヤス(無量)の如きも「大方廣莊嚴經」(前四)には釋迦佛を大勢(或は志)或は成就那羅延力者といへり。然らば則ち釋迦佛の想化中に亦阿彌陀佛に就いて辿りし徑路と同じ痕迹を發見しうべし。(本書には「優婆塞尼沙土と阿彌陀佛」の一語を感ぜり)加之「未曾有正法經」には放鉢因縁を以て二百の天子退大の心を服し、妙吉祥は摩竭國阿闍世の爲めに東方常聲世界八萬大士を會して説法せるあり。上經異譯たる婁迦識譯「阿闍世經」、竺法護譯「普超三昧經」(以上三)皆同趣意にして、併せて「奇光如來經」と密關あり。「大集經」不脛菩薩品には、毘婆尸佛と同號(長阿大本經毘婆尸佛經其目不脛の故に毗婆尸と號す是れ九)の不脛菩薩は東方普賢佛の處より、此上に來り、

阿彌陀佛及び極樂思想の起原に就て

舍利弗に説法し、佛、不眇の因縁を説くや、法語王子として出家比丘となり二萬歲中睡眠せず、滿一千年不動不搖といひて、八陀羅尼八精進、八法大莊嚴、八發心を述べ無盡器陀羅尼を解せりといふ。毗婆尸佛にも尸棄佛と同様の轉訛あるを示し、法語比丘の本生は法藏比丘の本生と符節を合するが如し。(以下) 全海意菩薩品には過去無邊光如來、土の名、不眇、劫の名、光味、其の國土に二城あり、淨城と樂城とにして、莊嚴他化自在天宮の如しといふ。(以下) 無邊光如來は阿彌陀佛なるが如し。(古來之を阿彌陀佛とせるものなし) 然らば前經と併せて『毗婆尸佛經』にも追跡するをうべし。東方佛土と此土來至との説話は虚空藏菩薩品(以下) にもあり。東方佛土に就きては『稱揚諸佛功德經』(四方百) 『清淨毘尼方廣經』(列二) 『大乘大方廣佛冠經』(十吉) 『祥經』(東方) 『八佛名號經』(八佛) 並に是等の異譯を稽査せざるべからず。東方佛(須彌)來現の説話は『維摩經』不思議品にもあり。『東方最燈王如來經』(成七)には、東方十萬億土の衆華國より、大光無量光菩薩を使はして娑婆に來りて咒を説かしむるあり。『菩薩念佛三昧經』微密王品には三昧をうるの法を説き、次に往因を示さんとして過去樂住劫、明相佛安隱園に住せる時、勝微密王聞法出家し、二法(舍摩他、毗)を乘り、念佛三昧を修し、造華上佛となるといふ。而して神通によりて弟子と共に虚空に登り、東方乃至三方を照し、光中八十億の妙蓮華あり、華中化佛あり、其眷屬無量、左侍帝釋右侍梵王、猶如眞寶釋梵無異とす。(玄八〇一) 而して『法顯傳』には佛、切利天より降下の時、梵釋左右に侍す(玄八〇二)といふ。上文と併せ考ふべし。此明相佛は阿彌陀佛ならざるが如し。又同經不空見本事品(玄八〇三)には釋迦本生に神通勞

力自在の無量力王として梵天に生れしと、寶肩並に普密王が如來の關維と起塔の因縁とを叙せり。而して國土莊嚴、先きの證相品に同じく、加之、誓願の事あり、次に目連迦葉舍利弗等の神通を述ぶるや、目連我往東方過三千大千還住第三世界之中……聞説無常苦空之音一といひ、又偈には「我住梵宮、言語之音、今此世界、皆悉聞知」といふ。明相經一類の思想を豫想せる文なり。此他『持心梵天所問經』光品(字一)には東方七萬二千土の清淨國(異譯には清淨國)月明如來(月光明或は)の會座にありし、持心と稱する梵天が(勝思惟或は)娑婆世界釋迦佛の光明を見、彼土より此土に來至すといふ。釋迦佛會座に綱明菩薩あり。又梵は佛弟子たり。且つ「如來光名得自在、若有衆生、遇斯光者、能問如來、梵天王行業因縁」の語あり。如之、釋迦の斯土に來るは大慈本願に由るといひ、偈文には阿闍阿彌陀の淨土を擧げたり。以上奇光、放光、(月)東方、莊嚴土、本願の思想を含み、是等悉く梵天に關係あるを知るべきにあらずや。蓋し神通によりて光聲梵界を動ずるは普通の形式にして(巴黎轉法輪經、世)又『明相經』は『奇光如來經』にも『法華經』にも『微密品』にも通るをうべく、獨り阿彌陀佛の起原にのみ適用すべきにあらず。吾人は豐富なる、從つて雑多なる藏經の研究に入るや、實に望洋の嘆を發せざるをえざるなり。阿彌陀佛の起原はかくの如くにして材料は吠陀にも(但し本書には「印度神話」と阿彌陀佛を略せり)優婆尼娑土にも佛敎經典にも探りうべきも、吾人は是によりて何等確實なる斷定を得たるものにあらず。一見明了なるが如くにして實は曖昧なるもののみ。

(其の三)

以上阿彌陀佛并に極樂の起源に關する諸種の考説を述べしが、未だ確説をえざるが如し。願みて惟ふに以上諸説は主として佛教以外の思想に其起源を辿らんとするにあり。凡そ人文史上の現象は一として四圍の事情に交渉せざるはなし。然るに阿彌陀佛は始終佛徒崇拜の對象にして、印度諸神の如く佛教外の諸派と共通の神格にあらず。由來佛徒の構想は頗る豊富なるものあり。廣汎なる佛教經典が、佛徒の製作にして、其教理には佛教内部の發達あり。佛教が社會的に諸種の新風習を作り、佛徒思想の洋溢は自己の領外に出て、勝宗六七句義を十句義に改造せるが如きあり。特に佛教に數多き佛菩薩が其形體言語悉く佛教的なる以上は、其彩色、服裝の如何を以て直ちに外來とすべきにあらず。吾人は「阿含經中の阿彌陀佛」を探り(本書に附)又其本生譚に尋求せしが如きも元と此用意に出づ。

抑も阿彌陀佛も極樂も印度の外内を問はず。之を佛教以外の思想のみに辿るは頗る困難なるものあり。此故に全く外來思想となせる諸學者も往々佛教内發の考案に觸れたるもの少からず。アイテル氏は禪定五佛は、佛徒の作爲となし、エドキン氏は阿彌陀佛は釋迦佛より想像せられたりといひ、メンヂーヌ氏の如きも阿彌陀佛は釋迦の道德原理たる慈悲の人格化なりとなし、殿中ワ、デル氏の如きは無量壽佛は無量光佛の反映となし、又阿彌陀は燃燈に類すといひ、此他始元佛(アインゾフ)より阿彌陀佛を生ずるに至りしは禪定觀念の結果にし

て、佛教の空觀哲學は、煩鎖的發達を遂ぐる間に、人心自然の要求なる或種の實在を戀ふるの念は、此空虚なる世界に於て求むるをえず。普遍的實在は彼岸にありとなし、彼處に於て生死なく變化なく、苦痛なき状態を得らるるものとし。此等の安穩界の主たるものを無量光の西方淨土に認めたりといへり。松本博士は『覺經』の無量清淨佛は清淨法身の義なりといひ、(淨土論)法身と大垂見王經との調和をなし、(全上)又阿彌陀は無限實在の義となし、多く佛教内部思想の發達を叙せり。萩原氏亦阿彌陀多を阿彌陀廣とせるは佛名なるが故に同義異號を以てせるに出づといへり。然らば則ち佛徒の立名にあらずして何ぞ。其他前田博士は華嚴經人法界品五十卷看によりて華嚴經起原なりといひ、(宗教界二卷)村上博士は指方立相と即事而真。大目と阿彌陀との關係を推し、阿彌陀佛傍明經典の密經中に頗る多く、且つ他方思想は密教の加持に由りて説明せらるるとなし、密教中に其起原を歸せり。(原理論)就中最近高橋教授の阿彌陀佛に關する考案は頗る適切肯綮を得たるものあり。(東亞之光)此他に望月信亨氏の無量壽經成立年代考(宗教界二卷二、三、四、五、六、七、八、九、十、十一、十二、十三、十四、十五、十六、十七、十八、十九、二十、二十一、二十二、二十三、二十四、二十五、二十六、二十七、二十八、二十九、三十、三十一、三十二、三十三、三十四、三十五、三十六、三十七、三十八、三十九、四十、四十一、四十二、四十三、四十四、四十五、四十六、四十七、四十八、四十九、五十)中には諸方面の問題に觸れ、詳密該博を極むるものあり。要するに以上佛教内發説は一言にせば佛教佛陀論の發達に歸せんとするにあり。然るに佛陀論の根本は釋迦佛にあり。

凡そ諸佛一として釋迦佛と關係なきものなし、十方諸佛は皆悉く同體覺一法(月上女經)なるが故に釋迦即ち是れ十方佛(史記釋迦)にして釋迦佛も時に其名を捨て、妙覺如來たることあり。(中陰經)他佛は釋迦佛を辿り釋迦佛亦他佛の名を取りて互に融道せり。惟ふに佛陀が一たび歴史以上となるや、現身佛陀との

關係を附するに釋迦佛と他佛とを別とするあり。或は本述二門を以て之を説明するものあり。淨土教は前者にして、天臺家は後者なり。かくの如くにして佛教の諸佛菩薩其數多きも、會て現實佛陀の事實を構想の梁骨とせざるものなし。蓋し諸佛は一面釋迦佛の想化のみ説明のみ。

暫く古藏『大經疏』^(五卷)によるに、釋迦佛壽に四說あり。唱八十是れ其一。『大品』思益の七百偈祇是れ其の貳^(首楞嚴經實)。『法華』の壽量無量是れ其の三。『涅槃』常住是れ其四といへり。後の二は即ち無量壽佛に非ずして何ぞや。『菩薩本業瓔珞經』^(列一) 集散品には佛會て無量光無量清淨身を現すといひ、『思益梵天所問經』^(守一) には如來の光明名號を聞えて、信心清淨なるものは亦光明身を獲といへるは、其佛陀は無量光佛、無量清淨佛ならざるべからず。

抑も佛身不滅の信仰は原始佛教に萌じし、無量壽佛は是より出つべく、又如來の慧身は智見の明を具象化せしものにて、明は常に光にて表はさる^(Iris は光にして又智 たり Haeudonell, 1933)。『增阿』馬血天子品に「彼如來爲明爲光、亦無礙滯、知三世事、靡不貫博」といひ、『中阿』天經^(及五)に佛は修行に依りて智見明淨なるが故に光明をえたりといふ。無量智の如來は無量光如來ならざる可らず。若し夫れ『雜阿』二十三の「如來之體身、法身性清淨」^(及三)『增阿』二十一の「如來身清淨無穢」^(及二)其他清淨行の成就者は無量清淨佛を生ずるに亦甚た難しとせず。彼の慈悲救主、本願佛陀、極樂教主の如き獨り阿彌陀佛の信仰中に偶然顯はれたるに非ず。皆佛教思想開發上の必然的要求の産物ならざるなし。吾人は阿彌陀佛の研究を進むるに従つて益々釋迦佛の研

究に歩を轉せざるをえざるものあり。尼波羅西藏の佛教にては人佛釋迦は五禪定佛中、特に阿彌陀に對應し。前きに引用せる『如幻三摩地無印法門經』の威德王は阿彌陀佛なるに、是と全く同一説話なる『觀音授記經』^(地十二)には所謂威德王は釋迦佛とせり。其他阿彌陀佛本生の關係者に釋迦佛少からず。吉藏は釋迦も無量壽なるが故に二佛一種無異^(五卷)なりといひ、其他村上博士の『佛陀論』^(及三)の引用文見るべし。古來の佛學者多くは彌陀釋迦同體を主張せり。唯夫れ所謂宗乘學者若くは注疏家は信仰を理性の溶爐に容れ、事實を想定の際時に配し、多くは成案批評の拘束を免れざるものあり。此故に彌陀に久遠成と十劫成とを分ち、唯心と心外との淨土教主を語り。法然上人の所謂各宗に一切經ありの見地に立ちて、彌陀一佛によりて諸經諸論の融和混同を企て、或は彌陀本師の説を唱道し、獨り彌陀を以て諸佛の根底となさんとするあり。内發説は稍もすれば自家信仰の説明に致々として、客觀史實を疎外しするの弊竇あり。吾人は單に内部を看過して外部に迫る外來起源説と内面を過重して事實を勘度する内發説との中間に立ち、内外兩面の觀察を拆衷して、阿彌陀佛の信仰を探らざるべからず。阿彌陀の起原は縱令明晰ならざるものありと雖も、二千年來佛徒信仰の事實なりき。抑も佛教は何故にかゝる佛陀を想定するに至りしか。佛教史上に於ける阿彌陀佛の信仰の旨趣は寧ろ其起原説以上の重要を價ひす。吾人は準備として次に阿彌陀佛の成立年代と其地點とを推考し、去つて本論に移らん。

三、阿彌陀佛并に無量壽經の成立地及其年代に就て

(其の二)

六二

凡そ歴史的研究には那地點に起り、何時に始まりしやを以て出發點とせざるべからず。時方の二考察は此種の研究に缺くべからざるものとす。然るに阿彌陀佛の成立地及其年代に就きては遑として捕ふべきなし。ビール氏によれば、蘇訶縛帝はソコトラ島の傳説が南方海岸に傳はれりといふも、印度河口の邊乃至錫崙島の附近に曾て此種の傳説の存せし痕迹なく、アイトル氏等は波斯より入りて印度北部に成立したりといふも、殆ど想像に過ぎず。此他に或は中部印度に成立せしものとなし、或は西北部に成立せるものとなし、又或は全く印度以外の地點に成立せしものといふ。此の如く異説區區にして實に適從すべきを知らず。先づ此問題に關して研むべきは、第一に阿彌陀佛の傳説は如何なる地方の人によりて傳へられたるかを見ること是れなり。

先づ印度にありては馬鳴、(起信論) 龍樹、(十住毘婆沙論) 易行、(智度論) 無著、(對法論) 世親、(淨土論) 攝大乘、(法華經) 安慧、(法華經) 大乗集菩薩、(論) 徒並に皆彌陀を唱説し、比較的著作年代の明かなるものに阿彌陀佛の記載あり。特に馬鳴は專念彌陀の思想を鼓吹し、世親に淨土論あり、又十二禮文は龍樹の作と傳ふ。而して此等の諸師は悉く同地方の出にあらず、又其遊歴地點は彼此に交渉して如何なる地方の思想を傳へた

るや判別に苦しむもの比々皆然り。然れども彌陀崇拜の思想が紀元後一世紀頃より印度内部に於いて已に存せしを證しうべく、加之漢譯大藏經中に於いて、彌陀若くは極樂を散説せるの經典、凡そ二百數十部あり。大乘經典約六百数十部に比例するときは、其三分一強に當る。固より此中には大般若經六百卷中僅か數ヶ所のものあり。其紙數分量よりせば縮刷藏經の一二冊位に過ぎざるべきも、殆んど各方面の經典に其名の表はれたるは事實なり。而して此等の經典中西域傳來の書少からず、而してその多くは印度に發したるものなれば、是によりて彌陀崇拜が豫想以上の隆盛を以て印度及西域地方に傳播せしを知るべきにあらずや。然らば法顯玄奘の記事に關けたる所以を以て直ちに印度思想に非ずと斷すべきにあらず。况んや法顯玄奘共に阿彌陀佛に關説せる經典を譯出せるに於いてをや。或は印度の地に未だ曾て阿彌陀佛の像を發見せずといふを以て印度の思想にあらずとするものありと雖も。是れ前説を否定し去るべき有力の證據にあらず。更に義淨慈愍等の傳ふる所を併せ考ふるに阿彌陀佛は必ず印度に於いて成立せしものと見ざるべからず。唯だ印度の如何なる地方に於いて成立せしかは問題なり。

阿彌陀佛の關係經典極めて多きも、或歴史上の地點に關説せる記述は皆無といふも可なり。問々毗舍離補陀落等の名あるも是れ主として觀音に關係せるものにて、又歴史的材料とすべき記事に非らず。『佛說作佛形像經』に優填國王、佛を禮して阿彌陀佛國に生ずといふも、是の記事は後世の構想なること固より、『楞伽經』の南天龍樹の懸記も、龍樹以後の成立經典にして發生地點を定むべき材料とならず。印度撰述の諸書にも

彌陀信仰と地理との關係を示すものなし。慈愍三藏(開元七年唐天寶七年七四八)版、六十九卷、其題圖地は印度は勿論、生淨土集の著ありといふも今傳らず。は其印度にあるや、深く此世を厭ひ偏く天竺の三藏を訪ねて、何國何方に樂土あるべきやを問ひしに、學者皆淨土を勸むといひ、(宋僧傳)二十九健陀羅國に於て王城東北の大山に安置せる觀音像前に至り、至祈七日、遂に觀音其の身を現じて、念佛誦經往生極樂を勸むといふも、當時の印度に於いて果して此の如きの盛況を呈せしや否や、他の傳記と併せ見るに未だ必ずしも然らざるもの、如し。されど當時其信仰の比較的盛んなりしを推しうべし、但し是の傳説は餘りに後期にして、原始的材料にあらず、此の方面の始原材料は殆んど闕如せり。

抑も印度の西北方は夙に佛教に關係あり。阿育王時代の傳道師は多く此地に入りき。『印考』第六部第三章第貳節佛教の西北布教の項下及び(472)等を參照すべし。又遠く佛在世に、既に恐らく迦濕彌羅若しくは印度河邊に傳導せしが如き形迹あり。(史三三三)佛の入滅に北方を枕とせるは當來佛教北地に入るの前兆なりとの傳説あり。(史九三三)又『般若經』難信解品には、滅後佛教東南方に興り、後ち五百歲東北方に於いて流布すべしとの語あり。(荒六)又大衆部は佛滅二百年、王舍城より北方央嶺多羅即ち雪山地方に去れりといひ、龍樹は雪山に入りて大乘經をえたりと傳へ(大史) 6610縛撈河畔の縛喝國(即ち北方アング地方) 納縛僧伽藍に於いて諸論師論部の製作をなせしを傳ふ。(西域記) 770大乘佛教の保護者たる迦膩色迦は北方の王なり。此頃より漸く支那との交通あり。従つて西域諸國に佛教の興隆を見たり。シュタイン氏は此の事蹟を以て會

つて印度人によりて成されたる最も著明の貢獻なりと云へり。今同氏が發掘にかゝる遺跡文献中梵書法樓書は處々に發見せられ中には往々方言を混せるものあり。(シタイン) 267, 268等又波斯印度の混化語なるパミール地方の Ghulchah 方言あり。(全上) 300會て此干闥附近は Faksasia (Fakia) よりの印度移住民に占領せられたる(全上) 283干闥を中心として Kenja Nja Endere の河畔 Dandan Uluk Yotkan の趾邊紀元第一世紀に印度西北方貴霜王朝に使用せられし梵書法樓あり。(全上 323, 37) 同時代の官用報告命令中には印度方言のものあり。往々サンスクリットを交へ、且つ印度人の署名あり。(全上) 320 古代此の附近に於いて此等の語を使用したりしを證し。(全上) 321 彼等佛教徒は梵本若しくは中央亞細亞語の翻譯によりて讀誦傳道せしものならんといふ。(全上) 321 古來西域三藏中羅什が龜茲に生れてしかも其名は印度名を襲ふが如き事例少からず。(羅什の父は Kumāryāna कुमारヤナクマールヤナにして龜茲の王女ツワツワと婚す。鳩摩羅什の稱是れより來れり。) 又彼の法顯傳には當時鄯善以西出家人は多く梵語を使用せりと傳ふ。(致六) 116 且つ又『法華經』の如きは羅什は龜茲本により法護は梵本によりて譯せりといふ。(經序文) 然らば無量壽經等は印度西北以外の地に於いても、成立の可能を認容しうべし。現にビルヌフ氏の如きは尙頭はサンスクリットに熟せざる地方若しくは極めて蚤代に分岐せし方言のみを使用せる地方にありて生成し恐らく印度境域以外の成立ならんと云へり。此のビルヌフ氏の考説は幾多反證の事例ありて取るを得ず。特に無量壽經の偈頌が氏の考説を適用しうべきや否やは固より以て疑問なり。蓋し阿彌陀佛は古來稱して諸經所讚の佛陀となし『陀羅尼集經』(四四)『阿唎多陀羅尼阿嚩力經』(四七)『菩提場所說一字頂輪王經』(四五)

『無上平等最上瑜伽教王經』(成四) 『聖寶藏神儀軌』(成十三) 『觀自在多羅菩薩儀軌』(四十一) 等に阿彌陀佛像畫刻の法規を記し、彌陀觀音勢至の三尊像並に觀音冠中の阿彌陀佛は諸經に出て密教經典には其畫刻の法を擧げたり。(四十五、四十六、四十七) 此に列擧せる經典は七八世紀後の譯經なれども三四世紀以來の譯經中にも像觀を記せしもの少からず。惟ふに印度若くは西域地方に於いて必ず其彫刻若くは畫像の發見せらるべきことは是れなり。殊に西域地方は風砂と掠奪とによりて荒涼に歸せしは紀後八世紀の交にあれば(「千四」³⁰⁴) 此方面の遺物中には比較的古材を收得すべき豫望あり。シュタイン、ヘデン等の探險家が「堀れ堀れ歴史は地下に眠れり」との語は吾人に多大の感興を興ふるものあり。惜むらくは現時にありて此の工藝上の微證極めて稀なり。或は佛陀迦耶の塔を埋め拘尸那城下を灰にしたる(「ワツシ」) 異教徒の横暴に見るに多くは塵滅に歸せしものか。彼のムハムメド、ナリリに發見せられし三尊像は果して阿彌陀觀音勢至なるや未だ疑を存せざるをえず。(「佛美」¹¹⁰) 但しロルヤンタンガイ及びブダ洞エルーラ、カンヘンリ、アヂヤンタ、ゴロブドール等に發見せられし觀音冠中の佛像是阿彌陀佛たること確實なり。(「佛美」¹¹⁰) 斯の如くにして印度西域の地に於いて今後或は發見せらるゝならんか。然れども現在知られたる此等の材料は早くも四世紀に溯り得るのみなれば、その起原につきては確固たる材料を求むるをえず。是によりて、試に譯經三藏の傳記を見るに髮髻として其の成立地點を暗示するものあり。安世高は疑はしきを以て之を除き、婁迦讖以下に就きて見るに先づ婁迦讖は月支の人、康僧鑠は康居の人、帛延は何れの人

なるを知らずと雖ども西域地方の人なること明かなり。康僧會の祖先は天竺に居れりといふも會は康居に生る。法護は月支人にして燉煌に居住せしものの子にして、其師なる竺高座に従つて、西域に至り諸國を遊歴して外國異言三十六種に通ずといふ。帛尸梨密多羅は西域の人、覺賢は印度迦維羅夷(或は那呵利城人)の人にして北天竺に居住せし人の子なり。闍賓に住し秦人智嚴の請により葱嶺を越え六國を經、交趾に出て海路支那に至れり。同時代の羅什は是より先き秦地にあり。什は元と天竺人にして龜茲に居住せし人の子にして、曾て辛頭河を渡りて闍賓に到り、盤頭達多に就く、又轉して月氏北山に至り、沙勒國に到りて喜見三藏に謁し、莎車王子に就て大乘に歸入したりと傳ふ。法顯は其遊歴地最も明了にして、烏夷、干闥等西域諸國を遍歴して舍衛國に入り、摩竭陀を經て、今の錫崙に渡り、海路支那に歸る。曇摩難提は兜佉勒の人にして、諸國を遍歴し曇無讖は西域或は中天竺の人にして姑臧、干闥、吐谷渾の邊を跋渉せり。呂良耶舍は西域の人、曇摩密多是闍賓人なれども龜茲燉煌を經て支那に入り。智嚴は先きに闍賓に入り覺賢を迎へし人なるも、亦足跡を西域に印し、其歸國後『普曜』『廣博嚴淨四天王』等の諸經を譯するや、是れ西域に於いてえたるものといふ。曇無竭は支那幽州の人なれども、其遊歴地は高昌、龜茲、沙勒の西域地方の外、葱嶺を越え西山を經て、闍賓より辛頭河に至り、轉して月支に入れり。寶雲亦涼州の人なれども西域并に天竺に入る。求那跋摩闍賓人にして師子國即ち錫崙に入り閻婆を經て支那廣州に到る、以上『出三藏記』『梁僧傳』并に南條博士『三藏目錄』等に由りて其生國遊歴地を見たり。而して以上に擧げたるは悉く二世紀中葉より四世紀に至る間に於いて、

阿彌陀佛に關係ある經典を譯したる高僧なりとす。而して此等の高僧中には中印度の人あり、又中印度に到りし人あり、更に錫崙に至りし人ありと雖ども多くは西域若くは西北印度地方に於いて經本を得來りしもの多し。特に大乘經典に於いて然りとす。

抑も支那佛教の初期に於いて大乘經と關係深きは于闐にして、朱子行か彼地に至りて『般若經』を得たるは著明なる事實なり。(山三藏記論疑(俗) (一) 卷一、三十一、オ) 而して此時朱子行は其弟子をして幾多の大乘經を支那に齎しめたりといふ。就中『法華』の正本をも此國に於いて傳へたりといふ。(合放光光嚴圖略解序 (道安) 卷一、三十六、オ) 又『光讚般若』も其原本は于闐沙門、祇多羅の齎す所といふ。(梁傳(致二) (一) 卷一、オ) 又『華嚴經』は法支嶺がその前分三萬六千偈于闐に於いて之を求め、覺賢の來るに會し之を譯せしものと傳ふ。(梁傳(致二) (一) 卷一、オ) 又『涅槃經』も曇無讖が最初北涼に傳來せしは、前分十二卷のみにして、殘部は于闐にて探し求めたりといふ。(致二) (一) 卷一、ウ) 加之支那より于闐に大乘經典を求めたること一再ならず。蓋し于闐は西域に通ずる南道樞要の地位にあり。羅什の傳に由るに、沙勒に於いて小乘並に闍陀を究め、莎車王子に從て大乘に歸すといひ、(致二) (一) 卷一、ウ) 稍後代なれども隋代の闍那崛多傳には、『崛多會傳』于闐東南、二千餘里有遮拘迦國、彼王純信、敬重大乘、宮中自有摩訶般若、大集華嚴三部、三躬受持、親執鎖鑰、轉讀則開香華供養、… 此國東南、可二十里、… 置大集華嚴方等寶積楞伽方廣舍利佛花聚二陀羅尼都薩羅藏摩訶般若八部般若大雲經等凡十二部減十萬偈云云(致二) (九) 卷一、ウ) 而して沙車は西域南北二道の合點にして于闐の近傍にあり。遮拘迦は今の何地なるや不明なるも何れにしても、此邊一帯の地に大乘經の多かりしは事實にして、阿育特に迦賦色迦の傳道により佛教が諸方に蔓延せし影響に出て、迦賦色迦以後佛教中心地は印度西北部並に西域地方に移り、迦賦色迦時代に既に支那との交通ありしもの如く、(藤井氏『佛教小史』百十五、西域(記并にハンタ)氏を引けり) 迦賦色迦の佛教は主として大乘佛教にして其餘勢は佛教中心地の移動を生じ、明帝の時、月氏より來りし、摩騰、法蘭、二人は實に中印度の僧侶なりしに見れば、佛教の中心地は早く既に西北に移りしなり。是より後那蘭陀寺隆盛の時代に印度西北方の王なる Laluvassa は大乘教徒にして『寶積經』楞伽阿跋陀羅等、十萬部を筆寫せしめて、之を那蘭陀寺に寄賜せしといふ。(佛敎小史(三四一)佛典(出版會雜誌)を引けり) 然るに闍賓は同じく北部なれども彼地より來りし三藏中曇摩密多、覺賢等數人を除くの外は殆んど例外なく小乘の三藏を譯出し、(支那佛敎史(十六—二十等)曇摩密多傳によれば彼れは涅槃經の原本を所持せしも、闍賓人は小乘にして大乘を好まざるにより龜茲姑藏に至るといふ。(致二) (一) 卷一、ウ) 迦賦色迦王を中心として西北が所謂大乘の成立地なるが如し。固より世親時代に尙古風を墨守せし有部の北部にあるなり。大小二乘は到る所に交錯して、互に流を分つて飲むの風ありしが故に、決して一地點に偏執する能はざるは勿論なるも、而も多數の重要なる經典と及多數の譯經とに見るに、西北印度は大乘發源地なること明かにして、且つ馬鳴龍樹世親は皆北印度に關係あり。特に馬鳴の起信論の如きは北方にての成作と見る方可能なるが如し。一般佛敎史上の事實が此の如きのみならず、上に既に辨せしが如く阿彌陀佛に關説せる經典の譯者中特に初期の譯者は皆西北印度若くは西域地方の人なりしに併せ考ふれば、蓋し阿彌陀佛の成立地は西北印度なるが如し。古來西來の三藏といふは常套語

にして西域より輸入せし經典の多きは地理上より見て西北印度の佛教を輸入せるものと見ざるべからず。更に阿彌陀佛に關係ある經典の譯者四十九人に就きて統計表を作るに。

中印度	十三人	中七人唐以後
南印度	三人	中二人唐以後
西印度	一人	唐以後
北印度	十二人	中四人唐以後
但闍致	四人	中一人唐以後
西域	二十人	中四人唐以後
罽越、龜茲、高昌、于闐、兜佉勒、月支、康居を含む		

以上は阿彌陀佛に關説せる經典譯者の統計にして、右の表によれば、中印度と西域人とか最も多く阿彌陀佛の思想を傳へたるものとす。

抑も『梁僧傳』、『續高僧傳』、『宋僧傳』中最も有名なる譯經家六十餘人に就きて其生國を見るに北印度二十餘人、中印度十五人西域十四五人、南印度西印度は僅かに二三を出てす。然らば則ち西印度に其數少なきは一般に佛教傳來者が少數なるに出て、特に此阿彌陀佛の思想を傳へたる譯者が少きにあらず。然れども是によりて大乘教の起源地は西北印度に最も親縁あり。從て阿彌陀佛成立地點も恐らく此地方ならんを考定すべき理由あるが如し。固より西來南來の三藏なるものは或は陸路より或は海路より幾多の邦國を巡歴して、梵

經を蒐集し來りしものなるか故に、其譯本の總てを必しも悉く其生國より齎らせるものとは見るをえず。されど其生國と遊歴地とは大に關係あるは言ふを待たず。而して西北印度は實に其發源地なるが如し。如何にしてポータラ、錫崙、或は南印が其成立地なりとは考ふる能はず。但し前表に示すが如く中印度よりの譯者も少なからず數に於て北印度に匹敵せり。前田博士は世親か兜率上生を願へりとの傳説につきて下の如く曰へり。此の『無量壽經優婆提舍』に就ては其法義が賴耶緣起論とは全く關係なきものに似たるを以て之を或は別人の所造ならんと疑へるものあれども、蓋し淨土往生はもと大衆部即ち中天竺佛教の思想にして、兜率往生は上座部即ち北天竺佛教の思想なり。ゆゑに中天竺佛教者は概して皆淨土往生の思想を有し淨土教を唱ふるものゝ如し。世親菩薩は上にも云へる如く北天竺佛教を唱ふると共に又中天竺佛教をも宣揚したる人なれば此人にして馬鳴龍樹の先蹤を追ふて無量壽經優婆提舍の著述あるは固より怪しむに足らざるなり。思ふに無量壽經優婆提舍は十地經論と其軌轍を同ふものにして淵源は華嚴經にあり、今委く論ずるの邊なし、然るに西域記(致鉄第七 二十五丁)に世親菩薩か兜率天に生じ之を無著菩薩に報するの記事を載す、是に依て見れば世親菩薩には淨土往生の思想なきものゝ如くなれども蓋し右記事は北天竺佛教徒の所傳なるべきか。(大史、二二五 二六)と。

按ずるに小乗分派の際上座は北印度に去り、大衆部は中印度に残り、『法顯并智猛傳』によれば兩人共に『摩訶祇律』并に『涅槃經』を中印にえたり。馬鳴龍樹を始め印度に於ける諸論師の阿彌陀佛に關する所傳は前

阿彌陀佛并に無量壽經の成立地及其年代に就て

きに云へるが如く必しも北印思想と断定しえざるものあり、更に『法顯傳』、『西域記』并に『南海寄歸傳』により、各國大小二乗の地理的分布を見るに彼此交雜して確定し難きものあり。例せば『西域記』にては中印度佛教中大小二乗の寺院并に僧侶數合計寺院二百五十餘、僧侶二萬一千餘中に、大乘數百五十九寺餘、二萬一千餘人餘。小乗教八十四寺餘、三千五百五十人餘。小乗有部十六寺餘、三千五百人餘。小乗正量部五百八十三寺餘、一萬五千三十人餘にして中印は大小均等就中小乗盛んなり、之に反して北印度は大乘教が特に優勢を占め居るものの如きも未だ劇かに決し難く、義淨によれば北天竺は有部といひ（『南海寄歸傳』第一） 溯つて法顯傳を見るに亦多少の相違あり。各地殆んど大小二乗を混ぜり。是は固より四世紀以後の事なるも、是より先き紀前第三世紀北天至那僕底國に於いて『發智論』を作れるあり、（『大史』） 第二世紀北印舍竭羅に那先ありて『那先比丘經』を残し、北印健陀羅に生れし脇尊者は迦濕彌羅に『婆娑』編纂をなせり。又前に云へるが如く支那佛教の初代に尙ほ西北印度并に西域地方亦た大小を混ぜり。是によりて抑も大小二乗興起の地點すら之を定むること容易ならず。況んや阿彌陀佛の成立に就きて確然一地點を定むる如きは殆んど不可能の事なりと雖も、比較的事實に近きは西北印度に親縁あるものの如し。松本博士（『佛土』） 望月氏（『宗教界』） の所論も西北印度に成りしものたるは争ふべからざる事實なりといへり。若し安全なる結論を得んとせば中天竺を含めて其西北の地に於いて成立せしものか。顧みて以上の所論は無量壽經の經典成立の材料とすべく、彌陀思想の成立地としては寧ろ後期の材料なれども、しかも、現在にては以上の所論を措いて又他に其地點を定むべき材料あるを知らず。

（其の二）

次に成立年代に關しても極めて曖昧にして松本博士は印度に於ける佛教の他力念佛并に淨土の説は紀元前三世紀の末葉より全二世紀の中葉に至り既に成り、早くも紀元前第四世紀を以て其の極限なりといへり。（『極樂淨土論』172.） 望月氏も亦彌陀思想成立の年代は佛滅第二三世紀の頃にあるべきを論決せり（『宗教界』。一133. 34. 40. 等） 方に於て此の如く其推定年代の早きに關らず。又他の一方に於ては或はバタンチャリは西方教義を知らず。此の故に紀元第一世紀後なりといひ、（ワッデ） 或は第二三世紀以後といふ。松本博士の所論は印度に於ける他力宗教の由來や古く阿彌陀經の前身大善見王經は佛陀の時代に既に此説話の成立しありしに徴し、又紀元二三世紀頃の印度に於けるロマンチックの傾向盛んなりしより、阿彌陀佛の思想も紀元前三世紀の頃既に成立しありしを推定せるものにて、又望月氏は主として佛教内部の思想發達に基き正確には定むべからざるも、概して是を言はゞ其の成立は恐くは佛滅二三世紀の頃ならんといへり。然るに『無量壽經』が安世高によりて譯せられたりといふは疑はしく、且つ現存せず。又的確なる史實を述べば『平等覺經』の婁迦識譯は恐くは帛延の譯せしものなるべく、阿彌陀佛正明經典の譯經史上に表はれたるは、二世紀の終りより三世紀の中葉にあり。但し阿彌陀佛の名及び其信仰が始めて支那に入りしは、『般舟三昧經』（『婁迦識譯』） 及び其れと同本異

譯なる後漢代の失譯『拔波菩薩經』、此の他『後出阿彌陀佛偈』及び『佛說作佛形像經』にして就中『般舟三昧經』の『拔波菩薩經』を合せて共に同一思想を表はし、阿彌陀佛は禪定佛とし、又淨土佛とし、加之觀佛往生の旨を記せり。(玄九²⁹、³²)『後出阿彌陀佛偈』は無量壽經の大意を偈頌にせしものなるが如く、『作佛形像經』には往生阿彌陀佛國の一句あり。婁迦識の支那渡來の年代には異説あるも桓帝建和元年(145)か或は永康元年(167)より孫權自立して三國鼎立の基をなしたる黃初元年(220)に至る紀元第二世紀の後半に於て、『大經』の思想は『後出阿彌陀佛偈』が其の大意を傳へ、『般舟三昧經』の類が『觀經』の思想所謂觀佛往生の旨を記す。是により無量壽經の成立年代を推究するを得べく、從つて阿彌陀佛の思想は此の以前にあるは勿論なり。

抑も支那に於ける譯經と、印度に於ての原作の年代とを比するに第一二世紀頃の馬鳴、龍樹の著書の最も多く譯せられたるは羅什と眞諦にして、即五世紀の始より六世紀の中葉にあり。第三四世紀の無着、世親の著書は其多くは魏より唐に至る即ち六世紀の中葉より七世紀に渡れり。勿論律の初譯は紀後二百五十年曇柯迦羅によりて成れるに拘らず。其の成立極めて早く、羅什に世親著作の譯あり(『發菩提心論』提婆。『造天親經百論』)。又訶梨跋摩の著書の譯あり。而して之と反對に、玄奘の譯本中に迦陀衍尼子、世友の譯ありて、前後交錯は免れざるも、概して言はゞ馬鳴、龍樹の著書の漢譯年代と、世親、無着、の著書の支那傳來との年數とによれば、原本の支那に傳はるまでには少くとも二三百年間を要せしことを知るをうべし。會て二三の經錄其他により小乗部

二十九師大乘部廿三師の在世年代と其著作の譯時とを表示せしものありしが今之を略す。

蓋し支那譯經の盛觀を呈せしは始めにありては羅什、覺賢を中心として、二晋、三秦、二涼の時代にあり。此時や羅什流の般若空觀の佛教旺盛を極め、後に至りては譯經事業は唐の貞觀に至るまで綿々として其盛況を持続せしが、就中眞諦、玄奘は唯識、法相の佛教を鼓吹せり。印度に於ける中觀と瑜伽とは斯くして前後して支那に入れり。是れ固より支那佛教の大勢の然らしむる所なりと雖も、又以て印度佛教の支那傳來の年代を示すものあり。惟ふに後漢代に諸經が阿彌陀佛に關する信仰成立後の思想を傳ふるものあるは此種の思想は二世紀後半に支那に傳はりし所以を以て其の思想の來由を是より二三百年の以前に溯るをうべし。特に支那佛教の初期の歴史に於て然り。暫く彼の支謙譯につきて見るに其音譯はサンスクリットにあらざるのみならず、普通のブラークリットの範圍を超脱せり。其の聲聞段及他方佛國の音譯の如き殆んど梵語に復歸する能はざるもの鮮からず。會つて梵漢諸本との對照表を作りしが今案を厭ひて之を畧す。

彼の觀音勢至の原名盧樓夷、摩訶鉢那となせるは明かに盧鶴樓宜(『哲學辭典』)以上(『哲學辭典』)の訛音なり。摩訶鉢那亦然り。斯る轉訛を生ずるまでには幾多無名の手蹟によりて口傳せられ筆寫せられ、次いで傳譯せらるゝに至れるものなるを察すべく『法顯傳』に北印並に錫崙の邊皆口傳にして本の寫すべきなしといへるか如き、(致六^{71, 81})以つて轉訛の道を知るに難しとなさず。彼の後漢失譯『阿彌陀佛偈』の如きは其畧體ならざるか。經意は大經の大意を偈頌にせしもの如し。抑も現存梵本は偈頌と散文とより成り、散文の部は普通のサンスク

リットなるに拘らず。偈頌は伽陀方言にして或時はサンクリットを用ゐ又或時はバリーを用ゐ又兼ねて俗語をも混用せり。(泉芳毅氏梵本大經偈頌の研究(無盡燈十一)の八九九、十二)梵本馬翁の序(註の參照) 是等は果して何年代のものなるや。思ふにバリー、サンスクリット兩語の間に介在するものならんも東洋學者言語學者の間に未だ定説を得ず。馬翁は大經の偈頌に就いて其文法用語韻律等の常規を逸せるもの多きを注意し、其作者はサンスクリットを解せしものか否かは不明。且つ今後幾多の原本を調査するに非ざれば決定し難く、恐らく印度の各地に行はれたるものにして少くとも梵文學復興期(紀後四世紀)以前たるは確實なりといへり。

バリー及びサンスクリット經典中偈頌の一致不一致、長行と頌文とは兩語聖典同一關係に見做すべきや否や、偈頌は果して印度境域以外の梵語を知らざるもの手に成りしや否や。若くは教徒の熱烈なる信仰が斯る伽陀の形式に於て襲用せらるゝに至りしが、尙幾多の研究に待たざるべからず。但し大經偈頌は頗る並代に存せしものと推定し得べきが如し。少くとも現存原譯諸本以上に偈頌の形式に於いて或は長行との混合に於いて根本聖典の存せしもの如し。何となれば現存五漢譯を見るに其の内容は大畧一致せるに拘らず、正確に全く符合せるものもなし。従つて「漢」「吳」と「魏」「唐」とを各一雙となし「宋」と合せて原本三種との推定(梵本序)の如き固より一往の類推に過ぎず。劍橋、巴里、牛津等に存せる現存梵本亦多少の相違あり。此故に梵本序(二)にも同一尼波羅より出てし經典にして而かも同一の訛畧を作ふ。此訛畧は獨り原本に存するのみならず。支那譯の或者はそれを豫想せる如き形迹ありといひ、南條博士は『梵本』第二十五章の譯文に就きて同

章中五頌の梵文は其意義明了ならず。支那五譯并に英譯に等しく之を省き西藏譯に七頌あれども俱に明了ならずといへり。(對照註)

抑も印度に於ける文献の徴すべきは先づ育王の刻文を以て最古に推さざるべからず。然るに此時代の言語に關し諸學者の意見一準ならざるものあり。カンニングハム氏は地理的に西、中、東、Punjabi, Djimini, Mīrāndinの三方語となし、口音の有無若くは變化により西方言は最もサンスクリットに近しとなせり。ウィルソン氏は岩面刻文に四種の變態あるを指摘し、用語の大部より見れば比較的現時の巴黎語に近きも地方語を混する多く要するに用語不定の状態にありといふ。ラッセン、ミア、ピルヌフの諸氏は現時の巴黎語は最も當代の用語に類せるも同時に種々の方言ありしを認めたり。蓋し吠陀並に叙事詩時代を経て紀前二千年頃より口語と文章語とに分れ、經典はサンスクリットによりて作成せられたるに一方にては簡單に使用し易き口語 Magadhi となり、次いで富羅那時代に入りては全く方言化し、紀後千年頃迄に Hindi を生ずる間に邊域の地幾多の方言を生ぜり。(ダット氏 History of Languages and Literatures in India 並に) 恐らく支謙譯の如きも其原本は此等方言の一に成りしにあらざるか。以上の事情を鑑考するに現存の原譯諸本以上に更に原本のありしを證すべく、仍つて思ふに『無量壽經』の成立年代が既に紀元前後なるべきや否や或は其の以前ならざるなきやを疑はしむるものあり。經典の成立かくの如くなれば阿彌陀佛の成立は必ず其の以前ならざるべからず。暫く小經の成立に就きて馬翁は曰く日本法隆寺に保存せられたる諸原本(『小經』『金剛經』等)は往代の成立に屬すると疑なく、現時知られたる諸

原本中には恐らく最古の位置を與ふべきは争ふべからずと。(原本) 又曰く大小兩經中譯年は小經後なるも成立は早かりしならん。按するに紀後二百年以前に印度を出てしものならんと。(Selected Essays) 小經と共に日本に其原本を保存したりし金剛經がシュタイン氏によりて西域に發見せられ同氏はそは第一二世紀前に書かれたるものならんと云へり。(千田) 今此等の材料を併せ考ふるに阿彌陀佛の成立は其以前ならざるべからず。現存原本と殆んど一致せる羅什譯『小經』六方段を見るに其の西方下に無量壽佛、大光佛、大明佛を擧げたり。古來之を阿彌陀佛と同號の他佛と見たり。又『大經』他方佛を擧ぐる中にも無量光佛あり。或は是れ西方佛は阿彌陀佛無量壽佛無量光佛の思想が既に固定せるものありて後に經典作成の際再び混入せるものにあらずるか。即ち是等諸佛は等しく阿彌陀佛ならざるか。果して然らば阿彌陀佛の成立は頗る蚤代に屬するものとせざるべからず。

翻つて印度の著書に見るに『陀羅尼集經』に『阿彌陀經』の名あり、『無量壽經修觀行供養儀軌』(四五)は固より後代の出なるも、世親の『往生論』は『無量壽經』觀經の旨意に基き、又『寶髻經四法優婆提舍』(元魏譯)には釋迦佛世界若し淨とせば『阿彌陀莊嚴經』に違すと云へるは其前後の文によりて察するに小經の末文に依りしもの如し。『觀自在如意心陀羅尼咒經』(成十)に『極樂莊嚴如經廣說』の語あり。但し是等は譯經史以上の古年代を推定せしむるものにあらずるも、是に由りて當時既に大觀小三經の俱存を想定するをうべし。今少しく其の以前に於ける古材を探求すべし。馬鳴の『起信論』中に專念彌陀の思想を傳へて如修多羅說とす

へるは或は無量壽經一類の經典ならざりしかを疑はしむるものあり。(大史) 何となれば專念西方乃至即得往生の彼の文は『大經』觀經『小經』中に此と同意の經文あり。加之彼の論文中の常見佛故(四十二)終無有退(四十五)常勤修習(三十六)住正定(十一)等皆大經本願文に相當するを見る。髣髴として『大經』の内容と相關聯するものあるを認めざるをえず。若し馬鳴の年代は不正確なりといはゞ、龍樹の『十住毘婆娑論』并に『大論』の文を見るに其彌陀思想は既に圓熟の度を示せり。印度に於ける阿彌陀佛彌陀に關する始原的材料中年代の正確なるものは之を措いて又他に求むべからず。依つて下に少しく其内容をすべし。

抑も龍樹の著述中、阿彌陀佛に關係あるものは、先きに已に云へるが如く『大論』と『十住毘婆娑論』と『十二禮』と『勸誡王頌』となり。此中『勸誡王頌』は其末文に於て阿彌陀佛あり。(藏八) 古來闍那崛多の譯と傳ふ。而して十二禮は曇鸞の『讚阿彌陀偈』善導の『往生禮讚』と殆んど同じ。唯曇鸞、善導の禮讚は之を布演せしものに過ぎず。若し此の『十二禮』は疑ありとして之を除くも、彼『十住毘婆娑論』易行品の阿彌陀佛の偈讚(塔八)を見るに曇鸞、善導の禮讚文と其内容多く異なるを見ず。稱名往生の思想あり。信心獲得の文意あり。阿彌陀本願の豫想を含める記事あり。又更らに往相還相の廻向を表はせるあり。其他、佛の身相其性德乃至極樂の莊嚴を具さに叙述せるもの多くは『無量壽經』と關係あるが如し。且つや「本求佛道時、行諸奇妙事、如諸經所說」といふに徴すれば阿彌陀の本生を説ける經典の少からざりしを察するに難からず。勿論此易行品

は元と懦弱怯劣の機に對し、易行道を説き、疾く阿惟越致に至らん爲めに信方便を示し、三世十方の諸佛諸菩薩信念の法を説くに在り。故に彌陀一佛に對する信仰にあらざるも、彌陀に對する文言の長きは他佛の及ぶ所にあらず。又現在一百七佛の劈頭に彌陀を列する如き(十住毘婆娑論地相品には、菩薩在初地中心多歡喜念諸佛者念然燈等過去佛。阿彌陀等現在佛。彌勒等將來諸佛といふ。)何れにしても阿彌陀佛の思想成立後間もなく表はれたる思想とは見るを得ず。更に大論の文に徴すれば一層明かなるものあり。諸佛土中阿彌陀國人壽無量阿僧祇劫(往一)の文あり。學般若身清淨の故に身光ありとして例を阿彌陀佛刹に取れるあり。(往二)大經阿難見佛段を擧げせしむるあり。(往三)法藏撰擇段に當る文あり。(往四)但し世親の『往生論』には二乘種不生といへるを『大論』は三乘ありといへるも彼の大經に聲聞無量の願あり、又其願成就あり。漢吳二譯には常に聲聞緣覺の語あり。(願)果して然らば又甚た遺隔の思想と稱するをえず。且つ『同論』九卷に阿彌陀佛國菩薩多くして聲聞少しといふ。特に『大論』が『無量壽經』によりて引文をなしたりと見るべきは、

有佛國土一切樹木、常山諸法寶相普降、所謂無生無滅無起無作等、衆生但聞是妙音、不聞異聲衆生利根故、便得諸法寶相、如是等佛土莊嚴名爲淨佛土、如阿彌陀等諸經中說、(往五 50c)

と云ふ。又

誦阿彌陀佛經、及摩訶般若波羅密、是人欲死時、語諸弟子言、阿彌陀佛與彼大衆俱來、(誦阿彌陀佛經、故見佛自來、往一 50c)

といふ。寶樹池水法音を宣暢し、臨終來迎ありといふは『大經』、『觀經』、『小經』皆此の意あり。且つ明かに

阿彌陀佛經といふ。少くとも大小兩經の何れかを指すものなるべし。永明延壽『大論』を讀んで淨土教に歸入せるも亦宜なる哉。固より龍樹の『大論』は『般若經』を註解するにあり。故に有相的なる『無量壽經』の説意は時に龍樹の説明に不便のものなきにあらず。此故に阿彌陀佛も釋迦文佛國の如く時に淨、不淨ありといひ、(往二 50b)又阿彌陀佛國率積世界(法藏を法積といふに徴すれば華嚴は『華嚴經』の華嚴世界なるが如し。『大論』所引の經文中華嚴經なし、暫く記して疑を存す。但し『華嚴經』天八ヶ所の説意に類す。)に如かずといひ(往一 50a)又、世自在王佛の時法積比丘淨妙國土を見たれども、無所着心を以ての故に之を撰捨すといふ(往三 50a)。然れども是等の文は偶々以て無量壽經の經説に般若的解釋を試みたるものと見らるべく、先きの『十住毘婆娑』と『大論』との文が如何に現存『無量壽經』中の要點を捕捉したるかを見、更に『阿彌陀佛經』(本經には單に阿彌陀經といふ)の語あるに徴し、龍樹は二世紀後半とするも三世紀前半とするも、『無量壽經』の成立は頗る蚤代に屬するもの、如し。勿論龍樹所見の阿彌陀經が現存諸本と同一なりしとは斷ずるを得ざるも、殆んど類似の思想を示せるは秋毫疑を容れず。加之龍樹の著書によりて當代の大乘經典を見るに其數少からず(無量壽經を擧げたり。外に姉崎博士『佛教聖典史論』、『大史』を参照)。此中現存藏經中、阿彌陀佛傍明經典と其名を一にし、恐らく現在經典と大差なかりしならんと思はるゝ經典の名を擧示すれば、(經名下の数字は大論の卷數を表はす)

(一) 法華經、(七、九、廿六、卅三、卅八、四十六、五十) 大論、
 (二) 毘摩羅詰經、(九、十五、十七、二十八、三十八、八十五) 娑論、
 (三) 般舟三昧經、(九) 大論、十住毘婆娑論、

阿彌陀佛並に無量壽經の成立地及其年代に就て

- (四) 大雲經、(三十三、百) 大論、
- (五) 智印經、(九十) 大論、如來智印經(六)、十住毘婆娑論、
- (六) 大悲經、(百) 大論、
- (七) 大般涅槃經、(十一) 十住毘婆娑論、
- (八) 小品經、(五) 十住毘婆娑論、
- (九) 賢劫經、(四十九) 大論、

以上は必ず阿彌陀佛に關說せし經典なりと推定すべき事情は、『法華經』は西晋法護に始まり、羅什以下數譯あり。『毗摩羅詰經』は吳支謙譯に始まり羅什玄奘の異出あり。『般舟三昧經』は後漢の婁迦讖譯に始まり。後漢代に既に三譯あり。『大雲經』は北凉曇無讖に由りて譯せられ。『智印經』、『如來智印經』は吳支謙に始まり數譯あり。『大悲經』は『大般涅槃經』一類のものなるべく、齋那連提耶舍に此經名あり。『涅槃經』は『小乘涅槃經』か『大乘涅槃經』か判然せざるも他經に例するに『大乘涅槃經』と見るをうべし。然らば竺法護譯以下數種あり。尙此他にも『大論』には大中小の三般若を擧げたり(註五)。現存『般若經』に例するに文數は少かりしならんも何れか阿彌陀佛に關說せるものなるべく、小品經は大品般若なりとすれば大般若の一部たり。『賢劫經』は法護譯に始まる。以上の中、大部は婁迦讖、支謙、法護譯中に表はる。而して最後の法護は二百八十年の寂なるが故に龍樹に少し後れたるのみ。若し四五世紀の曇無讖、羅什譯を取れば、龍樹所引の經典は殆んど同時に支那

譯に表はれたるものと謂ふをうべく、從つて阿彌陀佛に關說せる經典の少からざりしを見るべく、尙右佐々木氏の表によりて大乘經典と覺しきもの二十餘經をとりて、之を支那譯同名經典の譯者と對比せしに、殆んど後漢より西晋に至る間に譯せられたる經名に一致す。今案を厭ひて畧す。又『大阿羅漢難提密多羅所說法住記』(文には佛涅槃後八百年執師子勝王都有阿彌陀名難提密多羅といふも、此八百年は佛滅を何年としての起算なるか不明なり、此書は恐らく紀元後二三世紀のものならん) によるに、大乘經百俱胝部ありといふ中五十に近き經典名を列せり(註八)。此中『無量光衆經』、『極樂衆經』は阿彌陀佛に關係あるが如く、『法華』、『般若』、『維摩』等の經を除きて龍樹所引の經名以外に『華嚴經』、『海龍王經』、『金光明經』の名あり。此等の中に阿彌陀佛を説けりと斷ずるを得ずといへども覺賢譯『華嚴經』、『曇無讖譯』『金光明經』、法護(西晋)譯の『海龍王經』等に阿彌陀佛を記載せるに徴すれば、彼此所傳の年代殆んど一致せり。是によりて此時代に已に既に阿彌陀佛は圓熟せる發達を遂げたるものなるを知るべし。

更に本論第二篇極樂淨土の項下に列ねし『般若經』、『涅槃經』を始め、實に多數の經典中には常に阿彌陀佛並に極樂は諸經に於ける標準の佛土たり。文殊樂師等餘佛淨土は常に阿彌陀佛土を其の引例に使用せり。又諸經は其經讚嘆のために見阿彌陀佛生極樂を以てせるもの頗る多し。抑も附録に列記せる二百四十餘部の經典中に阿彌陀佛を記載せり。是等悉く紀元後の出なりや。要するに結論は正反兩立なりといへども、吾人は悉く之を紀元後となすの寧ろ史實に違かるべきを信するものなり。但し此に注意すべきは同一經典の異譯によりて阿彌陀佛に關說するものと否らざるものと是なり。吾人は古來の注疏家の如く單に譯者の

阿彌陀佛並に無量壽經の成立地及其年代に就て

意嚮に歸し、若しくは經論相違和會すべからずとの定規によりて諸異譯原本を唯一と見做すべきにあらず。彼の『法華經』普門品は法護、羅什、闍那崛多達磨笈多共譯の三譯あれども其中に會て阿彌陀佛の記載なきに現存梵本には阿彌陀佛世自在王佛法藏比丘等の名あり。ケルン氏によれば該品は法華經最後六品中の一にして長行と偈頌と大略一致の法華經の常例に背き、明かに後世の添加に成りしものなりといふ。但し法護譯は古譯にして普門品の全體を後の添加とすべきや否やは暫く措き、此阿彌陀佛の記載は果して後世の附加なるか、若くは會て支那諸譯の原本と異なる別本とすべきや。此の如き例尙二三あり。元魏菩提流支並に實叉難陀譯の『楞伽經』には有名なる龍樹が阿彌陀佛信仰の豫言ありて、求那跋陀羅になく(以上三) 又後漢東晉兩譯の『作佛形像經』には優填王の往生を記せるに其原本たる提雲般若譯(以上三) に之を欠き、那連提耶舍譯、(以上五) 『月燈三昧經』阿彌陀佛の文は先公の畧譯(支) に之を闕き、支謙と宋失譯の老女人經の文、求那跋陀羅譯(以上五) に之を闕くが如き是なり。然るに此等は皆前譯に阿彌陀佛の記載ありて、後譯に之を闕けるもの多し、此に由りて之を觀るに阿彌陀佛信仰が經典上の標準佛土となりしも必ずしも後代の挿入と見做すべからず。然るに以上の所論は多くは阿彌陀佛を説ける經典の成立年代を追跡せしのみ。凡そ一佛信仰の歸着を見、是れが聖典の製作迄には幾何かの年代を經過せざるべからず。然るに上來所引の經典成立の年代は滔として知る所なし。或は阿育時代に既に大乘經典が成れりといふ北方所傳或は迦膩色迦時代に多くの大乘經典ありしとの傳説も俱に確定の説にあらず。マローラナータの『佛教史』及び『西域記』(松本博士佛典叢書118) 以下の『聖典史論』(卷14) 等の傳に

よるに、迦王時代に大乘經典のありしは事實なるもその以前は不明なり。そも印度遺述は年代頗る不明なり。マハーバーラタ然り。梵歌然り。人によりて四五百年の相違を見るが如きは敢て珍とせざるなり。阿育王代に存せる佛經の名目としては、バイラート刻文中の七經(リッリー「佛傳」208頁) 及び『善見律毘婆娑』(卷2) の十經あるも共に其内容を知るを得ず。且つ現存の大乘經名を想起せしむる名稱なし。大衆部等の大乘的思想は當時既に盛んに唱道せられたるならんも、阿育王代の目健連及び帝須の第三結集中大乘經を結集せし積極的徵證なし。彼の『華嚴經』が大小無數の經卷を數へ、其他『濟諸方等經』(卷九) 等に空想的に多數の經卷ありしを傳ふる如きは固より以て史實となすに足らざるも、惟ふに現存諸大乘經は育王以後漸次整頓せられ、第一世紀前後に其の續出を見るに至りしものならん。之を紀元後二三世紀とするは支那譯經年代より推して頗る遲きに失するものあり。支那初期の譯經か阿彌陀佛を傳ふるもの頗る多く、馬鳴に發し龍樹に圓熟せる思想を表はす上述の如く、而して大乘經典は紀元前後には少からざる部數を生したるものなるべく、是によりて阿彌陀佛は恐らく紀元前の成立と推定しうべし。

無量壽經並に阿彌陀佛の成立年代を確定するか如きは殆んど不可能の事たり。但し阿彌陀佛は現在他方佛中阿闍佛と共に最古の一佛たるは確實なるか如し。下に三十餘經に於ける阿彌陀佛と一類とせらるる諸佛中阿闍は他佛に先んじて阿彌陀と併説せらるるが如き見るべし。(附錄「阿彌陀佛と一類」とせらるる諸佛」參照) 若し前きの起原考中阿闍阿彌陀の二佛は過去佛近似の思想より脱化せしものとの説を正しとすれば一層其間の關係を明瞭にせるもの

と謂ふべし。但し阿闍佛と阿彌陀佛との成立前後の如きは固より判定し難し。『阿闍佛國經』(地八^{三〇})は支識譯と傳へ、且つ其形式内容に於いて對告衆中唯た聲聞を述べ、願文等も未だ成形を遂げず。(全上) 姪身女人安穩產(全上)といひ、其の當來成佛の國土(全上)は之を『無量壽經』に比するに多く摸索的にして一見阿闍佛は先きなるが如きも、阿彌陀佛亦『鼓音聲經』(地十二)によるに『阿闍佛國經』と相距る遠らず。同一『無量壽經』に就きても、「漢」吳譯は比較的朴素なり。抑も諸佛中經典并に傳傳其他法顯等の紀行等によりて其信仰を見、由つて以て成立前後を檢するに過未佛は且らく措き、文殊と觀音と藥師とは阿闍阿彌陀と共に頗る前後判定に苦むものあり。文殊には『佛土嚴淨經』あり。(西晉法護譯) 觀音には『授記經』『普門品』あり。『藥師經』は帛戶利密多羅、達摩笈多、玄奘、義淨の四譯あり。是等一々の經典に就いて其思想の單複を見るに、其間多少の相違なきに非るも、經々思想交雜し、同中異あり、異中同あり、是によりて一概に前後を定むべからざるも(下「阿彌陀佛は本願佛」の項下參照) 阿彌陀佛并に極樂の思想は單複并び存し、諸佛中特に蚤代に成立せるものたるは殆んど疑ふべからざるが如し。要之、龍樹時代に阿彌陀佛は一佛歸依を表せし經典の存せしのみならず。阿彌陀佛に關說せし經典少からざりしに見て阿彌陀佛并に極樂の教義が此の圓熟せる體系を具へ、且つ諸佛中特に注目せらるるに至るまでには少くとも一二世紀の年代を要し、阿彌陀佛思想の成立年代を紀元前二三世紀に於ける印度文學一般の傾向たる叙事詩英雄崇拜の時代に於いて先づ佛傳が如何に變化せし前に置くを以て穩當の説と見ざるべからず。内部思想の發達として大衆部の佛身論か阿彌陀佛に轉じらうべく紀元前二三世紀に於ける印度文學一般の傾向たる叙事詩英雄崇拜の時代に於いて先づ佛傳が如何に變化せし

かを見、更らに阿彌陀佛の信仰が意外に多經典に散見せるを併せ考ふるに阿彌陀佛を以て紀元後の成立となすは遲きに失するが如し。更らに紀元前に於ける正確の年代の如きは唯た推定に過ぎざれば茲には唯た漠然た考定を以て満足せざるをえず。

元來阿彌陀佛並に其の經典に關する此種の研究は同時に他の大乘經典に關係あれば其の成立地及年代鑒定の責任豈輕しとせんや。されば眞摯なる推論は吾人の當さに翼々として従ふべき所にして急驟なる臆測は斷して避くべき所なりとす。如何せん本問題に關して吾人の拾得し得たる材料の少乏なる若し的確なる史實のみに據らんか吾人は殆ど捕捉し難き問題たるを自白せざるを得ざるなり。吾人豈靦然として阿彌陀佛並に無量壽經成立年所考定の事を明にすと云はんや。吾人は唯たその端緒を開くに過ぎざるなり。而して以上に述ぶる所多くは形式的の一面に過ぎず。若し夫れ阿彌陀佛信仰の内容を辿り佛教思想が印度當代の文物と如何に關係し、又如何に變化發達を遂けたりしか。縱令阿彌陀佛の起原は不明、且つ其成立地點及ひ年代共に曖昧を免れざるも、佛教思想史の連鎖に於いて果して如何なる位置を保てるか。凡そ是等は思想の内容的研究に屬す。請ふ篇を改めて之を述べん。

本論

第一篇 佛陀

第一章 歴史上の佛陀

(壹) 人間としての釋尊

鴻大なる哲學思想の發達と、深奥なる宗教信念の要求とは、佛身を以て眞如なる宇宙の實在と一致せしめ、或は谿聲を以て其の廣長舌となし或は山色を以て其の清淨身となし、果ては六大周遍の毘盧遮那佛を觀じ、他面身紫金色、相好圓滿、遮那珍御の莊嚴身を説くと雖とも、一度其後世の附加を去り、信徒が自家理想の説明を除き、歴史上の事實を辿りて、曾て現實せし一佛陀を探索する時は、畢竟一人間たるを免れず。抑も何れの宗派を問はず、苟くも一箇の宗教を創立せし人は固より當代の偉人にして、多くは其師仰者が歴代附加せる幾多怪誕の説話に纏繞せられ。恰かも天上より降臨したるに非ずんば、靈界よりの化身の如く見做され、神怪と奇蹟とは傳説と口碑との搖籃に育成せられ、虛中實を含み、實中虛を混じ、恰かも雲煙を捕捉するが如き感なくんばあらず。特に釋尊の如きは其時代の遼遠なる、其信仰區域の擴大なる、況んや構想の巧妙と材料の富豊とを以て稱せらるる印度人の頭腦と、陶爛巧緻紆繞曲折の文字を有せる梵文學の浴簾

とを経て、説話は一層の複雑を極めたるに於てをや。され、生知安行の君子は人間としての吾人の最好模範たらざるが如く、生れながら佛陀たる釋尊よりも、人間としての釋尊が、非常なる熱心と非常なる決心とに加ふるに非常なる苦心とに由りて、菩提樹下に正覺を唱へ、源泉滾々流れ流れて幾多の民人を潤化し、其信仰と歸敬とは礙りて三身となり、四身となり、十方佛となり、無量佛となれりと見ることが、如何に教訓と趣味と尊敬とを増加する所以たるかを知らば、先づ史的事實の敘述を以て佛陀論の變遷を見ざるべからず。

釋尊は釋迦種族迦比羅城主首圖駄那の子喬答摩悉達多といふ。母は摩訶摩耶。生れながら非凡。七歳(或は八歳)跋陀羅尼(一に曰ふ咄答密多羅と)に就て教育を受け、又屬提提婆を延きて武道の師となし、長して耶輸陀羅(或は曰ふ三人と)を其妻となし、三時殿に五欲の快樂を享け、一子羅喉羅を挙げたりしが、人生無常の觀念は遂に太子を驅りて出家せしむるに至れり。知るべし釋尊も、曾ては父王は太子と稱し、妻は夫と侍しづきしことたる。況んや其恩愛の情は出家以後、其妻をして想夫の情に悶絶せしめ、父王は使を發して強いて歸還を促し『雜阿』(三)に佛自身の回想を記せり。其伽闍尸梨沙山(象頭山)に苦行をなしては、形影削瘦皮骨連疲勞甚だしく水に入りて自ら出づること能はず、僅かに河岸の樹枝を攀ちて出でたりと傳ふ。(法顯傳(跋六)には其道跡地を)

記せ) 其色身は人として此世に表はれ、王舍舍衛の山河は皆是れ佛陀が往昔其足跡を印したるの地にして、(大小經典中此兩處最も著しく舍衛城には、毘摩東阿、既圖あり王舍城には迦蘭陀竹林、溫泉林、靈鷲山等あり) 其努力、其考察、其道行は悉く時空兩間の地盤上に顯はれたる事實、換言せば人間か人間世界に顯はしたる事證にして形而上の本體の法身となし、神祕不思議の報身となすが如きは是れ畢竟教徒が自家信仰の説明に過ぎず。説明は事實ありて始めてあり、事實は説明によりて左右せらるべきにあらず。

釋尊は解脱の道を得んが爲めに阿羅藍迦藍を尋ね、自ら満足をえずして去り、更に苦行の頼むべからざるを知るや、獨り自ら迦耶村に出て、畢波羅樹下に端座思惟し、内外の惡魔を退治し、無上正覺をえ、勝者佛陀となりぬ。佛陀は成道の後ち先づ之を優毗伽(現法)に傳へたるも、彼は殆んど何等の印象を殘さざりしが如く(本行經(跋七)に佛徳を説きたるの外、增阿(高僧品)中阿羅藍經(跋七)五分律(跋五)本行集經(跋八)等皆彼れが冷然たる態度を傳ふ) 而して本行集經には次に佛が恒河岸に到るや、船師、佛の價を有せざるを以て渡船を拒絶したるを記せり。去つて已れと共に苦行をなせし五從者を鹿園に訪ふや、彼等は釋尊を目するに情性錯亂、心、專精ならざるものとして、相戒めて共に語るなからしめんとせり(跋一)。又曾て乞食遊行其故國に歸るや、父王は呼ぶに釋種の太子何ぞ乞食の行を敢てして我等を愧かしむるやといふ。是の時決して金色の佛身にはあらざりしなり。波斯匿王は佛が自ら稱して、無上正覺をえたりとの大言壯語を讀み(雜阿)、月光は佛を目するに年少梵志を以てし、其智能を疑へり(增阿(跋二))。固より學道の年時に異説ありと雖ども、二十或は二十九成道は殆んど通説にして、人の事をなす

多くは而立の年（釋迦牟尼佛の成道年）にあり（立の前後にあるの事例）。然れども諸著宿婆羅門に比すれば尙未だ年少の譏りを免れざりしならん。尼健子の異道は釋尊を呼ぶに摺曇を以てせしことは阿含經中に散見する所なり。

又曾て佛、波羅村に乞食す、村民ために食を施さざりき（增阿彌王）。そは果して魔波旬の妨げによりしか否かは問はずとするも、乞食其意を達せず、説法して後ち始めて食をえたるの事實は、以て現實の佛師主の何たりしかを想見するをうべし。今其處々に散説せる佛陀を見るに、無比女は佛身に眷戀し、悉曇利摩羅は瞋恚を生じ、優盧頻螺婆愚痴を起し、婆羅門傲慢にして禮を失し、提婆は其生涯中佛に反抗せり。是れ有部に於ける佛身有漏説の根據にして、貪等の所縁たる佛身は遂に無漏にあらず。身量丈六、壽量八十、佛説にも時に不了義の語あり。況んや睡夢ありしことを傳ふ（AN.V. 196には）。『大論』（卷一）『興起經』（卷十）等に佛宿世の九（十）罪報を數へ、毗樓離王（波斯匿の子）釋迦族を滅ぼすや、（增阿彌王見品及三〇.327流轉王經宿七等に記せ）佛爲めに頭痛し、又冷風に脊痛し冬至に熱を患ふ等といふ。就中孫陀利女に關する惡名は『李經』（N.268）『法顯傳』（卷六）等諸所に散見し、提婆は佛足を傷け、祇城は針を佛身に行ひ、（大論）其他常侍者阿難を假りて佛陀の人間たる事蹟を傳ふるもの少からず（チユラワツガ十一.10.10『四分律』五十四の四失七過（列六.9.10））。且つそれ佛が出家修行、成道は、普通波羅門の四時期に類せり。佛は遂に人間たりしなり。人間中の偉大なるものなりしなり。諸傳多くは成道までの事蹟を叙して、其餘に筆を擱きたるは、勿論種々の理由の存するなるべきも、成道以後の釋尊は之を靈化するに易きも、成道前の釋迦は遂に一國の儲君に過ぎず。これを如何にして

後に三界の大導師たりし佛陀の前半生とすべきかに苦心せし痕跡を傳ふるものにあらずや。少くともこれ其一因たらざるなきか。此の如くにして其妻其子も悉く之を觀念界中に捕へ來りて彩色を施し、説明の許す限りは之を靈化せんと力むるも、瞿曇悉達は遂に瞿曇悉達なり。後年其化を恒河の流域に擴め、四輩の歸依者次第に増化し、餘光遠く南北に輝きし佛陀は固より古今不世出の一大偉人なるも、其現身は一太子として世に表はれ一度發心して道を得、更に弘法の爲めに經營せし事實は、現實の人間たりしなり。説法度生五十年化緣正に盡きて涅槃に入らんとするや、佛自ら念言すらく、我今疾生し舉身痛甚だし。一切想を念せず、無想定に入る時は是れ安穩といひて、更に阿難に懇篤の遺訓を残すところ（長阿彌行經）。佛陀人格の偉大と深厚なる慈悲とを認めうるの外、又拔陀河畔沙羅林中病苦 *lonie Pakhandika* に逼られたる枯影の一沙門を見ずや。事實上の佛陀は遂に一沙門師主たるを免れざりき。此の丈六の一沙門が遺弟の心を通じて後、如何なる形を取るに至りしか。典籍の浩瀚、教義の多様、從て思想の豊富なる佛教文學は諸種の材料を混糅して、遂に本願救濟の佛となしぬ。事實は一なるも説明と解釋とは自ら人に由りて異なる。後世佛徒が釋尊を寫すに如何なる點に於て最も力を濺ぎたるか。如何なる點に於て其説を異にするに至りしか。

(貳) 佛陀教化の事蹟

佛一たび廓然大悟の境地に達するや、心地玲瓏として、溫容自ら清適、先づ阿羅藍並に鬱頭羅弗（Uppalavaśa）を化せんとせしが。其の已に世にあらざるを聞き、「苦哉不聞吾法而命終、設當聞吾法者、即得解脫」といひ、去つて

波羅捺斯ワラナシに向ふ。途上帝梨富沙等五百の商人に會し、密楚を受け、佛法に歸依せしめ〔本行集經〕、又前きの優毗迦ウヰカに對し、自覺の宣言をなせり。曰く、我は無師獨悟、人中の最尊、泥中の蓮花の如く、世に汚されざる佛陀にして、不死甘露の數を鳴らして世目を啓かんが爲めに今迦尸の都に向ふものなりと〔現法二一〕。此語中佛陀の自信の牢固として抜くべからざるものあるを示せり。斯くして佛は佛陀たる資格の宣言を終へ、次いで憍陳如等五比丘を化す。此時の説法は、轉法輪經として、南北同一の教旨を傳ふ。佛尙鹿園ルカヤンにありて道を説く時、波羅捺城長者の子耶舍佛ヤセに歸し、其父母妻奴亦佛法に歸しぬ。而して在家の弟子となり、其友五十餘人亦正法に歸せり。佛は此の如くにして忽ちに六十有餘の弟子をえたりしかば、更に進んで法音を弘め、法樂を諸にせんとして、諸弟子を四方に派遣せり。獨り耶舍は波羅捺に至り、父母の附近に止住せり。是れ實に鹿野苑に到着してより僅かに三ヶ月なりしといふ。徒弟の將きに發せんとするや、之に告げて曰く。比丘よ巡遊をなせ、多人の幸福のために、多人の安樂のために、世間の憐愍の爲めに、人天の利益、幸福、安樂の爲にと〔現法二一〕。此の宣言は先きの優波迦に對する宣言を第一とすれば、これは第二の告教にして、前者を自信自覺の宣言とせば、これは主として弘法救濟の熱情を表はしたるものと見るべく、化他の方面に於ける佛陀は此宣言に於て認むるをうべし〔但し本行集經の如きは第一の宣言中にも恩、迷、食、病、を導治する化他の義をも布演せり〕。

弟子を四方に派遣して後、佛は優螺爲羅村に入り、神通を現じて事火教徒迦葉を教化し、五百の徒弟と共に佛に歸せしめ、其弟、那提、謁夷の二迦葉も亦其兄の所爲に働ひ、各數多の徒弟を率ゐて俱に佛弟子となる。佛は是より象頭山を経て、王舍城に向ひ、城外竹林に居住し、成道前に已に約ありし頻毗婆羅王を化し、王は城中の竹林僧伽藍を建て、佛徒の修道院を獻し、王者歸佛の先驅をなしぬ。而して是れ實に佛教迦藍の初めとなす。舍利弗及目犍連各衆徒を率ゐて王舍城那蘭陀村にありしが、佛弟子阿捨婆者アセバか蕭然たる風采を見、其師佛陀の德風を慕ひ、其徒衆二百五十人と共に佛弟子となる。次て憍羅厥又國に聰明慧智の婆羅門迦葉波を誘化す。佛は波羅捺を出でて王舍城に來る、日尙淺きに早く已に多數の弟子をえたり。就中後年神通第一と稱せられし目連、智慧第一の舍利弗、頭陀最勝にして結集の首座たりし迦葉、而して優爲、那提、謁夷、の三迦葉亦學識名望高く、是等學者の歸佛は大に注意を要すべく、特に國王頻王の佛陀を崇敬せし事は深く民心を動かせしものありしならむ〔長阿含九〕。

時に北方憍薩羅の給孤獨長者、夙に慈善家を以て名あり。佛の高風を慕ひ、竹林に詣して佛に歸依し、舍利弗を奉じて國都舍衛城に歸り、次いで太子祇多の苑林を贖ひ、其名に因みて有名なる祇園精舍は建立せられぬ。舍衛の國王波斯匿及太子が佛陀に歸依したるも亦此頃にあり。

佛は成道以來恒河の南北に遊化して、其法頗る盛んなり。偶々故郷の父王病の故を以て故との太子、今の佛陀に見えんとせり。佛乃ち迦比羅城に向ふ。父王を始め耶輸陀羅其他親屬は所行讚の形容の如く、實に渴して精冷の水に逢ふの思ひありしならん。されど佛は已に父王首圖陀那の太子を以て自ら任せず、過去佛の

後裔を以て父王に答へ、名譽と榮華と恩愛との外に涅槃最大の妙樂あるを説き、父王眷屬亦其法に傾聴し、新婦に分るる憂愁を忍んで、異母弟阿難先づ佛所に到り、子の羅喉羅、大臣の子、優陀夷、貴族阿那律等同族出家するもの亦少からず。佛の姨母、波羅闍波提、妻、耶輸陀羅等婦人亦出家して教團中に初めて比丘尼を生じぬ（『釋迦傳』）。阿難は多聞を以て秀て、阿那律天眼を以て聞ゆ、而して持律堅固なる首陀羅の優婆塞、亦此頃に出家せり。

佛は故郷を去りて、再び舍衛に入り、次いで諸方を遊化し、足跡殆んと中印に周ねく、社會の上層下層を通じ、貴となく、賤となく佛の歸依者次第に増加し、爲めに異道多く佛陀及其弟子を傷けんとし、就中佛の從弟、提婆達多是再三佛を阻害せんとし、阿闍世と共に屢々危害を加へたり。蓋し其之に反抗するもの出て來るは、同時に教團の盛大を致せるを見るをうべし。瞿伽梨の如き、善覺の如き、戰遮の如き、室利毘多の如き、或は冤罪を負はしめんとし、或は毒飯を以てし、或は火抗を以てし、或は公然稠人中に佛を誹謗する者あり。又徒弟の此等異道の害に逢ふあり（『釋迦傳』）。教團亦多事なりしが、佛の徳風は遂に印度を風靡し、阿闍世も罪を佛に悔えて正法の人となり、外道の歸佛も亦少からず。

佛陀五十年の廣化茲に完からんとして、顧みれば齡正に八十に垂んとせり。而かも弘法攝化止む時なく吠舍離に離車を化し、祈連禪伐底河畔に須跋陀羅老人に説法し、到る所に懇々たる慈訓を垂れ、遂に沙羅林雙樹の下に於て、最後の教誡をなし、安祥として入滅せり。遺骸は闍維せられ、遺骨は諸國の間に頒たれぬ。

佛一代の教化概ね此の如し。

抑も佛陀の傳記を叙するもの極めて多し、南傳あり、北傳あり、南傳また錫崙傳あり、緬甸傳あり。暫く北方傳につきて之を見るも十有餘種あり（『釋迦傳』。南北佛傳『普賢雜記』七、六十）中には『佛本行集經』の如き六十卷の浩瀚なるものあり。然れども其成道以後の記事に關しては、其年月の長さに比して、其間の事跡を歴史的に明了にせるもの極めて少なし。（『大莊嚴論』『普賢雜記』修行本起經『成道降魔を終りとし』）『太子降魔經』三加葉の歸佛を以て佛弟子となりし王舍城の記事を以て終り、其後に於ける事跡は更に之を記せず。『佛本行集經』の（轉法輪後三十四卷耶輸陀羅因緣品より六十卷阿難陀因緣品に終る）如きは釋迦の歸郷を以て其終末となせり。中には『佛所行記』『佛本行經』の如き延いて入滅の事に及べるものありと雖ども成道より入滅に至る其間の記事に至りては頗る畧なり（『統記』の如きは）。今茲に佛傳の詳細なる記事を探らんとするにあらざる。要は佛陀教化の事跡を見るにあり。以上大凡の次第と其人物とを列擧せり。佛陀成道後一度は躊躇したりしも大悲の本志は發して教化となり。辛苦逢遭幾十年、救濟の事業は此に大成せられぬ。

現存漢譯佛傳の編成は、大略紀元前後より次第に續出せるものならんといふ（『印考』）。果して然らば佛滅後遙かに後代に成りしものと謂ふべく、其間變化と増加との免るべからざるものあるは勿論なりと雖ども、想ふに其原材は滅後幾くならずして、各種の小傳小經を生ぜしもの如く、同時に諸種の説話を混せるは現存美術の證明する所なり。此故に其原材は悉く否定せらるべきものにあらず。説話は構想によりて事實に着色し、因て以て史實を薄弱ならしめたりとするも、是れ佛徒が信仰の事實なりき。其着色の意義は没すべからず。佛陀は其信徒によりて如何に解せられしか。

傳にいふ、佛は臘伐^{ラビ}尼園に降誕の時、天地光明滿ち、自然の音樂響き、甘雨其頂上に注ぎ、將來の佛陀なる孩兒は七歩を歩みて宣説して曰く、我當に天上天下を度脱し、衆生を安住せしめんと、(因果經)此生利益一切天人有如是等諸奇 待事、非可具説。(辰一〇)修行本起經、三界皆苦、吾當方之。(辰一三)佛本行經如來生品第四、將尋一切、服甘露、安臥轆草、諸五趣 類、受苦備者、皆得休息、身安快樂、衆精縛著、其急半獄、爾時衆結、悉得解脫。(藏七三)佛所行讚生品七三(我唯一生、當度於一切) 『方廣大莊嚴經』第三誕生品第七(宿四三)東行七步、我(一切善法、當爲衆生說之。南方：西方：北方：下方：) 佛誕生の宣言は必しも如かく重要なものにあらず。然るに諸傳苟くも佛の誕生を敘せんとするや、曾て此一項を逸せるものなし、殆んど信條の如く然り。

蓋し後來佛陀の終生を貫く主義と行實、要するに事後の全體に明確なる斷案を附せんが爲めに茲に事前の一時を假りしものに非ずして何ぞや。而して其宣言中に、自覺覺他の意義を表はせるは、佛陀と其教義とを了解するに見免かすべからざる關鍵なり。(寶應經)宿九(三)里那那雜事(卷一〇)『瑞應本起經』(辰十三)『本行起經』(辰七)『修行本起經』(辰十)『佛所行讚生品』(藏七三)『佛本行經』如來生品(藏七三)『大莊嚴經』誕生品(宿四三)『華嚴經』(宿四三)『過去現在因果經』(辰十)等多くは三界の獨尊たるは勿論衆生慰安の救主たるの宣言を記せり)

抑も、民を新にせん爲めには、先づ自ら其明德を研かざるべからず。自行妙宗に暗きもの易んぞ他を度するをえんや。自覺と覺他は佛陀人格の兩面にして、僻支佛と佛陀とは此點に於て明かに區別あり。後世報身に自受用、他受用を分てるも亦此兩面を布演せしに過ぎず。傳説は、解釋に解釋を重ね、説明に説明を加へ、自行七歩其右手を擧げて天人中の最尊、一切衆生の慰安者といふに過ぎざるものは、いつしか後の佛傳にては自行の七歩は其回数を増して四方上下の六回となし。『修行本起經』には明かに「從右脅生墮地」といへるのみなるに、『莊嚴經』に在りては「下足處皆生蓮花」といふ。此の如く言語と思想とを増加し來りしと雖ども、

其原意は更に變ずる所なし。固より現身の太子が呱呱の聲に代ゆるに果たして此の如き壯大の宣言をなしたるや否やは問ふを要せず。唯之を以て佛陀一生の事業の解釋と見るときは、是れ實に深奥なる旨趣を有するの語とせざるべからず。要するに潛潛なる佛傳の全幅は此二個の眼睛によりて活躍せるものは外ならず。

一面より見れば一大佛教は畢竟佛陀の説明に外ならず。而して『增阿』の佛陀は『長阿』『中阿』の佛陀と異り、『法華經』の佛陀は又必しも『無量壽經』の佛と同じからず。若し其差異を以て論すれば當に天台の四教四佛、華嚴の五教五佛のみならんや。抑も經々律々各所傳所見を異にせり。されど之を概言するに小乘經は佛陀自覺の事實に專注し、大乘經は其自覺の理想を語り、特に覺他の方面を演釋し、數多の佛傳は恰かも其橋梁たるの觀あり。要するに歩一歩化他の勝用を認むるに至れり。

佛は元と師教を藉らず傳承に依らず、一に内觀禪定の勝思惟を辿れり。此故に其所證たる超世の眞諦其悟得たる心奥の靈光や。少くとも佛陀にありては甚深内秘、難見難知にして、多貪着樂、無明界裡の衆生、如何てか之を解し之を行ずるをえん。妙法の開顯畢竟徒勞ならんとは佛陀の一再ならず躊躇せられし所ならん。而して佛陀が自信自覺の深強の度を加ふる毎に此疑念の幾層倍すべきは勿論にして、『法華經』が唯佛與佛といひ、『華嚴經』が如觀如陞といふも、其元と這般の心理を布演せしもの如し。蓋し佛陀の自證を重視せんか、此事實は看過すべからず。然るに諸傳往々にして、人間心理の自然なる此一節を削除若くは變化せるものあるは、(現法)參照 惟ふに覺者たる佛陀は今や迷界の濟度者となり、慈悲の結晶と觀せらるるに至り、既に降誕の

宣言に化他の目的を表はさしめたる佛傳は最早や此に於いて躊躇を許さず、直ちに轉法輪に筆を移せるにはあらざるか。要するに化他の佛陀を畫かんとする努力の結果にはあらざるか。

(參) 教化の特色及其形式

凡そ宗教の教祖ほど自己の傾向を後世に貼すもの稀なり。基督教徒により基督を見、回教徒によりてマホメットを見よ、教祖の影響や實に徒爾ならざるものあり。何ぞ必しも違きに求めん。眞宗信徒によりて親鸞を見、法華宗徒によりて日蓮見るべし。父によりて子を知るべく、子を知る亦須らく父によるべし。佛陀の教化は果して如何なる特色をか具へたる。

佛陀は基督の如く急激の性なく峭峻の風なし。又マホメットの如く危言をなさず、劍戟を用ゐず。春風晴蕩の中、自ら秋霜の威嚴を備へ、洋々衆多を容れて生涯悲惨の痕迹を留めざりき。蓋し其長年月の説法は之を他の教祖に比するに、未だ曾て釋尊の如きはあらず。こは特に佛傳の異色にして、餘風後代に及び、其教徒を理解する上に於て、特に注目すべき要點とす。

佛陀は全體にして溫和の性情を具へたり。舊來の婆羅門に對する態度の如き、之を基督がパリサイの徒に對したるに比すれば、其間大なる差異あり。佛陀は婆羅門に對して破壊的ならざりしと共に(增阿(六三)怒りを發するが如き事極めて稀なりき)、一言にして盡さは、佛陀の彼等に對するや對論者に非ずして、誘導者の態度なりき。佛陀は極めて瞋恚の遠くべきを説き、自己の徒衆に對しても、破戒非

法の甚たしき場合を除くの外は狼りに叱責するが如きと絶えて無かりき。抑も佛の教團は學校風にあらず、婆羅門制度の繁褥を脱して(耆那の徒は此點を非難せり)、自由の間に自ら井然たる統一を保ち、師弟の親情は其教團の特色にして。(增阿(六三)特に乞食遊行及安居の制の如きは此風を助長するに與りて力ありしものならん。)

(增阿(六)及一) 經典は森林河畔靜寂の裡、佛陀の溫情自ら其四邊を光被せる光景を傳ふるもの少からず。佛陀は實に圓滿にして經驗に富み從容迫らざる間に能く恩威並に行はれたり。(目連曾て不平を懷き衆衆と共に教團を去りしが暫くにして懺悔し來りて其眞假ををへり)(釋迦傳) 要するに完全なる師主の風采を具し、弟子は安んじて事々に佛に問へり。(本行集經(八)加ふるに極めて慈心に富み、不殺を戒條の第一に列ね、異道を憐れみ、迷者を悲しみ、慈愛禽獸に及び)(小歌を教ひて闍れたるが如き) 特に人の罪過を犯すものを見ては憐愍の情禁する能はざりしものありき。(慈利摩羅佛の四緣(四城記)六の一)

婆羅門の苦行や祭祠や其動機は神通をえて自己の欲する所をなさんとするにありき。彼等は我慢と術學と虚飾とに覆はれ、王種と雖とも容易に其神智に與らしむるを欲せざりき。佛陀は之に反して四性平等に同一學道の鹹味を示し、(中阿(五)及五)增阿(六)來りて法を聞くものあれば王者學者を始め、鍛工の純陀、理髮師の優婆離、姪女の菴婆波離(法顯傳(六)に遺跡を記せり) 大賊の悉屈利摩羅に至るまで淳々として自證の法を示し、曾つて胸中秘藏あるなし。(現法(一)巴利文(二)) その應機攝化は曾つて階級の上下を論ぜざりき。(增阿(六)及九)增阿(六)及九)の如(スニタの) 抑も印度に於ける平等主義や單に其思想としては Yajñavalkya を始め佛以前の學者中に存し、優婆尼沙士には王族婆羅門に勝るの新思想を示し (Bṛh. II, IV, etc.)。現に『長阿』(六九)『增阿』(三〇)の如

きは王族を他族の第一位に列せり。然れども其實現者は實に佛陀を以て嚆矢とす。但し之に因りて佛陀を目して社會改良家と（カンニングハム氏）「印度地誌」二〇二）なすは誤れり、社會上の影響や寧ろ佛陀の人格と其教義との副産物に過ぎざればなり。實に佛陀の慈悲と其平等の教義とは異日佛教が世界的宗教たるの素地にして佛の在世既に富樓那が不惜身命の決心を以て蠻地の傳道に向へるあり。（長二）「バウルゼン氏會つて其著「倫理學系統」に於いて曰けらく、基督教の北蠻教化は世界史上に特筆大書すべき教績なりと。吾人は佛教が全亞の民人を潤化せし功勳に對して亦同様の讃辭を述ぶるに吝ならず（スライン氏「子」）「閩」の序參照）而して其基く所は此慈悲平等の主義にあり。淨土教は特に此主義に負ふ所少からず。そは下に至りて辨ずべし。

佛陀は又生命なき他律と形式とを厭へり。水淨梵志に對しては身淨心淨に勝ると説き、（中阿）「俱形梵志に對しては苦行必しも善趣に生ぜずといひ、（長阿）「及九〇」善生には虚儀の六方禮に新意義を教へ、（中阿）「及九〇」（優婆塞）「戒經」列二〇三）剃髮徒らに人を清淨にせず、要は斷欲を主とす（雜阿）「及四〇」（法句經）「一三」といへるに見て明かなり。當代婆羅門教の用語と教義とは少からず佛教中に入れるも其中に必ず佛陀の人格を通して廓清の意義を發見しうべし。（本行集經）「及八七」即ち舊義に盛るに新酒を以てせり、所謂精神主義なりと。

精神を重んじ虚儀を避くるものは勞ひ實行主義とならざるべからず。佛陀は會て論議をなさず。因論生論所謂鍊磨机上の空論は、多く後代の論師佛教に屬す。固より其對機には當代有識の士を網羅し、且つ其教化半世紀に亘れり。此の故に平易なる通俗的教訓のみを常用せりとは想像するをえず。尼乾子を始め「中阿」の

優婆離經等に異見者往々論議を挑めるあり。舍利弗迦葉等の復説中には理論的傾向を示せるもの少からず。又佛陀の説法は頗る内包に富めり。況んや論戰は當代印度の風潮なりしに於てをや。此の故に佛陀も時に辯證を假りしとなきにもあらざりしならん。然れども其終りや必ず實行に誘引せんとせり。又當時數論派の影響を蒙り、既に分析的説明の風を馴致し、煩鎖なる法相の端緒を開けるありと雖ども、要するに見を退け行を符べり。此の故に俗論無益（中阿）「及三三」戒は聞に勝る（中阿）「及三三」認知は惠解脱にして修得は俱解脱なりといひ（中阿）「及六二」多論説は畢竟出家毀辱の法なりといふ。（中阿）「及三三」佛陀が異道に對し汝等は之を知れり我は之を實行すといひ、又外道異學は空瓶の如し、如來の内法は蜜瓶の甘美ならざるなきが如しといへるもの（中阿）「及三三」能く其傾向を表はせり。蓋し其教義が純潔無雜簡明直截にして而かも能く教化實現の効果を奏しえたるもの寔に内に行實の豊富なるものあるに出づ。吾人は第一會誦か經律二藏にして、佛滅百年吠舍離の會誦が些々たる十種の小行事に關する異見に起因せるを見て、原始佛教が如何に行實を重じたるかに驚かざるをえざるなり。

實行主義は由來漸修を伴ふ。一步は一步より堅實なる修得を要す。（算數目連、及六〇）「及六〇」佛陀に諸種の修行階段を分つに至る根元亦實に此に存す。

實行を主とするものは抽象の論議を要とせず、目前具象の中に脚底安固の地盤を作る。原始佛教は比較的具象説話に富めり。従つて譬喩を混ざるもの頗る多し。是又佛陀説法の一特長といふべし。鹽喩（中阿）「及五」城

喩 (辰五) 水喩 (辰五) 海喩 (辰五) 木積喩 (辰五) 兵喩 (辰五) 車喩 (辰五) 孔雀喩 (辰三)
 牛糞喩 (辰五) 象喩 (辰五) 象喩鏡喩 (辰五) 蓮華喩 (辰六) 木片喩 (辰四) 三十喩 (辰五) 其他中阿喩經、穢品、蓮
 華喩經、黑比丘經等一々枚擧に違あらず。動植物を始め自然人事の百般を盡せり。(詳細は「釋律典」相見るべし) 特に眼前
 の事例は少からず實感を喚起せしものありしならん。佛經が巧妙なる譬喩に豊富なるは決して基督教聖書に
 劣るものにあらず。佛陀の説法には此の如く譬喩多きが故に始めは單に説意の明確を期するに過ぎざりしも
 のも漸々一定の形式を具し、因縁談と結び、本起談と合し、(本起談の) 自ら佛教の一特長となり。『法華』の
 三周説法。(大乘と小乘) 『華嚴』の三照。(阿彌陀佛品及一照、猶在阿彌陀佛品、猶在阿彌陀佛品、猶在阿彌陀佛品)
 の如きは佛教教學と結びて重要なる意義を有し。由來法譬合釋は説法の常規とせらるゝに至れり。此に於て
 か譬喩の實物化する例も亦少からず。大城芥子喩、天衣拂石喩 (辰三) の如きは經文明かに「我今常與汝引
 譬喩」といへるにも拘らず。後には芥子劫磐石切なる切名となり。先きの木積喩經の譬喩の如きは梵網經
 (大)には轉して未來受苦の相と化し、舍羅浮が前きに誇り、後ち佛陀の詰責に黙するや、野干の狐聲をなす
 に比せり。(辰三) 此譬喩は本生譚中獅子品 (爾(11, 100)(17)) と同意にして (西化傳師皮を穿けたる鱗は此の本生
の序) 本生譚中の説話は多く説法の譬喩中に求むるを得べし。南傳亦然り。(同上の) 後世大乘佛教に至りて佛
 菩薩經名等多く此等譬喩に遡るをうべきもの鮮からず。後章更に辨する所あるべし。佛陀教化の特色概ね
 の此如し。

佛陀教化の形式に三種示現あり。神通と他心觀察及教誡是れなり。(太子瑞應本起經「辰十」阿彌陀經「辰一」中阿
彌陀經「辰一」寶積經「三」) 就中教誡が主なりしことは上來所述に於て畧其意を盡せり。神通と他心觀察とは正道に
 歸依せしむる手段にして、唯だ單に自己の威力を示さんためにあらず。(辰九) 我但教弟子 此故に迦葉を化
 する時にも、先づ神通を現じて神異を示し、然る後ち説法せり。悉曇利摩羅に對しても亦然り。佛の化儀は
 概ね此の如し。此他に衆生濟度の手段、若しくは其力用につきては三明、四如意足、六通、四無畏、十力、
 十八不共法等あり。悉く自覺覺他の勝用を出てず。而して其多くは三種示現の布演と見るを得べし。四無所
 畏 (正等覺、漏永盡、設障法、) は沙門婆羅門若しくは魔天の類、我を以て未熟となし未だ苦際を盡さずといふと
 も、更に恐るる所なしといふにあり。(辰參) 蓋し自信の堅固なるを示せるものに外ならず。十力
(虛非處、業異熟、靜慮解脫等特等至、根上下、種々勝解) は衆生の適不因緣智慧及其所念を知り、宿命、天眼、漏盡の
(種々界、偏趣行、宿住隨念、死生、漏盡、) 俱舍論) は具略の異りに過ぎず。而して是等は特
 通力あるをいふ。(阿彌陀經「辰二」) 其他三明六通 (天眼、他心、神足) は具略の異りに過ぎず。而して是等は特
 に外道に對して佛陀の威力を述ぶるにあり。(辰參) 十八不共法は十力四無畏の外に參念住と大悲とを加ふる
 なり。要するに四無所畏は自信の堅くして動かすべからざるをいひ、六通は佛に不可思議力あるをいひ、十
 力は神通と他心觀察とを出てず。然るに此等教化の形式中多くは神通に關せざるものなし、佛教の神通は元
 と基督教の奇蹟に類す。然れども彼に在りては神は全能の君父なり。神子其威靈によりて奇蹟の證を現せる

に外ならず。然るに佛陀にありては自得なるが故に其神通の起源は一に佛陀が體得せる法に依る。舍利弗は智惠三昧の結果目連以上の神足を現じ、又六通は戒徳具足によりて達せらるべしといふ。(及二) 換言せば三學所證の法徳にして凡そ正智の人は誰人も此境地に至るをうべしとなす。(及三) 抑も佛陀が果して此種の神祕力を有せしや否やは今茲に論せず。但しリス、デビッツ氏等は此神通の信仰を以て後代の附加物となせども、惟ふに聖者得通の思想や印度古來の信仰にして、佛傳並に諸經典に傳ふるが如きは佛在世時の信仰に基けるものならん。若し此信仰を缺かんか佛陀は宗教の教祖たるに適せず。後來發展の佛教は單に冷然たる哲學たるに了り、經典は獨り其紙數を減じうるのみならず、甚だ無趣味のものたりしならん。但し同時に醇乎たる佛教を溷濁にして客星往々にして帝座を犯すに至りしも亦此に起因せり。

第二章 滅後の佛陀

(壹) 滅後の佛陀

五十年の化縁は決して短かきに非ざるも、佛陀は今や跋提河畔に會者定離の理りを現はしぬ。盲者の眼目、病者の醫師に於けるが如く、一に弟子等が歸依の中心たりし、現身の佛陀は今や去りぬ。暗に明を失ひ、津に船を逸せしが如く、「如來滅度何其駛哉、世尊滅度何其疾哉、大法淪躓何其速哉、群生長衰、世眼眼滅」(及九) 其他同意の經文、現法(及三) との遺弟の悲嘆は實にさもありしならん。但し平和の一生は悠々として還らず、安祥と

して涅槃に歸せり。之を基督が電光一閃倏ちにして出て又倏ちにして悲慘の終りを告げ、遺弟が何となく、周章狼狽の態あるに比すれば滅後の遺弟は比較的靜穩なりき。されど激するもの必しも深からず、靜かるなるもの必しも眠れるにあらず。恆河は北流すとも、吾は佛説を疑はずとの堅信は、何とて色身の入滅に依りて滅し去るべき。弊宿波羅門は「若し世尊世に在まざば遠近を避けずして親見歸依すべきに」とて、追慕の切情を露はし、迦葉の言を聞きて「滅度の如來及び法と僧」とに歸依せり。(及九) 元來佛陀の教義に従へば漏盡の佛陀は更有を受けず。縱令入滅前に佛身光を放ち滅後迦葉の會葬に佛足金光を放てるも(及三) 基督の如く肉身の復活は畢ひに望むべからず。とも滅度の如來とは何ぞ。

蓋し佛在世の日にありては、行道の目標、理想の中心は、直ちに活ける佛陀の言行に接して、之を見之を聞きぬ。然るに滅度の如來は直接の感化にあらず。常人にありてすら、子は三年亡父の道を改めず。架上の殘藥、篋中の故衣尙其人を偲ぶ。滅後佛徒の歸托は先づ佛在世の事々を回顧するにありき。其遺物崇拜の起るは寧ろ自然の數と謂ふべし。抑も生身佛に代はるべき第二の佛陀は即ち遺身の舍利なり。滅後先づ香華を供養し、(巴黎卷陀迦小) 閻維の後ち八國に頒與して、造塔供養せりとは、南北「涅槃經」の等しく傳ふる所に於て、現に其一部として北印ピブラア Piplawa に發見せられたるあり。或は教法の滅を憂へ舍利に依りて、佛陀を偲べるあり(增阿八難) 大小經典舍利尊重を明せるもの頗る多し。阿育王の子摩晒陀錫崙に布教するや、先づ帝須王(及三) として佛骨を迎へしめたり。紀元後四世紀の始め同島王 Meghavanna の時佛牙の

入島あり。(『印考』) 是と殆んど同代に成れる『法顯傳』には、那竭、藍莫、摩竭陀、獅子諸國に於ける舍利を始め、佛陀の齒牙頂骨等の崇拜骨ならざりしを記せり(『致六』)。舍利なき所には感得の傳説あり。(『多傳』) 遂には國家の富を捧げて其盛觀を盡し、唐代韓愈の佛骨表を見るに至れり。南方佛教徒にとりては、今尙重要なる信仰の對象なり。惟ふに其原始にありて、既に其尊崇尋常ならざりしものゝ如し。遺身佛牙の崇拜と共に、遺物の崇拜あり。就中鐵鉢は佛陀命根の資具なるが故に永く重寶とせられ、曾て國家と鼎の輕重を争へるは『馬鳴傳』に見て明かなり。此他袈裟錫杖は勿論、楊杖唾壺の類に至るまで相傳へて禮拜恭敬をなせり。(『法顯傳』) 『法顯傳』(『致六』) 『佛本生經』(『上』) 『沙陁國傳』(『三』) の條下參照) かかる遺物崇拜に並びて遺跡崇拜あり。特に降誕、成道、轉法輪、入涅槃の四靈場は大小經典の等しく認むる所にして、南方所傳亦全く同じ。

但しビガンテット氏『緬甸佛傳』には成道、入滅と、滅後五百年遺骨菩提樹に集まる時とを重視し、『法顯傳』にも上述の四處の外に、成道、轉法輪、降誕、下初利天の四靈場を諸佛當定の四處とせるあり。(『致六』) 其他毘那耶雜事三十八、八大靈塔名號經(宿八)同梵置(成十三)には、普通の四處の外に、祇園(ジエータ、神通處)曲女城(カーンヤクンヂヤ、下天處)王舍城(ラーシヤケリハ、化度處)廣嚴城(グアイサーリ、思念處)を加ふ。此他東門病人を親たるの地(加里羅夷)車限白馬を還へせし地(藍莫)佛經行處(蘭德夷)は勿論王舍城には尼釵子、闍王、提婆の危害を加へし地を記念し、迦耶、北印の鳥衣、南方の師子國の如きは佛足跡を傳へ、『法顯傳』並に『佛本生經』宿呵多、我頭、那竭の諸國の如きは、佛本生の遺蹟をも生ぜり。獨り釋尊のみならず。過去佛並に遺弟の遺蹟をも崇奉せり。(『法顯傳』)

従つて又塔寺の建立あり。抑も印度に於ける建塔の由來や久し。佛教に在りては、卒塔婆は主として、遺蹟を表彰し。制多是遺物寶庫を安置せり。卒塔婆及聖地には玉垣を圍らし、更に柱を建て、刻文をなせるは阿育王代建築の風なりき。そは現存遺物の證明する所とす。又精舎は佛在世時に既に存し、滅後第一會誦に

阿闍世王の修繕を経たるは南北同傳なり。(Cullavaggo, XI, 1, 5.) 七葉窟、象窟精舎は恐らく最古のものにして、

育王代を経て今尙存す。(『印考』) 元來精舎は塔寺と接近し易く、後世に及んては全く結合するに至れり。

而して現存塔寺は多く阿育王以前に遡るを難しとするも(『佛本生經』) 佛陀迦耶、バルフート、サンチ、アマラ

ヴチ等の遺物は早きは紀前二百五十年より下りて紀後四五世紀の間に成れり。(ダット氏) 蓋し育王建塔の事

蹟は極めて古く、又極めて廣き傳説なり。八萬四千塔は唯だ大數を列したるに過ぎざらんも、其所在地の廣

大なりしに見(Cunningham, "Corpus") て其數少からざりしを推しうべく、又彼の『増阿』『苦樂品』(『及二』) に四梵

福中造塔修寺を擧ぐるが如く、大小經典等しく寺塔の起立を讚嘆し、時稍下れども、『法顯傳』に表はれたる

印度は殆んど塔寺佛教の觀をなし、餘風は遠く西域于闐に及び、各戸の門前皆小塔を設くといふ。(『致六』) 按

ずるに育王時代に既に斯風を馴致し、遂かに後代に及べるものならん。

又佛像に關しては『増阿』の聽法品(『及二』) には波斯匿王佛の金像を作り、(『法顯傳』云此像未像) 優填王栴檀像

を作るといひ、ディブヤトヴダナによれば摩伽陀王頻婆娑羅會つて佛の影像を畫かしむ(『佛本生經』) といひ、

經文は起立塔像を常套語となし、又『緬甸傳』(ビガンテット) によれば阿育王八萬四千の佛像を作らしむと傳ふ。

現に『法顯傳』には屢佛像の記事あり、迦維羅衛城には摩耶佛母像の記載すらあり。(『致六』) 然れども現存美術

上の推定は佛像は佛滅三世以後に始まり(『印考』554, 611, 6) 又育王時代に佛像なく、其始め佛傳の項目

を捕へて之を表示し、佛陀の存在を認めしのみにて未だ實際に是を描出するには到らざりき。(『佛本生經』) 蓋し

望去るに忍びざりしは、一卷の法顯傳、限りなき追懐の切情を傳ふるものあり。(法顯傳) 案ずるに滅後幾多の巡拜者が回想の涙や豈に異域の一巡禮僧に劣らんや。されど遺蹟崇拜を以て衆生救済の力とは感じ難し。但し現實の感化が年と共に薄らぐに従つて、其翹望は一層の強度を加へぬ。此時にあたりて佛傳の理想化は又暫時の慰安たるを失はず。育王時代の美術品中佛傳とその本生とを物語るもの頗る多し。此に於てか思ひを佛前佛後に馳せて、未來佛となり過去佛となり、更に直接活ける佛陀との交渉を翹望しては、現在佛の信仰となり、長時に之を感じせんとしては禪定佛となり、次いで三世十方の諸佛となり、佛徒の信仰は種々に變化せり。而して一步は一步より功德卓越の佛陀を追求せり。然るに釋迦佛以外に於いて南北佛教と大小經典とに其許の佛陀を求むれば、獨り過去佛と未來佛とあるのみ。小乘經中の現在佛奇光如來は漢譯『增阿彌陀經』に目連神通の傍説として存するのみに過ぎず。惟ふに原始佛教に於ける佛陀論は釋迦佛を三世に延長せしに過ぎざりき。以下少しく是に就きて其特色を述べ、滅後の佛陀は如何に變し、又如何に發達せしかを觀察せん。

(貳) 過去佛

佛陀の現實的感化の跡を辿り、滅後の佛陀を過去の回想に偲びしものは過去佛と本生譚となり。先づ過去佛を論ぜん。

過去佛は佛陀の直説なりや如何、恐らく其原型は已に佛陀の説法中に存せしものならん。蓋し佛陀は師授

を假らず、傳承に依らず、一に内觀思惟に基ける無師獨覺なり。基督の如く自信の確實性を天啓默示に假らしにあらず。但し宣教の決意は梵天の勸請に待てり。(四分律) 之に例するに先づ佛陀證悟の自信には過去佛思想を認容し得べし。且つそれ佛陀の教義に従へば、其證悟の大道は古今に施し中外に通じて戻らず謬らざる平等同一乗の諦理なり。而してこは努力自證なるが故に、自ら茲に自己と同じく獨覺自證の先覺者ありしと考ふるは、蓋し當然の徑路なり。『雜阿』十二(成二) 『增阿』力品(成二) 等に其消息を傳ふるものあり。就中『雜阿』最も古形に近し。曰く「我得古仙人道、古仙人迹」と、更に曠野に荒路を披きて古人の行處を覓め、古王宮殿を發見せるに譬ふ。抑も佛陀は其初め一個の師王に過ぎざりしなり。此の故に婆羅門梵志沙門は別に其の間に大なる區別を置かず。(長阿』及、九、其他) 初轉法輪は仙人處(法顯傳には佛支佛住所といふ致六) の鹿園に於てし仙人並に僻支佛所居の毗富羅山、靈鷲山は諸佛の出世に其山名を變せずといひ、(增阿』及、二、五) もと佛陀と仙人若くは僻支佛とは後世の佛徒の如く如かく間隔あるものとはせざりしなり。此故に佛陀は時に大仙と稱せられ(中阿』梵天附佛經長阿』次) 其修行は仙人道を以て目せられ(增阿』十、不勝) 其他處々に佛陀と古仙との關係を示せるものあり。加之摩奴法典の如きは佛陀を普通の賢者の意義に用ゐたるあり。佛陀なる語は其原初にありては恐らく一般の師主に適用せられし普通詞なりしならん。此に由りて之を觀るに、過去佛の原形は恐らく古仙人を意味し、自家獨證の先驅をなせしものと見たるは寧ろ當然なり。又父王に對する佛陀の答言には我は諸佛の後裔なりといひ、又輪廻の思想は現果を往因に歸し、本生宿因の厚薄は、諸佛

値遇の有無によるものと解せらる。佛の說法中に本生因縁の説話を混じたる以上は同時に又過去佛思想を認容し得べし。但し現存過去佛の説話は、後代の加増に成りしもの多く、悉く之を佛陀の直説と見做すべきにはあらず。従つて其出現の年時の如きも拘留孫佛は紀元前三千百〇一年に當るといへる Forbes 氏の推算の如きは固より恣側に過ぎず。(ス、ハーデー)
『佛教概論』参照

阿含經中過去佛に關する經典にて漢譯『長阿』大本經(一六九)は、巴梨槃訶波陀那と大體に於て一致し『七佛經』『毘婆尸佛經』『七佛父母姓字經』は其異譯に過ぎず、其他『增阿』十不善品(一六三)等最も能く整頓せり。又『增阿』禮三寶品(一六三)に賢劫四佛を列ぬるが如く、七佛を具足せざるものは所々に散見せり。然るに其本末因縁は多く佛傳の縮寫に過ぎず。就中稍詳述せられたる『毗婆尸佛經』の如きも其降神、托胎、出家、成道、入涅槃の次第は全く釋迦傳の雛案に成れり。(此等過去諸佛に關する人壽種姓道樹、説法、弟子、父母等) 是により
(此等過去諸佛に關する人壽種姓道樹、説法、弟子、父母等) 是により
て知る過去佛の説話は現在釋迦佛の縮寫を過去に投影せしに過ぎざるを。惟ふに過去佛は佛陀自證の確信に發し、後ち佛傳の材料を以て着色添加せしものに過ぎず。法顯傳に迦葉等賢劫過去佛の生處を傳ふるが如きも恐らく釋尊の遺跡より轉じて此等諸佛に及びしものならん。(一六六)要するに過去佛は釋迦佛の反影にして、滅後の整頓になりしは七佛中に現在佛たる釋迦佛を加ふるに見て明かなり。

佛陀直説の過去佛は果して幾何の數なりしや、釋迦佛を除ける六佛を以て佛説と見做すべしや否やは不明なるも過去七佛は南北同傳にして恐らく原始的のものならん、梨俱吠陀中に七聖(Kutse, Atri, Rethé, Agestya,

Vasistha, Kusika, Vyasava)あり。波羅門は其の後裔なりとす。又六聖 Gitsamada, Visvamitra, Vamadevi, Atri, Bharadrāja, Vasistha あり。後ち波羅門書の時代に亦新しき七聖を數ふ。Gutama, Janadagin, Kasypa 等なり。然るに『長阿』阿摩晝經(一六九)に十二諸大仙波羅門の名を列せり。曰く一阿陀摩二婆摩三婆摩提婆四鼻波密多五伊準漸悉六耶婆提伽七婆婆悉吃八迦葉九阿樓那十瞿曇十一首夷婆十二損陀羅是れなり。前者と比して類名と覺しきもの四五に過ぎず。又『增阿』方品(一六二)に古仙諸避支佛の名を擧げたり、阿利吒婆利叱、審諦童、善觀、聰明、無垢、帝奢念、等是なり。又『增阿』等法品(一六二)には過去久遠に七梵志あり、國王となり釋梵四王を願ふ云々としへり。而して過去六佛は毗婆尸(Vipasy)勝觀)尸棄(Sikh)火)毗婆婆(Visvabhu)徧一切自在)拘樓孫(Krakucchinidali)所應斷或は)拘那含(Kanakumuli)金銀或は)迦葉(Kasyapa)飲光)なり。(原名の少異に就きては Dharmasiddhanta (note p. 35-37) に原本七佛經、巴梨佛陀史傳并に Hemacandra を對照せり。漢譯經亦多少の異りあり。此に引ける義譯は名義集(南十三)によりて擧げたるも、長阿大本經には以不阿故名毗婆尸といひ、又は登山觀四方故號毗婆尸といひ、七佛經には多聞滿世間是名毗婆尸といふ)

以上に列舉せる中、共通の名稱は迦葉のみ。但し七聖中の瞿曇は釋迦の俗姓にして十二大仙中の阿樓那^{アムラナ}は尸棄佛の父或は其城名なり。避支佛名の善觀は毗婆尸佛に類せり。『法華經』(一五二)『涅槃經後分』(應塵還源品)『大論』(注三)尸棄は梵天の名なり。『增阿』の序品に(一六)優多羅比丘が過去七佛によりて其の名を變じて伊俱、目伽、龍、雷電、天、梵、等と稱せりといふは過去佛と神話との關係に推歩せしむるものあり。但し之を以て過去六佛或は七佛は梨俱吠陀の七聖若しは當代所傳の諸仙に起原すと推斷するは早計に失

す。グリンエデル氏は波羅門の七聖に關係あるが如く記せり(佛美)。然れども六佛が果して何れより出てしやは不明なり。吾人は唯だ佛以前に已に類似の思想ありしを知らば足れり。

南傳『本生經』の序説並に『佛陀史傳』中には二十四佛を數ふ。北傳中には二十四佛を一組にせる者なきが如し。Bhūgavata Purāna 中には毘溼拏に廿四化身ありといふ。ダット氏は之を佛教二十四佛に出つといへり(II 29)。而して此等諸佛は番々出世して前佛の法燈を繼ぎ、世間の暗冥を照すといふ。此れ明かに七佛思想の後に添加せられしものにして、此の外其以前の諸佛を數ふれば頗る多數なり、特に北傳大乘の經典にては更に其數を増加せり。ホチン氏は『梵文普曜經』等により百四十三佛を數へたるも、是れ唯だ一部ののみ。勿論諸經によりて其の數不定なり。同一教義に成れる『無量壽經』諸本に於てすら、『梵本』八十佛、『漢譯』卅六佛、『吳譯』卅三佛、『魏譯』五十三佛、『唐譯』四十一佛、『宋譯』卅七佛あり。『過去千佛名經』の如きは千佛名を列せり。但し是等は唯其の名を列せるに過ぎず。實際に敘述し崇拜せられ、南北一致一切經典共許の過去佛は六佛にして、特に賢劫四佛は印度并に錫崙に於て其遺骨地を傳へ(法顯傳。僧伽藍國沙祇園(致六三))。瞻波大城(致六三)摩伽陀者閻闍山(致六三)は四佛の遺跡にして就中達觀には迦葉佛僧伽藍ありとの傳聞を載す。西域記(致七〇)迦葉本生城を載す。其他ハータール氏佛敎概論(8)見るべし。又現存遺物につきては『佛美』(8)等見るべし。迦葉佛は就中崇拜せられたり。燃燈佛(錠光、燈光、燈作、Dīpaṅkara 提和竭羅)は時に過去佛の代表とせられ、(十住毘婆娑論)又南北共許の過去佛にして、法顯は那竭國を以て釋迦佛燃燈佛に值遇せる地點なりとせり。(西域記)第二那揭羅國の條下同傳。此國は西北の邊境にして今のアフガン地方なり蓋し過去佛中比的痕迹判明の佛陀なり。

過去佛は斯の如く其數を増加し、時に信仰の對象となりし者あるも、しかも當初成立の旨趣を失はず。元來過去佛は前に已に云へるが如く、佛陀自信の保證なるが故に常に釋迦佛と離れず。本生の菩薩が值遇諸佛供養讚嘆に對し、之に授記記剎の保證をなすにあり。蓋し佛陀内心自證の具體的説明は能く當初成立の原由を表はせり。要するに過去佛は如何に想化せらるも他佛本生の授記佛たるに止まり。三世諸佛の一として歸敬を表するの外、餘佛より獨立に其の信仰を生ずること極めて稀に、常に間接にして直接にあらず。偶々南方佛敎に於ける崇拜は、釋迦彌勒を除きて他の佛菩薩なきが故のみ。『十住毘婆娑論』の如き七佛讚嘆の偈文あるも唯だ是れ儀式のみ。其の信仰の内容は殊に取りて論ずべきなし。蓋し過去佛は畢竟過去佛にして現身佛陀に入滅を認めたる佛徒は、更に其の以前に入滅せる諸佛に活ける信仰を繋ぐ能はざりしは寧ろ當然の歸結といはざるべからず。但し過去佛は同一乘道の佛陀の證悟に具象的説明を與へしものなれば、若し其の成立の旨趣を追求すれば佛陀覺道の永遠を暗示し、應がて法身如來に想到すべき楔機たるを失はず。此故に『增阿』序品(一)には阿難が增一法を以て優陀羅に附屬するは、優陀羅は過去七佛の法を持するが故なりといひ、『長阿』大本經には毘婆尸佛の因縁を説きて僅かに一紙(縮藏)に十數回「諸佛常法」の語を列ね、且つ『增阿』序品十不善品等過去佛説話には多くは未來佛に關説し、三世諸佛一貫の思想を表はし。那先比丘經には過去諸佛種姓等合せて四異あるも、佛陀は一なりといひ(巴梨阿) 經同傳又過去六佛は釋迦の前生なりとの傳説あり。現に『增阿』方品(二)の如きは佛陀が過去佛の古跡繼紹を述べ、次に「如來身者眞法之身」なりと

云へり。此故に禪家の如く佛陀自證の系統を辿るものは、其傳統中に又過去佛を逸せざりき。(『法華傳』)

(參) 未來佛

未來佛亦一にあらざるも其原始的にして、又最も普通なるは彌勒なり。彌勒は佛と同代なりしや否や。佛在世の時に實有の人ならずとするも、佛の説法中には已に存せしや否や。若し佛の説法中にありしとすれば説話の内容は如何なりしか。又去つて八相成道の思想と彌勒とは如何なる關係あるか。何故に未來佛として彌勒信仰を生じたるか。或は轉輪王との因縁、或は大乗經典との關係、從つて諸佛菩薩との關係、二乗と三乗との關係、彌勒誓願の由來等凡そ彌勒の研究は極めて趣味あるものゝ一にして、延いて波羅門諸教と佛敎との關係、小乘佛敎と大乘佛敎との關係等に多少の光明を與ふものあり。今は唯だ佛陀論變遷の關鍵として、其必要なる諸點のみを記するに止めん。

先づ彌勒は Maitreya, (Meteya) にして漢音譯に梅怛麗藥、味怛履曳或は每坦哩と稱するもの是れなり。元と Mitra の語を開き、Mitra の子孫なるを表はし、慈愛あるものの義にして、古來慈氏といふ。又の名、阿嚧多 Arita あり、(阿嚧多 Arita は正梵音にあらず。茲原來氏新佛敎九の九の九の九) 無能勝は其義譯なり。『玄應音義』には阿嚧多是字なりといひ、リス、デビツ氏は彌勒の家 フナニヤム 姓にして阿嚧多是人 ハインナキム 名なりといふ。(『佛敎』) 此他異譯少からず。或は曰ふ過去王となりて曇摩流支と稱せしが、國人を慈育せしが爲めに國人慈氏と稱すと。(『聖名』) 或は又弗沙佛の時慈定を習ひ是れより以來常に慈氏を以て姓となすと。(『彌勒上生』) 是等は彌勒が未來佛となりてより種

々其名に關係ある本生説話を試みたるに過ぎず。然るに『維摩經疏』には南天波羅門種姓慈氏といひ、『增阿』序品、等趣四諦品、(一八) 『中阿』相應品、(一五) 其の分譯『古來世時經』(一八) 等には歴史上の人物なりしが如く記せり。大乘經典に至りては此類枚擧に堪へず。但し歴史上の佛陀の弟子にあらざりしは蓋し疑ふべからず。次節に至りて辨ずべし。元來彌勒は往々にして其父母の名を襲ふ子の名 (Patronymic or metro-) とせらる。ブリハダーラニヤカ、ウバニシヤッドにはヤジュニヤヴルキヤの妻の名としてマイトレーイーあり。又マイトローヤは黒耶柔を奉ずるもの一派の名たり。摩奴法典中人種の起源と四姓の階級とを記述せる中に毘舍種より出てたるものに Maitra 姓あり。又 Vaidaha より出てたるものに Maitreyaka 姓あり。(Dutt II) Mitra を姓氏中に分有せるは歴代高僧中に少からず。(婆須密、佛陀密多、難提密多、勝友、寂友、(以上印度) 弗利密多、(西藏) 彌陀山(15)等『南條口録』Appendex) 固より馬鳴婆須密等には同名異人少からず。『法顯傳』によれば摩迦陀國に文殊師利と稱する大乘師ありしといひ(跋六) 十世紀頃西藏カダムバ派に燈作妙智 Dīpankara Sijūna あり、提想竭佛(燃燈)と同名なり。今卒爾に斷案を下すは聊か憚あるも蓋し南天波羅門種の説は恐らく某の人名と結合して實有の人とせられしものならん。マイトレーヤの類語多く Mitra に関するものあり。(Maitrell) 姉崎教授は曰くミトラは非シヌヌと同體なる太陽神にして、又其同時出現の壞伽 Smita は非シヌヌの右手に提ふる螺の名なり共に非シヌヌ神話の材料に基けりと。(『現法』) とにかく慈愛を名とせる彌勒を期待し、其敎化に浴せんとの希望を生じ來りしは、猶太敎若しくは基督敎のメシアの思想と對應して其使命多少類似の點あるは奇と謂ふべ

し。現にグリーンエデル氏は彌勒は佛教のメシアなりと云へり。(『佛英』)

立名の起源は如かく重要ならず。縱令彌勒はミトラの轉化に出てしとするも、そも佛教教團が何故にかゝる佛陀を未來に豫期するの必要ありしか。暫く基督教に於ける基督を見るに、彼は此世に於ける肉身としてはダビデの後裔ヨゼフの子なりと雖も生前の靈によれば神の子なるが故に、(Horn.) 現身は縱令十字架上に露と化せしも、そは唯た贖罪の爲めにして茲に永世救済の約は成れり。而して又神の威靈を體したるが故に其復活の信仰も亦た容易なりき。已に復活し終りて永世神側にあるが故に時々出現の慰安者(Paraclete)の信仰以外には基督に代はるべき他の救主を要せざりき。然るに佛陀の場合に於ては事彼と異り、已に漏盡の佛陀が一度無餘涅槃に入るや、碎身の舍利を止むるの外は亦再び生を受くるを得ず。縱令迦葉の會葬に光明を現じたるも佛身闇維し終れば茲に再現の望は絶えぬ。さりとて禪定佛未だ起らず、三身の考察未だ存せず。要するに原始佛教の考にては已に無餘涅槃に歸したる佛陀に再現を望むを得ず。偶々曇無讖傳に載するが如き滅後釋迦佛來現の思想は法身常住の考案成立の後にあり。しかも佛陀を慕ふの念は切々去る能はざるものあり。此に於てか如來世に在まざば百千里を遠しとせずして問訊すべしとの至情は(『天』)轉じて新佛の出現に之を待つこと寧ろ捷徑なりしなり。過去佛の原形が已に佛の直説にありしとすれば未來佛も同時に佛の直説に基くものならん。但し佛が果して彌勒の名を以てせしや否やは不明なり。

彌勒出現の時期に就きては所説一準ならず或は人壽八万四千歳の時なりといひ、或は單に未來久遠とい

ひ、(『中阿』^{天五九})或は一億四萬歳の後なりといひ、(『大經』^{天十})或は九十六億年といひ、(『涅槃經』)或は單に未來といひてその年時を明記せざるあり。南方傳には滅後五千年といふ。(『リステビオン』)而して其出現は多くは過去佛の説話と同じく即ち佛傳の縮寫に過ぎず。鷄頭城出現につきては下淨土論に譲り、茲には増阿十不善品の文に就きて佛傳との對照をなし、彌勒と釋迦佛との關係を論ぜん。

一代佛教は悉く釋迦佛に關す。現佛に代るべき新佛が其傳記に基きて説話を構成するに至るは、自然の徑路なるも其間多少の相違あり。現實歴史上の佛陀を理想化するに當りて先づ如何なる構想を試みしか。『増阿』十不善品は十不善を説けるものなるが故に、初めに十不善の果報を説き、次に七佛禁戒のことを述べ、次に未來彌勒佛の出現を説けり。八相成道に關しては明確なる記載なきも其豫想に成りしは明かなり。而して托胎、出家、成道、説法、涅槃、悉く佛傳の縮寫に過ぎず。唯だ其異なるは時と所と人物の名が神話的に點綴せるのみ。畢竟基督が耶穌に似たるが如く彌勒は釋迦に類せり。但し降魔相に至りては釋尊の場合にありては、魔波旬が女身を示し或は威力を示して嬖亂脅迫せしも、彌勒の記事に至りては魔大將は反つて、如來の出現を以て歡喜踊躍し、且つ八萬四千天子を率ゐて、説法の會座に集り法化を助くといふ。又梵天勸請の記事なし。これ一は彌勒出現當時は人々利根にして其土は殊勝なるが故に、魔の妨げあるは國土の好世なるに適せざるを以て除けるものなるべく、又釋尊の候補者にして釋迦が已に降魔し終りたる後に遺法繼承の豫想を含める佛傳の翻案たるが故に、降魔と勸請とを要せざりしならん。(『什譯』下生經等彌勒に關する經典頗る多く中には勸請も降魔の記載もなきに非るも頗る前に過ぐ)

彌勒成佛の説話には多く神話を混ずるも其根本は現佛に代るべき新佛の翹望に基けり。此故に彌勒の信仰には遺法繼紹と教法維持との兩思想を附帶せり。諸經に彌勒當來成佛、説法、教化を説くや常に釋迦佛所説と異なるなしといひて、〔長阿含九三三、增阿一三三〕 繼紹の意味を明にし、更に之を具象化して迦葉が毗提村に入定して彌勒の出世に僧伽梨を傳ふとの説話を生ぜり。〔增阿一三三、付法藏因緣傳九三三〕 大論〔維四三〕等〔クリユウ〕によれば迦葉入定所を鷄足山といふ果して然らば彌勒の鷄頭城と何等かの關係あるもの如し。但し此説話は彌勒が佛在世時の人ならざりしを證するものとす。何んとなれば彌勒にして佛在世の人なりしならんには、迦葉を待つて其傳承を明かにする必要なければなり。説話往々にして事實を漏すものあり。而して迦葉の此説話は袈裟に假りしも更に佛陀の遺鉢昇兜率天の説話によりて補處繼紹の事實を構想せるものあり。〔法華傳一政六三〕

又小乘經典中にありても六度の説法は特に彌勒を對者となし。〔增阿一三三〕 『增阿』序品の如きは、三藏を阿難に附屬し、方等大乘諸雜藏を彌勒に囑累せり。大乘經に至りては、所々に彌勒を擧げて經典の流通を托せり。恰かも小乘經典に於ける阿難の如き位地にあり。蓋し附屬と囑累とは元と教法維持の思想に伴ふ。然るに大乘經典は其新出の年代は不明なるも、其方等廣説を主として、神話的なる説法は明かに原始經典に異なる。此に於てか神秘的に其新出の理由を説明するに至る。恰かもよし再現佛陀の信仰あり。此に於てか大乘經典の保護者維持者を彌勒に於て發見せり。更に之を布演しては教法の繼紹者たると同時に其保護者とせられ、又従つて彌勒問訊の思想と其所説の經論とを生ずるに至れり。無着時代、彌勒と大乘教とは直接關係あり。

り。『瑜伽師地論』等其所説なりと傳へ、〔南傳目錄一Appendix〕 又南傳に佛音は彌勒の再來なりとなすは〔印考一〕 幾分此思想を伴ふ。然るに小乘經典の附屬者は佛在世時の直弟なりき。此に於てか彌勒は又佛在世の人とせらる。大乘經典は實に其繼承と保證とによりて維持せらるゝものと信ずるに至れり。此の如く彌勒は佛陀に關係あるが故に同時に佛在世に何等かの由縁を有せしものと見たるは又自然の數なり。之を例するに彌勒と同じく未來佛たる師子如來の前身は、婆須密〔Pisim〕に關係ある者〔なるは前に首へり〕にして、之を佛在世の人となせるが如し。〔婆須密所集論序一藏一〕 彌勒が佛在世にありしとするは恐らくは此かる徑路によりて、後に附加せるものにはあらざるか。要するに彌勒は『阿含』中に既に其思想の成立を見、又南方佛教に其信仰の存するに見るも彌勒は大小乗の中間に位し、大乘經典の保護者とせらるゝ以前に發生したりし思想なること秋毫疑を容れず。彌勒は教法の繼紹者として、佛陀に關係あるが故に、佛陀の變遷に従つて彌勒亦其面影を異にす。〔阿含中の彌勒は教法の繼紹者として、佛陀に關係あるのみならず。元と入滅の佛陀に代るべき、活きたる救濟者の再現を望むの情に出でしを以て、勢ひ現生の宿因によりて未來彌勒佛に値遇せんとの信仰を生ずるに至るは又當然なり。抑も彌勒が當來成佛して釋迦佛有縁の衆生を攝化すとの思想は多少法華開會の趣あり。固より三周説法の順序あるに非ざるも、又其彌勒三會説法は悉く釋迦佛在世に多少の宿縁ありしものを濟度し盡すとの信仰なるが故に。〔增阿一三三〕 『法華經』の開會か『涅槃經』の招拾か何れにしても多少類する所あり。但し彌勒には釋迦佛有縁の衆生を化するに三乘を以てし『法華』『涅槃』等は會三歸一の意義を有し

前者は異時異佛の開會にして後者は同時同佛の開會を差とす。若し『法華經』を以て第二の開會とするを得れば彌勒の成佛は、佛教教理史上第一開會と見るを得べし。已に教法の繼紹と保護とを明にせる以上は三世諸佛同道一貫の理は自ら其意を含み、三世諸佛は多く一所に説かるゝことは既に前に述べたり。古來三世諸佛を八佛像となして表はせるものあり（『シユラギントワイト』）其結果釋迦彌勒共に同一覺道の佛陀なるが故に、其出現の前後を説明せんとして、釋迦は彌勒成佛に對して三十劫超越の説を生ぜり。（『增阿彌陀經』及『一四〇』）八（『雜品』及『三〇』）其他諸本生經中（『佛說彌勒經』）

彌勒は過去佛に比して一層濟度衆生の信仰の密着せるは事實なり、兜率上生の思想の如き然り。蓋し其の出現の時期遙遠なるがため値遇諸佛を急ぐの情より出てしものとす。されど『阿含』中には此思想明かならず。小乘經中には間々此思想の存するのみ（『佛說彌勒經』）然れども是れ寧ろ後期の發達に屬す下に至りて辨ずべし。

以上は彌勒を以て未來佛を代表せしめ、其成立の旨趣を明かにせり。然るに未來佛は單に彌勒のみに限らず。先に云へる婆須密の師子月佛の外、更に柔順、光煇、無垢寶等あり。『增阿』四十五にては彌勒以下それ（過去七佛と因縁ありしことを記し、（『法三』）更に『賢護經』には賢劫千佛の名を列し、拘留孫、舍牟尼、迦葉、釋迦文、慈氏、師子、焰柔仁、妙華、善星宿、大豐多等の諸佛名を以てせり。（『法四』）然れども是等は過去諸佛と同じく、唯だ其名を列するのみ。要するに過去佛は佛陀の自覺に基き、彌勒は其覺他を代表し。過

去佛は追懐に發し、彌勒は希望に起り。滅後の佛教は彌勒を假りて前途に洋々の光明を認めぬ。現存遺物中彌勒は常に少壯なる容貌を以て表はさるゝが如き（『佛說』）其の適證とす。此の故にリスデビッツ氏は曰く、佛滅後佛教教團が罪惡不信の世界を夷らげ勝利の叫びを再びせんがために、慈悲の教義を標榜し、其を人格化して未來慈悲佛彌勒を生ぜりと。（『佛說』）『中阿』説本經（『法五』）の別譯たる『古來世時經』（『法八』）に世尊の彌勒讚嘆の語あり「施柔順廣大之慈、欲救無數無極之數」といひ、『增阿』等趣四諦品（『法一』）には彌勒を讚して慈心勇猛精進となし、彌勒と慈悲との結合は『阿含經』中の所々に存し、『彌勒大成佛經』等の大乘諸經典は固より言を待たず。リスデビッツ氏の語蓋し當らずと雖も遠からず。

第三章 菩薩。本願

（壹） 本生譚

以上過去將來に佛陀を認めたるは現實佛陀の自覺覺他の悠久を語るにあり。而して其形式は一に本生譚による、本生文學は實に佛教文學の一特色にして、本生譚と佛陀觀とは離すべからざる關係あり。特に本願思想と密接なる關係を有せり。先づ本生譚の何物たるか及び其起原に就て述べん。抑も佛陀教化の特色は實行主義にあるは前に述べたりしが如し。従つて理論よりは實行に力め、徒らに智解を得て邪見に陥るよりは少解を以て行本を確立するを要とせり。此故に其教を設くるや、直截簡易にして具象的説話多く、事々に譬

喩或は因縁、或は古譚或は事例の何れかを混ぜざるものなしといふも可なり。

爾て思ふに、印度は頗る談柄に富める國なり。オルデンベルヒ氏は印度人を自して「世界の譚家、泰西談話の供給者なり」といへり。其思想の富豊と獨創の能力とは、千歳の下、陸離たる光彩を放つて同アリヤン民族間に嶄然頭角を露はせり。彼の婆羅多大戦争譚、及び羅摩武勇譚の如き其成作は固より後世にありとするも、其由りて來る所遠し。此故に其構想の幽大と豊富とは幾多の談片を生じえたり。此豊富なる思想の産物として本生譚あり。抑も寓話古譚は何れの國にありても上下一般に流布し其國民は孩提既に之を聞知し、襍褌能く之を記誦し、其國民とは密接不離の關係を有す。佛陀の取りて以て説法の補助となし、譬喩となせしものは多くは此古譚なり。(本生談中。序Aññavāṇa 結 Paṇcuppanna。) 其思想や單純素朴なりと雖も、之を聞く歡樂

盡さざるものあり。佛が此古譚を用ゐたるは洵に利用其宜しきを得たるものにして、特に無智の俗人を教化するに幾ばかり利便多かりしかは、現存の經典を一讀せば思ひ半ばに過ぐるものあらん。但し佛の之を用ゐるや寓意を潤飾するに悉く佛教の教理を以てし、所謂換骨脱胎其眼睛を點するは必ず自家の教義を以てせり。抑も南方所傳に本生經あり(其他リスデビッソ氏「本生經」の序に經律二藏中に存する) 漢譯佛典中にては「生經」、

『賢愚經』、『五百本生經』、『雜譬喩經』、『百喻經』、『雜寶藏經』、『撰集百緣經』、『菩薩本生鬘論』、『六度集經』及其一部なる『九色鹿經』、『太子沐魄經』、(二部) 『太子須大拏經』、『佛說前生三轉經』、『菩薩投身餽餓虎起塔因緣經』、『師子素駄婆王斷肉經』等投擧に違あらず。『法集要頌經』は「法句經」を解するに一々本生并に事縁を

以てせり。其他四阿含を初め大乘諸經殆んど到る所に散見せり。南北諸傳多少の相違あるも共に同一源より發したるものとす。(太子入海求法品(28)と大施抒海品(宿八五五)。雲馬品(29)と) 概して南方本生談は活躍し、且つ其説話の數量も五百五十の大數を數へ、英譯は大冊四卷を成せり。然かるに北方本生經は活氣に乏しく、又同

一説話の重複轉化多く、諸説話を合するも到底南方の豊富なるに比すべからず。紀後五世紀西域の摩訶乘、(南條目錄) 五百の本生譚を譯せし傳説あるも、開元錄に闕本の旨を記せり。但し北方のは大乘教理を混するもの多し。

佛教經典の分類は初め經律二藏に過ぎざりしが、後に三藏となり五藏となり、教法と傳説とは部派により其説を異にし、説明の摺入と解釋の改變とは遂に言語詩形にも幾多の變遷を與へ、從つて聖典の内容が擴張せらるゝと共に遂に分類の名目も九種或は十二種を生ずるに至りぬ。所謂修多羅、祇夜、和伽羅那、伽陀、優陀那、伊帝目多伽、闍多迦、阿浮達磨、毘佛略は九分教にして、之に尼陀那、阿波陀那、優婆提舍を加へて十二部經となす。(大論律二部(成實) 論(毘婆沙)等參照)

そも九分教十二部經なる分類は頗る混雜を極め内容と形式とを錯雜せる任意の名目にして、固より分類の方法としては成効せるものにあらず。祇夜と偈他とは其差時に認め難く、法句、本生、因縁、譬喩の如きは別出して編輯せられたるにも拘らず、祇夜、偈他、受記の如きは遂に經文の外に獨立せず。而して雜然たる此分類の或者は固より始より存せしものもあらん。又後世に出てたるものを附加せるものもあらん。そはと

にかく此等十二部經なる分類中に本生譚は如何なる位置を有するか。抑も譬喩本起及因縁とは往々彼此錯雜して確然たる分界の認め難きものあり。惟ふに分類の當初にありては比較的分明のものありしならんも『大論』(註二)の定義の如くんば譬喩、本起、因縁は本生と其分界極めて曖昧なり。此に依りて同一の說話を時に譬喩として用ゐるをうべし。(『百論』(註)『雜譬喩論』の中には本生譚の原材料の混ざるもの多し) 又本起として之を説くをうべく、(『大論』中の本起の例として擧ぐる所の五百の沙門長夜の迷をなすは毘婆尸佛時に其因縁あることを説き、五百本生經(藏九) 又本生譚は其形已に因縁談なり。且つは弟子の本生と本起とによりて成る其他南傳『阿多迦』中にも是に類するもの多し(藏九) 又本生譚は其形已に因縁談なり。且つ『大論』に尼陀那を解するに「説諸佛法本起因縁」といひ、『成實論』に伊帝目多伽を解するに尼陀那を解せしと同じく因縁なる語を以てして「是經因縁及經次第」といひ、又彼の南傳『本生談』の序文たる *Nāgārjuna* は已に本生談に因縁なる語を以て稱せり。要するに是等本生と譬喩と因縁と本起とは同一の原材料を以て諸方面の説相をなすをうべし。加之授記は又本生と離れず、本生所値の過去佛は殆んど授記をなす爲めに出現せるの觀あり。又漢譯佛典にありては本生は多く授記の形式を取れり。

由是觀之、本生は十二部經中極めて重要な位置を有せるものなり。従つて佛教中に於て如何に本生談の多きかを知るをうべし、獨り經典のみならず、法顯の記する所によれば宿呵多國、毘陀術國、那竭城、師子國等は菩薩本生の遺跡地となし、竺刹尸羅(飛頭)の如きは其地名は菩薩本生の行爲に因めりといふ。(藏六)斯くの如くにして本生譚と佛教との關係は教理上に於てはしかく重要ならずとするも其一般信仰の上には拭はんとして拭ふべからざる深き印刻を貼せり。其起原や古く其關係や廣し。本生文學は佛教佛陀論發展の上

に於て亦深き根底を有する所以知るべきなり。

本生譚は元と佛陀智徳の積集を語るものなりと雖とも、大乘教にありては全く化他度生の意義を有するに至れり。此故に大論には「昔菩薩無量生多有所濟是名本生」といふ、是によりて本生經歴と化他誓願との密接なる關係ある所以亦知るべきなり。

本生譚は佛陀を事實上に於て悠久にせり。理論的に法身常住の思想を生じ、久遠實成の本覺佛を語る前に、佛陀の補處たる菩薩を假りて具象的に久遠劫來の覺者たるべき思想を胚胎せり。其表面は神話古譚に覆はるゝも其裏面を觀察し來れば此等神話や古譚は畢竟果位の佛陀を因位に移して自覺覺他の二行を修せしむる材料となりしのみ。蓋し現身佛陀は一沙門なり。財富なく俗權なし、なさんと欲して爲す能はざりしもの多々、之を因地に移して其心事を餘蘊なく發表したるものは本生譚なり。説話凡て具象的たるを免れざるも之に理論を附せんか、忽ちに大乘思想たるをうべし。古談に結合するに現在の因縁を以てせる頭腦は、忽ちにして古譚を脱して之を佛教化する才能を缺くものにあらず。神話は宗教の母なれども、一度其子が生成し終れば母たる神話は其影を潜む。無限の慈悲と無限の智、換言せば六度の行と久遠の思想とは、本生談に通ずる根本思想にして、所謂大乘の教理を極めて具象的に表はしたるものと謂ふべし。彼の釋迦彌勒成佛の前後次第を説明するに『增阿』は釋迦の精進に歸し、(藏三)『大論』は弗沙佛の勸進によるといひ、(註三)『彌勒本願經』には兩者の本願によるといふ。(地十二)其何れにしても二佛の悠遠と従つて其關係の説明には常に本生談

を以てせり。阿含經と大乘經典其術語と其思想とは少からざる相違あり、若し此相違を通ずる橋梁は固より多々あるべしと雖とも種々の佛陀傳と本生經とは確かに過渡の一橋梁たるを失はず。蓋し『法華經』、『涅槃經』、『無量壽經』、等大乘諸經典が其根本觀念を寓するに常に本生談を以てし、諸大乘經中殆んど本生説話を混ぜざるものなきに見るも明かならん。

本生譚が佛教史上に重要な位置を有する此の如し。果して然らば本生談は佛在世中に已に存せしものか如何。更に歴史的に其痕迹を搜索せざるべからず。蓋し大乘佛教の起原に多少の光明を與ふものあればなり。以下リスデビッツ氏の『本生譚』の序を抄譯せん。

現存本生經の各部につき新古の證明をなす如きは殆んど不可能の事に屬す、今オルデンベルヒ氏が經律成立の年代を推定せしものに基き、(Muller, 1885) 此の本生譚の起原を探るに本生譚は獨り本生經中に存するのみならず、藏經中の所々に散見せらるゝに見て、恐らく此れ等は毘舍離會議以前に已に存せしものたるは確實なり。(此會議の年代は紀元前三百五十年の三十年前後即ち概算佛滅百年とす) 蓋し此會議は僧團規律の寬嚴につき上座大衆の二部を生じ、各々別處に合誦をなせり。而して錫崙傳中の佛陀史傳は此會議を記せる最古のものとする。今其記録によれば大衆部の徒は五尼迦耶を破り、聖典の眞精神を放棄し、婆離婆羅、阿毘達磨、波致參毘陀、尼提婆、閻多迦の一部を意に任せて改變せりと。惟ふに佛陀史傳は紀元後四世紀以前と見るをえざれば成立前七世紀の事を記せるものなれども、之を措いて又他に最良の證典なし。少くとも錫崙傳に従へば此會議の時已に本生經なる書類の

存せし事に應用せらるゝ證據なり。(序の註に曰く佛陀史傳 Cataputta は比較的後代のものとすも、其本生の説話) 且つそれサートンチ、アマラヴチー、バルフォートの彫刻及び其題目に見るに本生談が紀元前三百年以前已に存せしものなること更に動かざる根據にして當時既に閻多迦の名に於て普通に流行せるものなることを示す。

且つ又佛教九分教の分類は上座大衆の二部に存しその分裂以前に存せしものなること明かにして由りて以て本生譚の成立は極めて早きを知るをうべしと。又曰く何時如何にして現存

本生經の如く悉く佛の前生中の事實となし、特に其を整頓して十波羅蜜を時代によりて分類する如くなりしかは今明確に其進展の徑路を記すべき材料なし。とにかくに佛陀が過去に自己と同一の佛陀ありしとの自信は已に存し他而當代一般の人生觀より推及するに、輪廻の思想は佛教以前より存する所なれば、現身佛陀の入滅と共に、佛陀前生に深き注意を拂ふに至りて、本生談は益々發達し時代によりて本生の行を確定するに至れり。(Linnell の佛教史によれば馬鳴は皆て十波羅蜜の各一波羅蜜を以て完成すべき著書を書きたりしが未だ成らざるに三十) (四歳にして没せりといふ。現に Carvindhra (チャリヤ) は十波羅蜜中先きの二には十生を與へ後の八に十五生を與ふ) 之を要するに第三四世紀頃に佛陀の本生事蹟として確定し、紀元後第五世紀頃に現存の巴黎本生經の形をなしたるものならん。而して其錫崙傳來に關しては第五世紀に著者は不明なるも其手によりて巴黎本生經に譯せられたり。其以前はシンガリス語にて傳へられ、偈頌は其儘にして譯せられざりきと。(抄文)

九分教が毘舍離會議以前にありしや否や其他氏の所説其儘には適用するをえず。且つ以上は主として南方本生譚の來歴なるも依りて以て佛教本生譚の成立整頓の大畧の模様を察し得べし。氏は又『本生談』序分中に

本生譚の傳播を叙し、此本生談は單に佛教文學たりしのみならず、大叙事詩を始め五訓書、嘉訓等にも其説話を假りしもの少からず。且つ其一度西傳するや、ベールリウス、フェドラスの詩中に入り、又バーラーム、ヨサファット物語(基督教中)となり、基督教に傳はり文藝復興に影響し、今やイソップ物語として西方兒童が不斷の娯樂となれる徑路を詳述せり。(附本「XXIX」併せて参照)

デビッツ氏は本生談の根本觀念として宿業と慈悲との二を擧げたり(本生)。本生談は本と輪廻の觀念と離るゝものにあらず。佛陀修行の動機は先づ此輪廻を脱せんとするにありしは成道の偶願に見るも明かなり。而して菩薩多劫の修行と輪廻を厭ふの觀念とは多少の矛盾を含む。抑も一切衆生皆本生あり。唯だそれ佛陀の本生は等しく輪廻の間に彷徨するも常に其束縛を脱せんとするに力め、恰かも輪廻の渦中に投じ其廻轉に従ふも暫くにして其渦外に逸し去らんとするが如く輪廻以上に超然たるものあり。唯最初の誓願力によりて多生劫々の修行を要す。然るに羅漢辟支佛は生死を超脱せり、又輪廻を受くべきにあらず。是に於てか未來佛たる本生の佛陀は羅漢辟支佛の名を以てせず、常に菩薩の名を以てせり。後には無住所涅槃の語によりて菩薩本生に於ける輪廻の意義を説明せり。蓋し本生の修行は大なる希望と大なる誓願とに基き十波羅密なる智徳の圓徳を修し、佛陀の地位に達するものなれば實に多劫生死の宿因によらざるべからずとの豫想を含めり。此故に或時は動物となり、或時は神格をとり、同じく人界にても上位に生れ下位に生れ、其智を磨き其行を勵み、常に利他の行爲をなす。今南方本生經中に於ける菩薩前生の受身を見るに仙人として八十三

回、國王として八十五回、波羅門として二十四回、乃至貴人として、學者として、或は大工となり、或は左官となり、盜賊となり、漂泊者となり、學生となり、鍛工となり、要するに人類の生を受けたること三百五十餘回。(位置の低きものに生れたるは少なし) 動物として生れたるは獼猴の十八回、鹿の十一回最も多く、師子の十回、鴛鴦の八回、象の六回等之に次ぎ、犬の一回最も少く、總て百餘回、梵天或は幽鬼或は樹神として四十八回。蓋し五百五十の本生は一に最大理想の到達にありて輪廻のための輪廻にあらず。此中佛教の努力主義と理想の偉大と化他救済の因て來る所以とを見るべし。而して法藏發願の形式は實に此本生譚に基けり。

(貳) 本願

本生譚は菩薩を離れず、菩薩亦必ず本生の願行あり、以下誓願思想を考察せん。誓願 Prañidhāna には種々の意義あるも祈禱欲求或は誓約の義 (Nicholai) 是れ誓願の原意にして、或希望を懷き之を遂行せんとの熱情を意味す。「梵文無量壽經」第六章には殊勝の願といひ、第七八九章には別願といひ、第十二章には宿願といへり、(梵文「161」 Prañidhāna の分解あり) 同經に於ける誓願の意義によれば、誓願する (Prañidhā) ことは願力 (Prañidhāna) を生じ適當なる修行によりて必ず之を遂行し、所謂願成就 (Prañidhāna-sampada) をうるものとなす。

釋尊説法の根本教義は、「轉法輪經」に謂ふ所の苦樂超脱の中道、四諦、八聖道、十二因縁にして、原始佛教の人世觀世界觀亦此外に出でず。佛陀五十年の長生涯其間種々の教説ありしなるべきも、要は如上の教義

に歸す。阿含の所々に「志願求解脫」といふものは佛徒の所求にして所歸なりき。淨土教にありては淨土を所求とし、彌陀を所歸とするも原始にありては未だ他方淨土の考察なし。此故に「一切諸行、皆悉無常、不恒不安、變易之法、汝等比丘、當修厭離、求樂解脫」といふ(雜阿含三十四)其の所謂求樂解脫の解脫は此無常生死の大海を出づるにあり。他方淨土に解脫の歸托を求めんとするにはあらず。又「一切行無常、是則生滅法、生者既復滅、俱寂滅爲樂」といふ(於三三及三五)其寂滅爲樂は「小阿彌陀經」の「但受諸樂故名極樂」の思想とは遙かに異なるものあり。彼の「増一八難品」(於三)に「若茶羅繫頭比丘尼が如來の將さに涅槃に入らんとするを聞き、我出家學道所願を果さず、然るに世尊我を捨て、滅度す、唯だ願くは微妙の法を説いて其願を果さしめよといふも、是れ學道によりて證果をえんとするにあり。原始佛教に於ける誓願は此種の發心求願なりき。固より各人機根一類ならざるが故に現生に證果をうるあり。預流となり、不還となり、一來となりて、次生若くは多生に證果するものあり。此故に誓願も人々の階級に従つて各異りあるは勿論なるも(於五)其發願來生の證果を求むるは生死樂着の繫縛を脱するにあり。(於六及七)後生極樂の思想にあらず。其他彼の「増一馬王品」に出家の五食を説ける中に願食あり。されど此願食は出家は涅槃を求めんとすの誓願あるが故に在家の四食を缺くも可なりといふにあり。又開放牛品には誓願沙門修行沙門あり、誓願沙門とは謂ゆる悲増の菩薩に類し、少くとも修行誓願は智増悲増の菩薩の原形と見るをうべし。然れども其誓願沙門を解する未だ全く原始佛教の圏外に出でず。其發心求願は寂滅爲樂を希求するにあり。化他誓願の沙門亦他を化し

て此生を盡し、更に後有(後生)を受けざらんとするにあり。但し既に機の利鈍に従つて得道の遲速を認むる以上は過去の過去、未來の未來、生死連續の間に本生に修行し本起に因縁を結ぶに至るべきは輪廻觀念の豫想上當然の歸結にして、「俱舍」「唯識」等に所謂引業滿業若くは願現、願生、願後、不定等の區別は未だ起らずとするも、かゝる分類の生ずべき萌芽は十二因縁循環の理によりて明かなり。此故に現世の果は過去の因により現世の因は又應て未來の好惡を惹起す。是れ即ち佛教の因果論にして、先きに輪廻思想は本生談と密接なる關係あるを述べしか、誓願と本生譚とは佛教の因果論上又密接なる關係を有す。「無量壽經」の如きは誓願を本願の義に通用せるも、本生の誓願是即ち本願にして誓願 (Prāṇidhāna) は必ずしも本生を要せざるも、本願 (Pūrvapraṇidhāna) は必ず本生譚と結合せざるべからず。然らば本生の誓願とは何ぞ。

本生は特に菩薩の前生に名くも衆生悉く前生あり、衆生の前生と佛陀の本生とは形式は同じ、此故に今廣く本願の思想を見るに彼の「増阿」「非常品」(於三)等趣四諦品(於二)「雜阿」二十二(於三)には前生に於て當來出家の發願あり。「中阿」「天使經」(於五)には閻王當來衆生をして淨信を起さしめんとすの本願あり。又彼の瓶沙王は六(五)願を起せりといふ。(於位、位佛、位佛、位法、得解の六願四分律)又「増阿」「馬血天子品」(於三)並に高幢品(於一)には八關齊法の功德を説き持戒の人所願悉く滿す又「聲聞緣覺佛乘悉成其願」といふは、發願は修行を伴はざるべからざる事を表はし。又「發心求願其福難量」といひ或は「心意清淨發願牢固」といふ。是れ發心求願の必要を説きたるものとす。又八關齊法の功德を惠施し、他をして無上正眞之道を成せ

しめんとするは、化他の意義なるも畢竟不死滅盡生有を受けざらんとするにあり。但し輪王及諸天界中に往生せんと願を起すも亦此八關齊法を行するによりて得らるといふ。其他値遇諸佛、不墮八難、六情完具の誓願は『増阿』等四趣諦品(三)にあり。就中値遇諸佛の誓願は諸所に散見せり。(四)抑も佛の本願は衆生の本願に相應せり、衆生が現法に生を盡すを以て其誓願とするあれば、佛も亦是に應ずる誓願を以て表はる。彼の『増阿』善知識品の超術(釋迦の)南方『本生經』序のスメーダの如き是れなり。然るに佛徒本願の形式は種々に變化せり、是れに従つて佛の本願も亦變化せざるべからず。蓋し等しく當來作佛の本願なりと雖ども其内容に至りては佛陀論の發達と共に次第に其の旨趣を異にせるものあればなり。彼の『本行集經』の如き、(五)『増阿』高幢品(六)「如來初生時……誓願悉成辨」といふが如きは本願思想布演の一楔子たるが如し。されど未だ他力救済の本願にあらず。

但し以上に述べたる本願は畢竟願にして行にあらず、佛敎は願行即ち動機と行爲とを明了に區別せり。菩薩は願行共に善なるも提婆の如きは生々釋尊に危害を加へんとして(七)佛世に値遇せんが爲めに六度(八)を修せり。(九)此故に此願あるものは必ず行なかるべからず。蓋し願行具足せざれば佛道を成するをえず。四弘誓願と六度とは普通に菩薩願行の綱目にして(六度については第二篇終り在家得道の下参照)名数は兎に角大小經典苟くも佛の本生には此四誓六度を含まざるなし。上に菩薩本生の受身を叙せしが以下二三本生經によりてその行目を列挙すべし。彼の漢譯『生經』、『賢愚經』中、那賴經、淨女經、墮珠著海中經、比丘疾病經、負爲牛

者經、其他五十五譬喻經中、又力王血施品、鋸陀身施品、五百盲兒往還品、勸那園耶品等施行と慈悲と救濟とを示し。龜喻經、守戒自殺品等は戒行を示し。兎王經、屢提波利品等は忍行を表し。大施杼海品には進行。野鷄經、鬘鬘猴經には智行を説けり。之を南傳に見るも亦慈心にして戒行を守り精進にして智慧を研くにあり。『六度集經』は此等を行目によりて配列せしに過ぎず。六度は元と菩薩本生の行因に出づ。詳細は信行論に譲る。但し四誓六度は阿含經中の佛徒の信行に比して特に化他主義の標榜なるは聊か注意すべく、本生を明せる諸經典が如何に慈行を重視せるかに見て明かならん。特に漢譯本生諸經に於いて其數最も多く、第一に注意を惹くは值佛供養と慈悲救済の行となり。然るに以上擧ぐる所は偶々慈悲救済を語るも其救済や一時的なり、未だ永世の救済にあらず、又多くは肉の救済にして靈の救済にあらず。他人の危きを救ひ身を殺して仁をなすも、其慈悲は唯だ僅かに一生に止る。加之救済せられたる彼は未だ必しも解脱をえたるものにあらずれば、生々世々又再び輪廻の過患中に墮せざるべからず。菩薩眞個の救済とは何ぞ。曰く肉を救ふと俱に靈を救ふにあり。苟くも菩薩に結縁せるものは生々世々必ず値ひ必ず救ひ、彼等をして無漏の慧見を生ぜしめざるべからず。『賢愚經』往還品(十)の如きは此意を存せり。此に於てか値遇諸佛は必ず授記あり。授記は永久の約束なり。此永遠の保證は一轉すれば救済の永遠を意味し、従つて苟くも佛に縁あるものは必ず之を救はんとするに至る。縱令三惡道に墮する記前をうけたるものと雖ども、(提婆の)又何等かの方(如き)法によりて天に生れ人に生れ遂には證果するものとせざるはなし。(増阿不還品於一)此の如くにして本生

とその本願及其修行の形式は既に所々に散見せり。但し之を以て彼の法藏比丘が世自在王佛の許にありて、二百一十億の佛土に就きて、其善妙廉悪の國土を取捨したる所謂撰擇四十八願に比するに、其精廉は到底比較すべきにあらざるも、根本の形式は既に成れるものとす。況んや不墮惡趣を誓願するものあり、(無三惡趣趣に相) 出家得道を誓願するものあり、(必至滅度の願常修善行の願願意) 生天若しくは生善趣を誓願するものあり、(と不更惡當す) 出家得道を誓願するものあり、(問法の願等は是より生ずべく) 生天若しくは生善趣を誓願するものあり、(生尊貴家の願供具如意) 其他供養諸佛といひ、隨意聞法といひ、又彼の頂生王の本願たる飲食充滿、妙服自然其他七寶音樂具備の諸願の如きは多く阿彌陀佛の願文に合するものあり。又本生經序説の *Manṣūka* 佛土の勝妙は其本願に基因すと云へり。(リスアピッツ) 抑も四十八願一々の項目を以て之を他に求むるに上所引の經文に相當するもの鮮からず。唯た阿彌陀佛の本願は諸種の本願思想を合集して、諸佛最勝の別願とし、就中他力救済の本願は其異彩たり。其此に到達せんためには佛陀は尙一段向上せられざるべからず。

(參) 過去佛及未來佛と本願

三世諸佛同一道の思想よりすれば、其因行も果位も固より大差あるべきにあらず。此故に菩薩の願行所謂四弘誓願と六度とは諸佛相違あるべきに非ざるも、これは寧ろ教理上の解釋のみ。諸佛は同一なりと雖とも其本願思想の附帶せる佛陀と然らざるものとあり。本願特に別願殊勝の佛陀は容易に歸仰者をうるも、本願の明かに發揮せられざる佛陀は殆んど名義上の佛たるに止まり、獨立に信仰の對象となることなし。過去佛の如き蓋し其好例なり。元と過去佛は他佛若しくは他衆生の因位を説明する佛陀なるが故に。過去佛自身が發

心誓願修行をなして佛位に至りしものなることは、推論の結果當さに然るべしと雖も、此點は明了に記述せられたるもの無きが如し。即ち過去佛は自ら誓願の内容及其完成の修行を明にするの必要なく、現在佛陀を完成せしむる授記佛本生佛たるに止るが故に誓願佛としては明かならず。換言せば菩薩としての時期明了ならず。唯だ釋迦佛若しくは他佛他菩薩が誓願をなすの保證に立ち、(按記者) 其功德を増進せしめ、(供養を) 本願の理想を示す(其佛の如くならんと) 發心を起さしむるも、是れ誓願者に對する傍觀者のみ。自ら誓願を起すものにあらず。要するに過去佛の衆生に對するや常に受動的にして自動的にあらず。一切經典中に過去佛の本願經なきに見て明かなり。縱合過去佛の過去佛ありて過去佛も亦本生修行の記述を缺かざるも、是れ現實佛陀の反映に過ぎざるが故に痕迹極めて薄し。(七佛經等には八相成道の意味あるも誓願佛たること明か) 根本が過去佛なるが故に過去に遡及して、始めて其本生を語りうるのみにして、現在と直接交渉なし。蓋し過去佛は釋迦佛の出づる迄の前佛たるに止り。釋迦佛が入滅したる後にありては諸佛同道若しくは佛身常住の思想を助長するに與りて力ありしは勿論なるも、信仰の歸托を之に求むる能はざりしは既に前に云へるが如し。之に反して未來佛は然らず。現過の諸佛に對する將來の翹望に成りしが故に未來佛の前には希望の充實せるものあり。理想は之に向ひ、歸托は之に求めんとせり。故に未來佛には誓願思想あり。蓋し彌勒は菩薩の好標本にして、原始的菩薩思想は先づ彌勒と結合せり。固より大乘經典には無數の菩薩あり、文殊、普賢、虛空藏、除蓋障、地藏、其他觀音、勢至、果ては馬鳴龍樹等印度の大徳碩學にも呼ぶに此名を以てするに至りしも、釋迦佛以外にて

とを比して本願の有無、自他二方の別を擧げたり。是に由りて彌勒と阿彌陀との兩種信仰の異別を知るを得べし。但し佛の本願は釋迦佛の本生に始まり、彌勒に附帶し轉じて諸佛に及びしものならんか。諸種の點に於いて彌勒は現身佛陀と教主阿彌陀との中間の位置を保てり。尙第參篇兜率上生の項下見るべし。

(四) 菩薩

印度に於ける佛教其始めは純一無雜なりしが、夙に數論の影響によりて早く既に分析的の傾向を表はし論師佛教となり煩鎖時代を経て、其の術語は豊富なる思想と共に頗る其數を増加し、加ふるに支那に來りて判釋解義の旺盛を見るに至りては遂に『大明三藏法數』の如きは五十卷をなし、更に『教乘法數』に至りては唯其法數を列記するのみにて優に四十卷の大部をなせり。術語の多き知るべきなり。此故に衆生機根の分類にも二乘三乘四乘乃至八萬四千の機根ありといふに至る。餘は暫く措き三乘中の菩薩は佛陀論發達上如何なる趣旨を有し、如何にして聲聞緣覺と併稱せらるゝに至りしか。先づ『阿含經』に於ける機根の分類を見るに、固より三乘の語もなきにはあらざるも、四輩の弟子と稱せらるゝもの最も多し。左に佛羅漢等が如何なる機根と相對列せるかを見ん。

- (一)『增阿』廣演品 (一) 四雙 (比丘、比丘尼、優婆塞、優婆夷) 八輩 (刹利、波羅門、長者、沙門) 同增上品 (二) 四雙八輩十
- 二賢士。同力品 (三) 四雙八輩四部之衆。同等法品 (四) 『長阿』遊行經 (五) 同四姓經 (六) 四
- 部に首陀羅を加へて五姓とせり。

- (二)『增阿』安般品 (七) 如來、輪王、支佛、羅漢、出世甚難。同三供養品 (八) 同四意斷品 (九) 安般品に同じ。『長阿』遊行經 (十) 四の中羅漢を聲聞となせり。『增阿』力品 (十一) 梵志、國王、羅漢、佛。

- (三)『增阿』高幢品 (十二) 羅漢、辟支佛、如來。同八難品 (十三) 諸天及四果、辟支佛。同十不善品 (十四) 四向四果、辟支佛、佛の十人。又聲聞、支佛、佛を三乘とせり。同善聚品、佛、辟支、聲聞。同馬王品 (十五) 同上。『中阿』須達經、四果、支佛、如來。『增阿』善惡品 (十六) 同上。

- (四)『普曜經』聲聞、獨覺、菩薩。『方廣大莊嚴經』(十七) 聲聞、辟支、菩薩、如來。『大般若經』には時に四果、獨覺、菩薩、佛、(十八) の名目あるも、多くは聲聞、獨覺、菩薩の三乘。『智度論』は聲聞法、摩訶衍法と言ふを常套語となす。

『優婆塞戒經』(十九) 聲聞、緣覺、佛。『大集經』高幢分 (二十) 聲聞、緣覺、佛果。『涅槃經』(二十一) 見道、修道、無學道、佛道の四種。四果、支佛、佛道の六種。『無量義經』(二十二) 聲聞經 (四) 辟支佛 (四) 大乘 (二十三) 『妙法蓮華經』(二十四) 聲聞、(二十五) 辟支佛、菩薩、(二十六) 聲聞、辟支佛、佛乘、(二十七) 同上。(二十八) 聲聞、緣覺、菩薩。『正法華經』(二十九) 聲聞、緣覺、大乘 (諸通乘)。(三十) 小乘、菩薩乘、佛乘の語あり (三十一) 聲聞、緣覺、菩薩、

(聲聞) Sāvaka 「聞く者」(梵阿含)。(阿羅漢) Arhat (Arahat) 應供(殺賊不生の譯語不當)。(梵阿含)。(辟支佛) Pratyekabuddha (獨覺) 菩薩 Bodhisattva 菩提(齊譯)道(新譯)覺。薩埵(舊譯)衆生(新譯)有情(梵阿含)。(佛光大辭典) 53. 見よ。し。

(一)比丘等四雙は佛陀の正弟子にして、四部(五)より出つ、四王初利魔梵は天龍等の八部と共に佛陀治化の翳養者なり。前者は現實の教團を作り、後者は理想の教團に關せり。換言せば前者は罪惡と不信との調伏を主とし、後者はその勝利の休徵なり。四雙の弟子の所求は即ち四向四果にして、究極は即羅漢なり。

(二)佛と羅漢とを輪王、國王、梵志と相對せしむる如きは未だ内外の區別を明かにせざるものにして、特に輪王との對立は所々に見る所なり。『中阿』郁迦長者經『增阿』力品には佛弟子が輪王希望の記事あり。『中阿』七寶品『增阿』高幢品、等法品、長阿『轉輪王修行經』等には輪王の七寶を以て佛の七寶に擬し、一世界中一佛一輪王の思想は常に見る所なり。(六)又梵志は波羅門沙門と共に後世の如き大差を認めず。放牛品(七) 俱像梵志經(八) 等には眞の沙門波羅門とは佛教の精神を奉ずるものを稱すとなし。特に波羅門の來訪者に對して此語多し。(九)『長阿』禪形梵志(一〇) 『增阿』等法品には波斯匿王は曾て梵志波羅門は羅漢なりやを問へり。(一一)『佛說阿若多羅經』は是によりて知る、彼等は其初め間隔少なりしを。現に『增阿』懺愧品(一二)の如きは「羅漢は、除結斷我慢、我は沙門なり、波羅門なり、迦葉も亦然り」と云へり。加之阿育の碑文には波羅門を聲聞の前に列せり。

(三)、(一)は師主佛陀を除き、(二)は輪王等の世間衆を含めり、(三)は正しく出世間の果位に成れり。抑も如來の十號中に阿羅漢あり、『四分律』(一三)『五分律』共に波羅捺教化の記事には「爾時世間有六羅漢」といへて證悟の上よりは同一覺道なるを示し。阿含經中に散見せる所によれば迦葉目連等の入涅槃の状態は佛の入涅槃に同

じ。(一四)加之佛陀は迦葉の四禪六通は我が所證に同じと云ひ、如來の十力は汝等も亦之を得よ(一五)といへり。羅漢は元來佛陀と異なるなし。但し佛陀の羅漢は自覺にして、弟子(一六) 羅漢は師授を借り、師弟別あり、(一七)『法華經』(一八)『楞婆塞戒經』三種菩提品(一九)には聲聞緣覺も菩提を得、一切智を成ずるは佛に同じし、佛は無師、聞思によらず、修によりて覺し、又總別を併知するが故に獨り佛と稱すと曰へり。從つて尊重自ら異なる。(二〇)此故に『長阿』自觀喜經(二一)には「餘經如來最勝」を説き、『增阿』三寶品等に三寶の功德を説くや、常に「如來難及無與」等の義を示し。『增阿』增上品(二二)には如來の四等心四神足羅漢辟支佛の及ぶ所にあらずといへり。蓋し佛陀尊崇の情よりすれば弟子に共通の羅漢を以て稱するは適當ならず。此故に『俱舍論』(二三)には六種羅漢を説き、佛種姓、獨覺性、聲聞性を以て俱に同じく第六不動法羅漢中に攝しながら其中、上中下三品の差ありといひ、又『俱舍』『婆娑』等に三乘は所知障を斷ぜざるを以て佛と異なる等といふ。要之、佛徒の理想上よりすれば區別なく、佛羅漢の間隔はその師主尊崇の情に發せしものならん。次に辟支佛は『增阿』馬王品(二四) 禮三寶品(二五) 力品(二六)には無佛世の出となし。同善聚品(二七)には「無礙無弟子、獨逝無伴侶、不與他說法」を以て其特色となせり。佛前過去の諸仙は稱するに辟支佛を以てせるもの少からず。辟支佛は獨覺自證にして形式は全く佛陀に同じきも稍系統を異にし。時々出現の小佛陀を指すものの如し。(二八)現に南方佛教にては北方の如く貶稱せず。而して以上羅漢辟支佛如來は所謂『阿含經』の三乘にして、馬王品に「吾恒說三乘之

行、三世諸佛盡當三乘之法」といふものは是れなり。三乘の語は過去佛就中彌勒佛説話中に出づ。而して此中曾て菩薩なし。常盤學士は菩薩を混ぜざる三乘の過程を叙して、此三分類を最古のものとなし、佛陀論發達の結果に歸し、佛は始めは五比丘と共に羅漢とせられ、次に佛陀か無師獨覺にして其弟子と區別せんが爲めに僻支佛とせられ、尙不満足の點ありて羅漢僻支佛以外に佛を加へたりと云へり。(哲學) (四)然るに後の諸大乘經にありては三乘四乘の目あり。就中菩薩を以て聲聞緣覺に對するもの最も多し。惟ふに阿含經中にありては菩薩を以て三乘の名目中に收めたるものなきも、十不善品の如きは菩薩の平等施を稱讚し三乘と併説せり。力品の如きは『凡常六力羅漢專精佛大悲』といひて慈悲の菩薩を混入すべき機會を開き、同品中には(聖三)「此山中恒有神通菩薩得道真人」の語あり。特に等法品には(聖二)「慈悲喜捨空無相無願」の七種人は敬事すべしといひ、阿難之を怪しみ、四果僻支佛を説かずして何ぞ此七人を説くやと問ふ。佛は現世得報は四果支佛を供養するに勝るが故にと答ふ。七人は四無量三願にして菩薩なること殆んど明かなり。蓋し菩薩は本と佛の因地にして、始めは果位の三には容れざりし歟。(但し聲聞を以て羅漢と交迭しうるものとすれば、菩薩を以て三乘と相對すべきは直ちに想到しうべし。況んや『增阿』の如きは往々菩薩を豫想せるが如き筆致を示せるに於てをや。但し巴梨并に漢譯小乘經の當位にありては菩薩は過去現在に一人(釋迦及)のみを想定せるが故に、大乘諸經とは固より同日の論にあらず。然れども大乘經典中の三乘中には菩薩乘は殆んど大乘若くは佛乘と混同せり。『法華經』梵本第一章の大乘 Mahāyāna は佛乘 Buddhāyāna にして小乘 Hinayāna は聲聞乘支佛乘 Śrāvaka, Pratyekabuddhāyāna なり。Dharmasūtrika の三乘 Trīṇyānāni の下にも菩薩乘を大乘と稱せり。(漢譯法華經卷第五) 名稱に於いて斯く混合せるのみならず、思想に於いても佛乘と菩薩乘とは轉換し易し。菩薩を以て三乘の一を代表せしむるに至りしは主として此間の思想に成りしものならんも内包的には既に大乘經の以前に存せしもの如し、次章に至りて更に辨すべし。

抑も菩薩は其語義が表はず如く覺を求むる人を指す。彼の巴梨『中阿』聖求經中の菩薩は正しく此意義に過ぎず。巴梨文に對應すべき漢譯『中阿』羅摩經には菩薩の譯語はなきも義意は巴梨文に合す。(現法) 即ち覺有情の義なり。而して此名義は佛教の思想より起りしものなること勿論なり。(菩提薩埵 (Bodhisattva) 本地隱顯) 覺有情(第五)譯語に高士、始士、開士、道心衆生(舊)覺有情(新)等あり 然るに佛陀は始め單に覺者の義なりしも、之を以て自覺佛獨覺佛たるに終らしむるをえず。其正覺は人類のためなりとし、先きに云へるが如く其降誕も亦化他のためなりと解せらるゝに至りては、菩薩に對しても亦覺他の側に強き注意を拂ふに至り、菩薩は遂に化他なしには其資格を満たさざるものとなし、(文殊師利問經) 自覺覺他を以て菩薩の義となすに至れり (阿毘) 蓋し佛陀本生の行因は此二利の成滿にあるが故に、此兩面を見たるは當然なり。『婆娑論』百七十六には趣向菩提と勇猛との二義を擧げ、(薩埵經 Sūtra には有精、勇猛の義あり Anandonell, 300) 『佛地論』には求菩提、利有情、勇猛の三義を列ね、『大般若經』菩薩品第十二、摩訶薩品第十三には「不生非有無所得」を其義とせるも、同時に觀行品第十九には「爲有情類求大菩提亦有菩提故名菩薩」といひ、『增阿』邪聚品の如きも亦如來出世の五事

中、衆生をして菩提心を發さしめんが爲めに出世すと云へり。(21) 又支那の註釋者は或は二利具足の義となし、或は大道心成衆生の義となすもの比々皆然り。(22) 天竺戒疏(上)の(23) 摩訶般若經云大道心成衆生と、成字恐らくは是等固より義解にして原語の意にあらずること勿論なり。但しかる義解を生ずるに至りしは以て菩薩が化他の方面に重きを置かれたるを見るべし。顧みて維漢辭支佛も菩提を求むるものなり。彼の佛在世に出て其原籍の明了なるものは皆維漢とせられ、彌勒文殊地藏の如く在世時に關係する所薄きもの若しくは後世の馬鳴龍樹以下は菩薩とせられて維漢とせられず。而して多くは俗相をなせり。グリーンエデル氏は菩薩像の莊嚴はタミール地方の婦人の裝飾に類すといふ。(24) 佛美(25) 此地スタイン(26) 子(27) 闕(28) 惟ふに此の如き菩薩の思想は彼の本生時の菩薩は多く出家沙門にあらず。而して維摩勝鬘等二乘を貶せる經典には在家得道の信仰あり。今此等を併せ考ふるに大乘佛教に至り菩薩の特に注意せらるるに至りし所以鬚髯として見るをうべし。(29) 得道(30) 第三篇終(佛) 教俗化(31) の項参照

第四章 法身佛

(壹) 大乘と小乘

佛陀直説の教義の果たして何物なりしか。其内容を確然限定せんことは、今日に於いて到底不可能の事に屬す。巴梨并に漢譯の『阿含經』の如きは原始的の教義を包含するものなりと雖も、幾度か合誦結集の上に成

り。且つ成文經典となりしは、南傳は紀元前第一紀にあり。北傳の如きも異説區々たりと雖も、少くとも紀元前三世紀以前に遡るをえず。中には阿育王の記事をも含み、其大部分は寧ろ佛滅四五世紀の交にあるもの如し。加之同一の『阿含經』も部派各所傳を異にせしものなれば原始經典と稱せらるゝものも、佛滅數世紀間の思想を混成せしものなること蓋し掩ふ可らず。彼の漢譯『長阿』大會經(32) 『大三摩婆經』(33) の如きは巴梨漢譯少異ありと雖も(34) 『增阿』三供養品(35) (36) には咒術は女人、邪見と同一類として之を避くべしといへり。然るに法藏部には禁咒藏あり。此大會經と共に咒法即ち密教的思想の混和を見るべく、又彼の『增阿』甘露法味當念奉行經(37) (38) には佛曾て迦旃延の爲めに非著非住を説くや、阿難は此經義理甚深なりといふ。是れ般若佛教の旨趣に似たり。一切諸法之本經(39) (40) と併せ見るべし。此他『增阿』序品の如き無數の比丘菩薩を會して、菩薩發意趣大乘といひ、六度無極を説けり。惟ふに其法身の偈の如きも(41) 單なる教法の意のみなるや疑ふべし。抑も法と佛との致一を示せるもの少からず。如來を誹謗するものは法を誹謗するなりといひ(42) 法を觀るものは我を觀るといふ。(43) 又弟子にも如來の語を使用せるあり。(44) 一轉して悉有佛性たるべき契機を示せり。『中阿』心品には一切唯心の理に似たるあり。又十二因縁は唯た是れ假號法にして、火木不即不離に譬へ、第一最空の法を説けるあり。(45) 同しく又縁起法は人の所作にあらず、如來の出不に拘らず、法界常住とせるあり。(46) 雜阿(47) 十二(48) 成(49) 二(50) 即ち(51) 即ち(52) 即ち(53) 即ち(54) 即ち(55) 即ち(56) 即ち(57) 即ち(58) 即ち(59) 即ち(60) 即ち(61) 即ち(62) 即ち(63) 即ち(64) 即ち(65) 即ち(66) 即ち(67) 即ち(68) 即ち(69) 即ち(70) 即ち(71) 即ち(72) 即ち(73) 即ち(74) 即ち(75) 即ち(76) 即ち(77) 即ち(78) 即ち(79) 即ち(80) 即ち(81) 即ち(82) 即ち(83) 即ち(84) 即ち(85) 即ち(86) 即ち(87) 即ち(88) 即ち(89) 即ち(90) 即ち(91) 即ち(92) 即ち(93) 即ち(94) 即ち(95) 即ち(96) 即ち(97) 即ち(98) 即ち(99) 即ち(100) 即ち(101) 即ち(102) 即ち(103) 即ち(104) 即ち(105) 即ち(106) 即ち(107) 即ち(108) 即ち(109) 即ち(110) 即ち(111) 即ち(112) 即ち(113) 即ち(114) 即ち(115) 即ち(116) 即ち(117) 即ち(118) 即ち(119) 即ち(120) 即ち(121) 即ち(122) 即ち(123) 即ち(124) 即ち(125) 即ち(126) 即ち(127) 即ち(128) 即ち(129) 即ち(130) 即ち(131) 即ち(132) 即ち(133) 即ち(134) 即ち(135) 即ち(136) 即ち(137) 即ち(138) 即ち(139) 即ち(140) 即ち(141) 即ち(142) 即ち(143) 即ち(144) 即ち(145) 即ち(146) 即ち(147) 即ち(148) 即ち(149) 即ち(150) 即ち(151) 即ち(152) 即ち(153) 即ち(154) 即ち(155) 即ち(156) 即ち(157) 即ち(158) 即ち(159) 即ち(160) 即ち(161) 即ち(162) 即ち(163) 即ち(164) 即ち(165) 即ち(166) 即ち(167) 即ち(168) 即ち(169) 即ち(170) 即ち(171) 即ち(172) 即ち(173) 即ち(174) 即ち(175) 即ち(176) 即ち(177) 即ち(178) 即ち(179) 即ち(180) 即ち(181) 即ち(182) 即ち(183) 即ち(184) 即ち(185) 即ち(186) 即ち(187) 即ち(188) 即ち(189) 即ち(190) 即ち(191) 即ち(192) 即ち(193) 即ち(194) 即ち(195) 即ち(196) 即ち(197) 即ち(198) 即ち(199) 即ち(200) 即ち(201) 即ち(202) 即ち(203) 即ち(204) 即ち(205) 即ち(206) 即ち(207) 即ち(208) 即ち(209) 即ち(210) 即ち(211) 即ち(212) 即ち(213) 即ち(214) 即ち(215) 即ち(216) 即ち(217) 即ち(218) 即ち(219) 即ち(220) 即ち(221) 即ち(222) 即ち(223) 即ち(224) 即ち(225) 即ち(226) 即ち(227) 即ち(228) 即ち(229) 即ち(230) 即ち(231) 即ち(232) 即ち(233) 即ち(234) 即ち(235) 即ち(236) 即ち(237) 即ち(238) 即ち(239) 即ち(240) 即ち(241) 即ち(242) 即ち(243) 即ち(244) 即ち(245) 即ち(246) 即ち(247) 即ち(248) 即ち(249) 即ち(250) 即ち(251) 即ち(252) 即ち(253) 即ち(254) 即ち(255) 即ち(256) 即ち(257) 即ち(258) 即ち(259) 即ち(260) 即ち(261) 即ち(262) 即ち(263) 即ち(264) 即ち(265) 即ち(266) 即ち(267) 即ち(268) 即ち(269) 即ち(270) 即ち(271) 即ち(272) 即ち(273) 即ち(274) 即ち(275) 即ち(276) 即ち(277) 即ち(278) 即ち(279) 即ち(280) 即ち(281) 即ち(282) 即ち(283) 即ち(284) 即ち(285) 即ち(286) 即ち(287) 即ち(288) 即ち(289) 即ち(290) 即ち(291) 即ち(292) 即ち(293) 即ち(294) 即ち(295) 即ち(296) 即ち(297) 即ち(298) 即ち(299) 即ち(300) 即ち(301) 即ち(302) 即ち(303) 即ち(304) 即ち(305) 即ち(306) 即ち(307) 即ち(308) 即ち(309) 即ち(310) 即ち(311) 即ち(312) 即ち(313) 即ち(314) 即ち(315) 即ち(316) 即ち(317) 即ち(318) 即ち(319) 即ち(320) 即ち(321) 即ち(322) 即ち(323) 即ち(324) 即ち(325) 即ち(326) 即ち(327) 即ち(328) 即ち(329) 即ち(330) 即ち(331) 即ち(332) 即ち(333) 即ち(334) 即ち(335) 即ち(336) 即ち(337) 即ち(338) 即ち(339) 即ち(340) 即ち(341) 即ち(342) 即ち(343) 即ち(344) 即ち(345) 即ち(346) 即ち(347) 即ち(348) 即ち(349) 即ち(350) 即ち(351) 即ち(352) 即ち(353) 即ち(354) 即ち(355) 即ち(356) 即ち(357) 即ち(358) 即ち(359) 即ち(360) 即ち(361) 即ち(362) 即ち(363) 即ち(364) 即ち(365) 即ち(366) 即ち(367) 即ち(368) 即ち(369) 即ち(370) 即ち(371) 即ち(372) 即ち(373) 即ち(374) 即ち(375) 即ち(376) 即ち(377) 即ち(378) 即ち(379) 即ち(380) 即ち(381) 即ち(382) 即ち(383) 即ち(384) 即ち(385) 即ち(386) 即ち(387) 即ち(388) 即ち(389) 即ち(390) 即ち(391) 即ち(392) 即ち(393) 即ち(394) 即ち(395) 即ち(396) 即ち(397) 即ち(398) 即ち(399) 即ち(400) 即ち(401) 即ち(402) 即ち(403) 即ち(404) 即ち(405) 即ち(406) 即ち(407) 即ち(408) 即ち(409) 即ち(410) 即ち(411) 即ち(412) 即ち(413) 即ち(414) 即ち(415) 即ち(416) 即ち(417) 即ち(418) 即ち(419) 即ち(420) 即ち(421) 即ち(422) 即ち(423) 即ち(424) 即ち(425) 即ち(426) 即ち(427) 即ち(428) 即ち(429) 即ち(430) 即ち(431) 即ち(432) 即ち(433) 即ち(434) 即ち(435) 即ち(436) 即ち(437) 即ち(438) 即ち(439) 即ち(440) 即ち(441) 即ち(442) 即ち(443) 即ち(444) 即ち(445) 即ち(446) 即ち(447) 即ち(448) 即ち(449) 即ち(450) 即ち(451) 即ち(452) 即ち(453) 即ち(454) 即ち(455) 即ち(456) 即ち(457) 即ち(458) 即ち(459) 即ち(460) 即ち(461) 即ち(462) 即ち(463) 即ち(464) 即ち(465) 即ち(466) 即ち(467) 即ち(468) 即ち(469) 即ち(470) 即ち(471) 即ち(472) 即ち(473) 即ち(474) 即ち(475) 即ち(476) 即ち(477) 即ち(478) 即ち(479) 即ち(480) 即ち(481) 即ち(482) 即ち(483) 即ち(484) 即ち(485) 即ち(486) 即ち(487) 即ち(488) 即ち(489) 即ち(490) 即ち(491) 即ち(492) 即ち(493) 即ち(494) 即ち(495) 即ち(496) 即ち(497) 即ち(498) 即ち(499) 即ち(500) 即ち(501) 即ち(502) 即ち(503) 即ち(504) 即ち(505) 即ち(506) 即ち(507) 即ち(508) 即ち(509) 即ち(510) 即ち(511) 即ち(512) 即ち(513) 即ち(514) 即ち(515) 即ち(516) 即ち(517) 即ち(518) 即ち(519) 即ち(520) 即ち(521) 即ち(522) 即ち(523) 即ち(524) 即ち(525) 即ち(526) 即ち(527) 即ち(528) 即ち(529) 即ち(530) 即ち(531) 即ち(532) 即ち(533) 即ち(534) 即ち(535) 即ち(536) 即ち(537) 即ち(538) 即ち(539) 即ち(540) 即ち(541) 即ち(542) 即ち(543) 即ち(544) 即ち(545) 即ち(546) 即ち(547) 即ち(548) 即ち(549) 即ち(550) 即ち(551) 即ち(552) 即ち(553) 即ち(554) 即ち(555) 即ち(556) 即ち(557) 即ち(558) 即ち(559) 即ち(560) 即ち(561) 即ち(562) 即ち(563) 即ち(564) 即ち(565) 即ち(566) 即ち(567) 即ち(568) 即ち(569) 即ち(570) 即ち(571) 即ち(572) 即ち(573) 即ち(574) 即ち(575) 即ち(576) 即ち(577) 即ち(578) 即ち(579) 即ち(580) 即ち(581) 即ち(582) 即ち(583) 即ち(584) 即ち(585) 即ち(586) 即ち(587) 即ち(588) 即ち(589) 即ち(590) 即ち(591) 即ち(592) 即ち(593) 即ち(594) 即ち(595) 即ち(596) 即ち(597) 即ち(598) 即ち(599) 即ち(600) 即ち(601) 即ち(602) 即ち(603) 即ち(604) 即ち(605) 即ち(606) 即ち(607) 即ち(608) 即ち(609) 即ち(610) 即ち(611) 即ち(612) 即ち(613) 即ち(614) 即ち(615) 即ち(616) 即ち(617) 即ち(618) 即ち(619) 即ち(620) 即ち(621) 即ち(622) 即ち(623) 即ち(624) 即ち(625) 即ち(626) 即ち(627) 即ち(628) 即ち(629) 即ち(630) 即ち(631) 即ち(632) 即ち(633) 即ち(634) 即ち(635) 即ち(636) 即ち(637) 即ち(638) 即ち(639) 即ち(640) 即ち(641) 即ち(642) 即ち(643) 即ち(644) 即ち(645) 即ち(646) 即ち(647) 即ち(648) 即ち(649) 即ち(650) 即ち(651) 即ち(652) 即ち(653) 即ち(654) 即ち(655) 即ち(656) 即ち(657) 即ち(658) 即ち(659) 即ち(660) 即ち(661) 即ち(662) 即ち(663) 即ち(664) 即ち(665) 即ち(666) 即ち(667) 即ち(668) 即ち(669) 即ち(670) 即ち(671) 即ち(672) 即ち(673) 即ち(674) 即ち(675) 即ち(676) 即ち(677) 即ち(678) 即ち(679) 即ち(680) 即ち(681) 即ち(682) 即ち(683) 即ち(684) 即ち(685) 即ち(686) 即ち(687) 即ち(688) 即ち(689) 即ち(690) 即ち(691) 即ち(692) 即ち(693) 即ち(694) 即ち(695) 即ち(696) 即ち(697) 即ち(698) 即ち(699) 即ち(700) 即ち(701) 即ち(702) 即ち(703) 即ち(704) 即ち(705) 即ち(706) 即ち(707) 即ち(708) 即ち(709) 即ち(710) 即ち(711) 即ち(712) 即ち(713) 即ち(714) 即ち(715) 即ち(716) 即ち(717) 即ち(718) 即ち(719) 即ち(720) 即ち(721) 即ち(722) 即ち(723) 即ち(724) 即ち(725) 即ち(726) 即ち(727) 即ち(728) 即ち(729) 即ち(730) 即ち(731) 即ち(732) 即ち(733) 即ち(734) 即ち(735) 即ち(736) 即ち(737) 即ち(738) 即ち(739) 即ち(740) 即ち(741) 即ち(742) 即ち(743) 即ち(744) 即ち(745) 即ち(746) 即ち(747) 即ち(748) 即ち(749) 即ち(750) 即ち(751) 即ち(752) 即ち(753) 即ち(754) 即ち(755) 即ち(756) 即ち(757) 即ち(758) 即ち(759) 即ち(760) 即ち(761) 即ち(762) 即ち(763) 即ち(764) 即ち(765) 即ち(766) 即ち(767) 即ち(768) 即ち(769) 即ち(770) 即ち(771) 即ち(772) 即ち(773) 即ち(774) 即ち(775) 即ち(776) 即ち(777) 即ち(778) 即ち(779) 即ち(780) 即ち(781) 即ち(782) 即ち(783) 即ち(784) 即ち(785) 即ち(786) 即ち(787) 即ち(788) 即ち(789) 即ち(790) 即ち(791) 即ち(792) 即ち(793) 即ち(794) 即ち(795) 即ち(796) 即ち(797) 即ち(798) 即ち(799) 即ち(800) 即ち(801) 即ち(802) 即ち(803) 即ち(804) 即ち(805) 即ち(806) 即ち(807) 即ち(808) 即ち(809) 即ち(810) 即ち(811) 即ち(812) 即ち(813) 即ち(814) 即ち(815) 即ち(816) 即ち(817) 即ち(818) 即ち(819) 即ち(820) 即ち(821) 即ち(822) 即ち(823) 即ち(824) 即ち(825) 即ち(826) 即ち(827) 即ち(828) 即ち(829) 即ち(830) 即ち(831) 即ち(832) 即ち(833) 即ち(834) 即ち(835) 即ち(836) 即ち(837) 即ち(838) 即ち(839) 即ち(840) 即ち(841) 即ち(842) 即ち(843) 即ち(844) 即ち(845) 即ち(846) 即ち(847) 即ち(848) 即ち(849) 即ち(850) 即ち(851) 即ち(852) 即ち(853) 即ち(854) 即ち(855) 即ち(856) 即ち(857) 即ち(858) 即ち(859) 即ち(860) 即ち(861) 即ち(862) 即ち(863) 即ち(864) 即ち(865) 即ち(866) 即ち(867) 即ち(868) 即ち(869) 即ち(870) 即ち(871) 即ち(872) 即ち(873) 即ち(874) 即ち(875) 即ち(876) 即ち(877) 即ち(878) 即ち(879) 即ち(880) 即ち(881) 即ち(882) 即ち(883) 即ち(884) 即ち(885) 即ち(886) 即ち(887) 即ち(888) 即ち(889) 即ち(890) 即ち(891) 即ち(892) 即ち(893) 即ち(894) 即ち(895) 即ち(896) 即ち(897) 即ち(898) 即ち(899) 即ち(900) 即ち(901) 即ち(902) 即ち(903) 即ち(904) 即ち(905) 即ち(906) 即ち(907) 即ち(908) 即ち(909) 即ち(910) 即ち(911) 即ち(912) 即ち(913) 即ち(914) 即ち(915) 即ち(916) 即ち(917) 即ち(918) 即ち(919) 即ち(920) 即ち(921) 即ち(922) 即ち(923) 即ち(924) 即ち(925) 即ち(926) 即ち(927) 即ち(928) 即ち(929) 即ち(930) 即ち(931) 即ち(932) 即ち(933) 即ち(934) 即ち(935) 即ち(936) 即ち(937) 即ち(938) 即ち(939) 即ち(940) 即ち(941) 即ち(942) 即ち(943) 即ち(944) 即ち(945) 即ち(946) 即ち(947) 即ち(948) 即ち(949) 即ち(950) 即ち(951) 即ち(952) 即ち(953) 即ち(954) 即ち(955) 即ち(956) 即ち(957) 即ち(958) 即ち(959) 即ち(960) 即ち(961) 即ち(962) 即ち(963) 即ち(964) 即ち(965) 即ち(966) 即ち(967) 即ち(968) 即ち(969) 即ち(970) 即ち(971) 即ち(972) 即ち(973) 即ち(974) 即ち(975) 即ち(976) 即ち(977) 即ち(978) 即ち(979) 即ち(980) 即ち(981) 即ち(982) 即ち(983) 即ち(984) 即ち(985) 即ち(986) 即ち(987) 即ち(988) 即ち(989) 即ち(990) 即ち(991) 即ち(992) 即ち(993) 即ち(994) 即ち(995) 即ち(996) 即ち(997) 即ち(998) 即ち(999) 即ち(1000)

眞諦を見、甚深極廣の佛智を示し。『雜阿』四十七(辰四)と共に『法華經』方便品佛智の甚遠を示せるものと類似し、『法華經』始終に重説せる一乘の佛法なる思想は『雜阿』四十四(辰四)「有一乘道、淨諸衆生、離諸惱苦、憂愁悉滅」と系統を保ち、藥草喻品等の譬喩は多く小乗經典に求むるをうべし。(如時教授) 詳細は『現身佛と法身佛』(241-27) 見るべし。此他眞如(辰四) 法性 Dhammatā 一乘 Ekayāna等の語は敢て珍とせざるなり。『大乘佛教史論』(24)には更らに當體即空、大衆部の緣起支性、諸如來證皆了義の類文并に涅槃を形容せる積極的語辭の引文あり見るべし。阿含經中教理の進歩を示せる斯の如し、従つて其の佛陀觀も大乘經典と共通のもの少からず。

『增阿』高幢品(辰一)「如來命終、如來不命終、有終有不終亦不有終亦不無終、莫作是念」といへるは『般若』の佛身論若くは、犢子部の非即非離蘊の我、或は『菩薩念佛三昧經』等の即蘊離蘊是如來(248)といへるに類せり。(現法) 世尊の死後有耶無耶の問題に關し、十有餘經の引用あり、而して其の答の多くは此の『增阿』(の文に類せり。特に長阿(辰九)と(辰十)には世界論に就きて稍形而上的思索を廻らし、次に此文あり。) 三世諸佛は勿論『阿含經』の處々に散見し、『長阿』眞符經の如きは八佛出世して大饒益あらんことを希望し。彼の『增阿』六重品の奇光如來は現在他方佛なり。又『增阿』十不善品(辰三)には諸佛同道の教義并に無數億千の衆生を教化すべし法身佛の信仰を表はせり。而して茲に法身といふは單に教法若くは五分法身の意にあらず。或は延壽無窮の如來を見たるあり。(辰一) 愍念群生大慈大悲の佛を示せるあり。(辰三) 従つて如來の功德を憶念するは三惡趣を離るといひ(辰二) 又彼の佛身の譬喩は殆んど大小乗共通なり。「世間最勝第一、擧足所生蓮華」

『辰三』といひ、「歸命十力尊、圓光無塵霧」(辰二) といひ、「此光極清淨、使人悅無量」の佛身を表はせるあり。(辰二) 金色の佛身は涅槃前の身相を始めとして(辰九) 金色細軟八和雅音の佛陀あり。身紫金色千輻輪相の佛身あり。(辰四) 彼の三十二相八十種好の如きは處々に散見せり。(中阿)三十二相經を始め(辰二)及(辰三)及(辰四)及(辰五)及(辰六)及(辰七)及(辰八)及(辰九)其他佛身讚嘆の文は所謂阿含經中に存し、『增阿』序品の如きは「金剛所成無礙慧身」を見たり。(辰一) 若し夫れ廣く阿含經以外の小乗經を取らんか。彼の漢譯『生經』(初五)の如きは本生譚とは何等の關係なき幾多の大乗經典を混入せり。總持經、護持比丘咒經、吉祥咒經には諸種の總持印を説き、就中總持經第廿二中には普賢蓮華慶等の諸菩薩を會し、普賢行願入法界の法を説き、展十事十教等の目を立て、華嚴經を讀むが如き感あらしむ。故に智旭は曰く「大似華嚴經中略出少許」(三十三)と。「生經」は元と阿含經外のものなりと雖とも、等しく小乗經なり。譯者は西晋法護なりとすれば又甚だ後代にあらず。且つ其の前後を見るに往々南方の本生譚と其起原を同うせる説話を混じ、比較的舊經を保存せること鮮からず。然るに中に大乘思想を混ずることしかく多く其他小乗部の經典中此の類少からず。知旭は『浴禪病經』を以て大乘法要となし(知津) 『沙曷比丘功德經』を以て發迹顯本の意に似たりといひ(知津) 『未曾有因緣經』等の術語は多く大小共通なり。『文殊明法經』は大乗經にして其中の名目は全く小乗經と異ならず。此故に經錄によりては大未分藏を立つるあり。現に世高譯『校計五十名度經』(大乗經)の如きは未分藏中に攝せらるゝあり。『彌勒下生經』(黃五)は大乗經なれども、そは『增阿』十不善品(辰三)と僅かに二三字の相違に過ぎず。而して

此類極めて多し。

箇々の類文は暫く措き、四攝〔中阿字長經及五、長阿壽生經及九、及三昧といふ、及三昧といふ〕は大乘經の特色にして彼の三三昧の如きは魏譯『無量壽經』には「超越聲聞緣覺之地、得空無相無願三昧」といへるも悉く原始經典に存し、神通三昧神通現土の思想は亦同じく所々に逢着し、其他六波羅密の原形の如き亦全く『阿含經』中に存し、巴黎『本生序說』には現に十波羅密を數ふ。大乘十戒亦大乘のみの專有に非ず。斯の如くにして諸大乘經の根本義の何たるかを見ると、常に原始經典に其原形を認めうべきもの比々皆然り。想ふに釋尊の説法なるものは決して單純なるもの、なみにはあらざりしならん。

抑も佛教の術語は頗る内包に富めり。天台が四教に配するに四種の四諦を以てせるが如き見るべし。法相には唯識中道あり。三論には八不中道あり。天台には中觀中諦中道あり。末陀摩〔文殊師利問經、中道品列一〕即ち中道は本と無所着に基く、無所着是れ佛教の通義なりとは由來佛教家の常套語なり。是れ豈に『轉法輪經』の有無苦樂四句超越 Pannacati の中道 Majjimsapattipada に根源し、如來は常に中道に立つ〔雜阿、十二、辰二〕との信仰に基因するものにあらずや。『法華經』には唯一乘無二亦無三を示して〔什譯盈一 11b, 12a, 27a, 護譯盈二 6b, 7a, 8b, 11b〕法一兩一門一味といひ、『無量義經』には「無量義從一法生……名爲實相」〔致一〕といひ、『涅槃經』には一實諦一性一地一行といひ、『首楞嚴經』には一如といふ。『維摩經』には一音一默あり。『華嚴經』に一道一法界あり。『起信論』に一相一覺あり。平等同一覺は元來佛教の根本義なり。是れ豈に佛陀の平等主義たる一乘成道

〔雜阿、辰四、別雜、辰五〕の理想に因由するものに非ずや。源泉遠しと雖も流は畢ひに絶斷せざるなり。

按ずるに佛の直弟中には諸種の人物を網羅し、當代の學匠も亦鮮からず。上座系統の傳説にては〔巴黎佛并に北傳通説〕大衆部は新義を唱へ偽經を作り、部祖大天は五事の妄言ありしを傳ふるも他方には大天に左袒せる記録あり。〔小史〕而して其大衆部は實に大乘の先驅なり。次章に説くが如し。紀元前一二世紀頃の龍軍〔那先〕に三身論の著ありしと傳へ〔大史〕摩騰傳には「解大小乘講金光明經」といふ。〔致二〕是等は確證なきも傳説となすは憚りなし。固より支那東晉時代より南北朝の頃に至る間に三四人の大乘非佛説論者あり。

〔出三藏〕法度は十方佛を否定して唯九釋尊を禮し、専ら小乘を學して、方等を讀むを禁じ〔致二〕曇無讖傳には罽賓人當時大乘涅槃經を信ぜざりすと傳へ〔致二〕智猛が華子國に到り、支那が悉く大乘教のみと稱するや國人驚異すといひ〔致二〕羅什は莎車王子に大乘を享くる以前は小乘を學せり。〔致二〕曇無讖の弟子沮渠安陽侯は于闐に至りて佛陀斯那に遭ふや特に天竺大乘法師と特書し、〔致二〕竺僧槃頭達多か羅什に會して自ら小乘師と稱し什を大乘師と呼べるが如く〔致二〕之を『法顯傳』『西域記』の所傳と併せ考ふるに遙かに後代に及んで尙ほ小乘教の隆盛を傳ふるありと雖とも、是によりて直ちに大乘思想を後代の顯出と見做すべしにはあらず。

蓋し佛滅四五百年間は外寇亂打ち續きて一般に史料に乏し〔ダット氏三三三參照〕大乘佛教興起の跡は杳として傳ふる所なきも、龍樹の著に傳へ、並に支那古譯の大乘經典を見るに其數頗る多し。此等が果して紀元前後に

一時に勃發したるものと見るは史實としては殆んど信ずべからず。實に一大奇蹟といはざるを得ず。思ふに大乘教の萌芽の既に業に其以前に存せしものたるや蓋疑を容れず。此故にワッシーン氏(佛)は云へり。龍樹無著時代僅かに百餘年間に彼の廣大なる大乘經が完成したりとは信ずるをえず。惟ふに佛滅百年佛敎第一回の分裂諸派中に其の萌芽を有し、龍樹に至りて之を開發したるや疑なし。彼の小乗教の術語が偶々大乘敎の意義にて初めて通釋しうるが如きは蓋し此事實を證するものなりと。法顯玄奘の記事によれば大小二乗は各地交雜し、中には大小兼學寺すらありき。廻りて印度の高僧は大小何れとも判じ難きもの少からず。(『薩婆多部目録』
結一、參照) 現に世友尊者の如きは大乘行の人と傳ふ。(『西域』
記) 且つそれ馬鳴龍樹世親皆小乗敎に關せる著述あり。又小乗の高僧にして大乘の籠下に立ちしが如き形迹あり。況んや一般の信者は僧侶の保護にありて其の乘の何たるかは措いて問はざりしなり。後によりて前を推し、新を以て故を温ぬるに大乘敎の淵源や遠きにあるもの、如し。瑜伽吠檀多僧法の三派を辿り、遙かに優婆塞沙土に其先驅を探るが如きは下に至りて之を辨せん。(『佛敎と印度敎』
佛敎の俗化)
及『在家得道』の項下參照)

抑も大乘とは何ぞや。『稱讚大乘功德經』には三十餘種の項目を列ねて大乘の名義體相を述べたるも、畢竟有情を利益すると廣大にして二乘下智の所知に非ずといふに過ぎず。(『出七』
七七) 次に『地藏十輪經』には持戒清淨、慈悲遍滿、一切有情を安樂にする是れ大乘といひ(『玄七』
三七) 『般若經』辨大乘品には六度即ち大乘の相にして一切智智心を起し、大悲を首とし、常に一切有情を無上菩提に廻向するをいふと。(其他二十空百五十七三昧
十地等の名數を列ねたり)

蓋し大乘なる名義の起源は『般若經』に屢出づるが如く大運載の義なり。(此他『大集經』
玄一、參照) 然らば主觀的に自己の信奉せるものは皆大乘といふを憚らず。果然『長阿』序品には「佛爲海船師、法橋渡河津、大乘道之菴、一切渡天人」の語あり。(『法九』
二六) 又『小乘安般經』序(『唐僧』
會) には「安般者諸佛大乘」の語あり。又玄奘は上座部に冠するに大乘の字を以てせり。(但しとは『華嚴』
過ぎざるべきか) 又『阿含經』中意義としては所々にあり。元來小乘なる名稱は大乘家の附せるものにて小乗家の甘受せし所にあらず。大小二乗は元と客觀的に敎の分類にあらずして主觀的に宗の分類に基けり。敎理上の淺深高下を附するに至りしは菩薩佛敎の勃興以來のことに屬す。爾來大乘は菩薩の換名として襲用せらるゝに至り、(上菩薩
の下參照) 菩提に三乘の區別を立て、(『優婆塞戒經』
三、
『菩薩摩訶薩』
二、
『經』
列二、
參照) 禪に雜漢菩薩を分ち、(『法律三昧經』
列二、
參照) 従つて又戒律にも菩薩毗尼聲聞毗尼の別を生し(『菩薩摩訶薩』
經、
列二、
參照) 智慧は勿論神通にも大小力用の相違を見るに至れり。(『菩薩念佛三昧經』
講通品、
八、
參照)

然るに同じく大乘と稱するも小乘に對する態度に自ら二系統あり。一は専ら小乘を貶斥せるものと他は小乘を融和するものと是れなり。『華嚴經』には五百の聲聞會座にあれども佛の師子嚩申三昧所現の莊嚴國土は彼等善根異なる故を以て總て知見するをえずといひ、(入法
界品) 『般若經』の始終に口を極めて二乘を謗り、譬へば彼等の智や菴の如く菩薩の智は日の如しといひ(『學觀品』
第二、
辨事品、
第四十三、
終り、
參照、
參照) 『維摩經』亦然り。『淨業障經』には師子野子を以て菩薩と聲聞とを分てり。先きの『稱讚大乘功德經』の如きは地獄に墮するも二乘地に墮する勿れといふ。是等専ら排小を主とせり。但し天台の判敎に別敎華嚴は不共二乘にして通敎般若は共二乘空有を

融通すといへるは排小主義に亦自ら二傾向あるを示せり。然るに之に反して『法華經』『涅槃經』の如きは聊か其趣きを異にし、特に『法華經』に在りては三乗は方便に過ぎずとなし(Sg. 127a) 唯だ衆生を引導して大乘に融會せしめんためなりといひて(Sg. 1) 唯一乗を其綱格となし、貪著三藏の小乗佛教を開會するに力め、「知衆樂小法、而畏於大智、是故諸菩薩、作聲聞緣覺、內秘菩薩行、外現是聲聞」(Sg. 1) といひ、又彼の『地藏十輪經』の如きは三乘各共する所十有依行あるを述べ聲聞獨覺の行を誹るは菩薩行に非ずといへり。(有依已下) 天台家が法華涅槃の特色を示せる術語として開權顯實扶律談常といへり。此語既に調和思想を言明せるものと謂ふべし。固より『法華經』は純圓獨妙の教理を包含するが故に到底小乗と同一思想にあらず。此故に排小讚大の文あるは勿論なりと雖も(方便品信解品等) 要するに小乗を以て大乘の豫備と見たり。天台教判中方等部の經典は他の四部に攝し難き(開藏知津) 雜多の經典を混入せるが故に約言し難きも華嚴、方等、般若、法華、涅槃、所謂、擬宜、彈訶、淘汰、開會、追説に於いて略々菩薩聲聞の二佛教の關係を見るをうべく、華嚴を除くの外悉く聲聞佛教に絶縁的態度に出づるものなきを知るべし。

蓋し聲聞佛教は主として現實の佛陀を中心とし、菩薩佛教は常に教義を中心とせり。前者は佛を主とし、後者は法を主とせり。前者は佛陀の正面を見、後者は佛陀の背面を摸し。前者は常に一佛中心にして後者は多佛多身論なり。小乗の法身は當面の教法を重んじ、大乘法身は教法の裏面に佛身の相即を認めたり。漫然として其の傾向を見れば多く異なる所あるも、等しく其の職能に應じて佛陀の人格を表はし系統自ら一貫せる

ものあり。之を譬ふるに大小二乗の佛教は一箇の圓錐狀螺旋線に比するをうべし。一輪も各箇獨立のものあることなし、皆相互關係によりて發達進轉し來りしものとす。彼の『增阿』(Sg. 1) 并に『菩薩處胎經』(Sg. 10) 等の大小二藏同處結集の傳説の如き、又彼の判教家の大小諸經を悉く一代所説となすが如きは、長年月の史實を短日月中に仕組まんとするものにて、軸に添ふて中心に縮めし平面上の螺旋線に見做せるに比すべく、又或種の西儒が大乘を以て全々外系(エキソテリヤ)となすが如きは中間を斷絶せるに況すべし。兩者共に正鵠を失す。無着の『顯揚聖教論』(十)『大莊嚴論』(一)護法の『成唯識論』(五)等に屢々因明作法を設けて大乘佛説を立證せんとせし中、特に「大小本來俱行故」なる因故は如上の意義に於いて始めて事實たるをうべし。但し新古大小の佛典を比するに小乘經は倫理的にして、大乘經は詩的戲曲的なり。清楚は變して華麗となれり。特に小乘經典には得至涅槃或は阿羅漢を常用語として自知自覺自作證を勸め、會て成佛の語を慣用せず。又菩提回向の義を缺き、世界論も亦狭少を免れざるものあり。系統連綿の中自ら變化發達の歷程を辿るをうべし。要するに大乘佛教は之を原始佛教に比するに極めて神秘的の分子を含み(1)同時に思辨的考察に富み(2)形式以上に精神を主とし(3)又其の包容の擴大は異分子を攝取するの機會を與へ(4)自讚至らざるなく(5)就中慈悲主義を標榜して常に羅漢佛教に相對せり(6)。

(貳) 「論」に於ける佛陀と教理の變遷

論藏は三藏中最後に成立せるものにして、少くとも第二會訃以後なるべきは固より辨を待たず。但し成形

としての所謂論藏は遙かに後代ならんも、思想としては已に佛在世時に大迦旃延、舍利弗等の思辨に起因し、第二結集に迦陀跋伽論集となり。爾來漸を以て増益加大せしものに外ならず。(結集四以下 讀本註参照)

抑も龍樹世親時代に尙『成實論』『順正理論』等あり。是れ大乘興起後の小乘なり。世には往々時ならざるに開花する秋櫻あり。史實は必ずしも史料編纂の爲めに顯現せるにあらず。思想開發の順序も亦必ずしもヘーゲル流の論理を踏襲するものにあらずと雖も、其間自ら各時代に於ける思想進轉の痕跡を認め得べきものなきにあらず。大小經典其數多しと雖も、序分と流通とに於て佛在世の説法とせざるもの稀なり。然るに論藏は比較的時代の明晰なるものあり。且つ其思想變遷の痕跡を示すこと明かなり。以下主として論に於ける佛陀論の變遷を見、兼ねて佛敎々理の開展が如何に之と聯結するかを見んとす。說一切有部は古來根本上座部の敎義を傳ふと稱するも、眞個の根本上座部は『婆娑論』に傳ふるが如きものならざりしなるべし。然れども別に根本上座部の敎義として之を叙述せるの書なし。今假に所傳に従つて上座部の敎義を見るに、宇宙萬有を五位七十七法に分ち、三無爲を除くの外は悉く因縁所成有爲の現象となす。但し其法躰は三世實有にして恒有不滅なりといふ。色心諸法集合の假體即ち我と我所とは共に迷情に過ぎず。煩惱によりて業力あり。業力によりて衆生と世界とあり。所謂法體恆有を主義となし、世界人生を以て業感の緣起となす。此故に解脱は無我を認め煩惱を斷じ業力を滅するにあり。而して解脱涅槃に二種あり、煩惱斷盡するも業感の身體ある有餘涅槃と、身體此に灰燼に歸し、枯寂の境に入りて恰かも燈火の滅したるが如き無餘涅槃と是なり。業

感緣起とその涅槃論とは因地の菩薩を伏惑行因となし、成佛時の身體も有餘涅槃なるが故に、佛身は人類の一人に過ぎず。其壽量、其語言、現實歴史上の佛陀を出でず。以上の所説が果して根本上座部の思想なるや否やは問はず。唯だ論部に於ける佛陀觀も其初めは現實佛陀を離るゝ能はざりしを知らば足れり。

本來一味の佛敎分れて二派となる。上座部は當さに基督教の舊敎に比し得べくんば、大衆部は即ち其新敎なり自由派なり。所謂敎權以外に其主張を持って、敎理の發展を計りしものとす。此部の典籍たる Mahāvastu 中には彼大乘の特色たる菩薩十地の先驅あり。又彼の法顯が大衆部の典籍を得たるは波吒釐子の大乗寺に於てせしが如き、(教六) 此派が特に大乘と密接なる關係あるを知るべし。

大衆部は有部の三世實有法體恆有に反し過未畢竟無體なりといふ。(藏四) 然るに過未無體説は現象事法の當體を指せるなり。是故に若し現象の法體は現在を除きて其體無體なりとすれば、其無體の事法は何故に生滅變化するか。此に於てか一切現象の根本的實體なくんばあらず。無爲有作用の説即ち是れ。大衆部は明かには眞如法性の如きは認めざるも、其意味は含有せるものゝ如し。蓋し大衆部の無爲を立つるや其中、擇滅、非擇滅、虚空の三は有部に異ならざるも。大衆部は此外四無色界の所依をとりて、三無爲に加え、流轉還滅、所謂迷悟緣起の理法を取りて緣起支性、聖道支性となし總て九無爲となす。有部に於ける身心都滅の無爲は此に於てか積極的となれり。但し當然起るべき此九無爲の本體一多の考察は未だ明かならず。されど一步にして九無爲無別體、所謂一元の實體に想到すべき氣運を示せり。